

蒼鋼の冒涜者 2

ブルースチール・ブラスフェマー

榊一郎

Ichirou Sakaki

Illust. 赤井てら

Bluesteel Blasphemer

「――汝が『神殺し』であるか」

新たな街で待ち受けていたのは新たな神の眷属の少女だった!!

絶好調異世界統×剣バトルファンタジー第2弾!!

さ01-04-02

榊一郎

蒼鋼の冒涜者2

ブルースチール・ブラスフェマー

HJ文庫

HOBBY JAPAN

榊 一郎 さかきいちろう

絶賛夏バテ中。心身二元論なんて言葉も在るけれど、やはり身体が弱ると精神も弱ると激しく実感中。しかし身体メンテナンス以前に、締め切りが集中する悪循環はちょっと何とかしたい。

赤井てら あかいてら

宮城県出身のイラストレーター。二巻にしてまさかの角っ娘…！好きです。角っ娘。流行れ角っ娘。

HJ文庫の最新情報はここから！
http://hobbyjapan.co.jp/hjbunko/

9784798610726

ISBN978-4-7986-1072-6

C0193 ¥638E

1920193006384

定価：本体638円＋税



定期的にフリートラントへと襲い来る魔獣を倒し、神様が板についてきたユキナリ。さらに住み良い街にするため、彼は隣街へと交易の相談に赴くが、そこには地神とヒトとの特殊な共生の形があった。一方、フリートラントでは、ユキナリが留守にしている間に、新たな魔獣の影が街へと忍びよっており——。絶好調異世界銃×剣バトルファンタジー第2弾!!

この本のシリーズ紹介

ブルースチール・ブラスフェマ

蒼鋼の冒涜者

ってどんな話?



異世界に転生した天野行成は土地神に襲われ、転生した際に手に入れた能力と銃知識を駆使し、倒せるはずのない土地神を倒してしまう。そして彼は、神を下したことで新たな神として祀り上げられることに!?

銃マニアの青年は異世界でどうやって神になったのか!?

榊 一郎　作品

プリンセスはお年頃! 1

プリンセスはお年頃! 2

プリンセスはお年頃! 3

模造王女騒動記フェイク・フェイク カーム・ブレイカー

模造王女騒動記フェイク・フェイク ルナティック・シスター

模造王女騒動記フェイク・フェイク エイリアン・ネイション

タタリ・ブレイカー弑子

蒼鋼の冒涜者（ブルースチール・ブラスフェマ）

蒼鋼の冒涜者2（ブルースチール・ブラスフェマ）

HJ文庫9月の新刊

NEW セブンスターズの印刻使い1	著／涼暮 皐
蒼鋼の冒涜者〈ブルースチール・ブラスフェマ〉2	著／榊 一郎
六畳間の侵略者!?20	著／健速
六畳間の侵略者!?20 ドラマCD付き特装版	著／健速



さ01-04-02

榊一郎

蒼鋼の冒涜者2

ブルースチール・ブラスフェマー

HJ文庫

HOBBY JAPAN

榊 一郎 さかきいちろう

絶賛夏バテ中。心身二元論なんて言葉も在るけれど、やはり身体が弱ると精神も弱ると激しく実感中。しかし身体メンテナンス以前に、締め切りが集中する悪循環はちょっと何とかしたい。

赤井てら あかいてら

宮城県出身のイラストレーター。二巻にしてまさかの角っ娘…！好きです。角っ娘。流行れ角っ娘。

カバーイラスト／赤井てら　装丁／ AFTERGLOW

9784798610726

ISBN978-4-7986-1072-6

C0193 ¥638E

1920193006384

定価：本体638円＋税



定期的にフリートラントへと襲い来る魔獣を倒し、神様が板についてきたユキナリ。さらに住み良い街にするため、彼は隣街へと交易の相談に赴くが、そこには地神とヒトとの特殊な共生の形があった。一方、フリートラントでは、ユキナリが留守にしている間に、新たな魔獣の影が街へと忍びよっており——。絶好調異世界銃×剣バトルファンタジー第2弾!!

HOBBY JAPAN

榊 一郎　作品

プリンセスはお年頃! 1

プリンセスはお年頃! 2

プリンセスはお年頃! 3

模造王女騒動記フェイク・フェイク カーム・ブレイカー

模造王女騒動記フェイク・フェイク ルナティック・シスター

模造王女騒動記フェイク・フェイク エイリアン・ネイション

タタリ・ブレイカー弑子

蒼鋼の冒涜者（ブルースチール・ブラスフェマ）

蒼鋼の冒涜者2（ブルースチール・ブラスフェマ）

榊一郎
蒼鋼の冒流者2（ブルースチール・ブラスフェマ）

ブルースチール・ブラスフェマ

蒼鋼の冒流者2

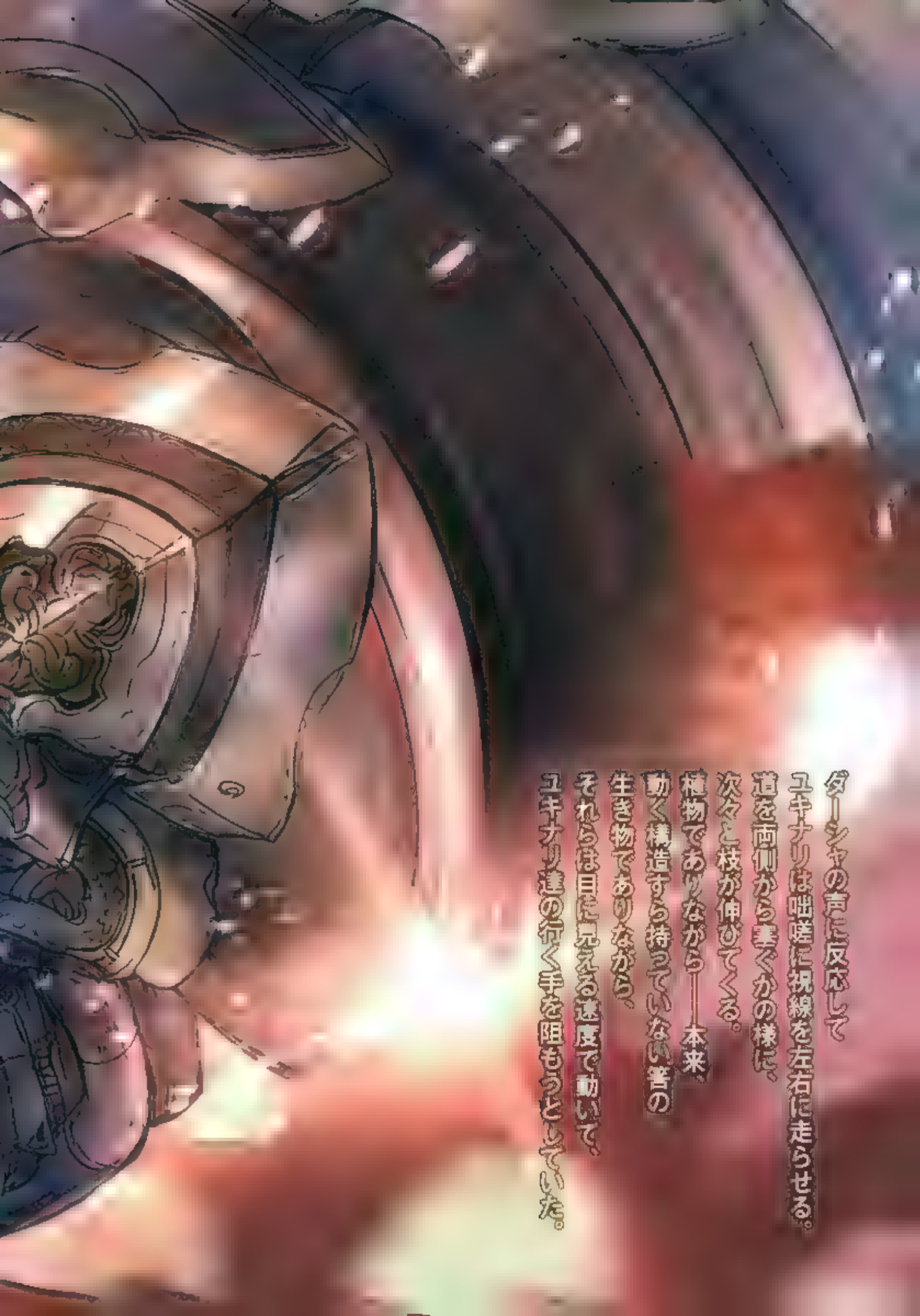
榊 一郎

HJ文庫



HJ文庫


「――其奴が『神殺し』ちあとが」
ターシャが呟く。
そう、それは確かに「女の子」だった。
「女の子」に見えた。
だが……単なる貴女は緑の髪も、
鹿のような――いや、氣の枝のように
枝分かれした角など頭に備えてはいまい。
ウルリーケ
隣町ロストルークを治める地神、イグドゥーラの眷属である少女。
ブルースチール・ブラスフェマ


ダーシャの声に反応して
ユキナリは咄嗟に視線を左右に走らせる。
道を両側から塞ぐかの様に、
次々と枝が伸びてくる。
植物でありながら――本来
動く構造すら持っていない筈の
生き物でありながら、
それらは目に見える速度で動いて、
ユキナリ達の行く手を阻もうとしていた。



スレイプニル

ユキナリが守護聖人像の残骸から創り上げた試作走行機械。いわゆる四輪バイク。聖油を燃料にしている。

だあああああああ

ブルースチール・ブラスフェマ

蒼鋼の冒涜者2

榊　一郎

HJ文庫
596

口絵・本文イラスト　赤井てら

Bluesteel Blasphemer

CONTENTS

序章　骸より出でる命

鬱蒼と無数の木々が生い茂り、昼なお昏い――森の奥。

ウルリーケは、自分に終わりの時が訪れたのだと悟っていた。

「……あ……」

見開かれたままの虚ろな瞳が映す、暗緑の世界。

他に人の姿は無く、獣や鳥の姿すら無く、梢の隙間から降り注ぐ細い木漏れ日が、薄闇を幾つもに分断し、奇妙な模様を描き出していた。

恐らくこれが、自分の眼に映る最期の風景なのだろう。

「……あ……あ……」

既に、意味の有る言葉すら出ない。

当然といえば当然……ウルリーケのこめかみには、深々と倒木の枝が突き刺さっていた。

むしろ、朦朧としているとはいえ、未だ意識が有る事の方が奇跡に近い。

「……う……あ……」

彼女が倒れた先に、先端の尖った枝が真上を向いて在った事が不運なら、彼女が横を向いて倒れてしまったのもまた不運だろう。こめかみは頭蓋骨の中でも最も薄い部分である――刺さる角度と勢いによっては、木の枝でも、これを貫いてしまう程に。

そう。ただただ、ウルリーケは不運だった。

元々は、森にキノコを採りに来ただけだ。

畑仕事と異なり、殊更に力を要しないキノコ採りは、子供達に任せられる事も多い。採るべきキノコの種類や、生えている場所は勿論、どの辺りに危険な獣が出るのか、どの辺りに危険な岩や崖が在るのか、よく知っている。たとえ眼を瞑っていたって、迷う事なんか無い……と、ウルリーケは自信たっぷりに森に入った。

その油断が――文字通りに命取りになった。

前日までの大雨で、斜面の一部が緩んでいた事に、彼女は気づいていなかったのだ。

いつも通りの『近道』をしようと、ウルリーケは幾つか点在する大岩から大岩へと飛び移った。腐葉土は柔らかく、どうしても脚をとられるので、歩きにくいのだ。

ウルリーケが岩に飛び乗った瞬間――突然に、辺り一帯が崩れた。

咄嗟に伸ばした手は、ただ空を掴み、彼女は為す術も無く土砂崩れに巻き込まれた。転がり落ちていく中で、軽い身体は岩にぶつかって何度も跳ねた。

そして――最後に跳ねたその時、倒れ落ちる先に、倒木の枝が在ったのだ。

「……あ……うぁ……」

自分はどうなったのか。よく分からない。

ただ既に身体の感覚は無く、痛みや苦しみも無い。

ただ視界がゆっくりと、赤黒く染まっていく。

（……わたし……し……ぬ……んだ……）

奇妙に静かな諦観だけが、在る。

不思議と、怖くはなかった。ただ、もう両親と会えない事を少し――決して長いとは言えないウチの人生が、その記憶が、断片的に脳裏を過る。豊かとは言えない生活だったが、この世に生まれて十年暮らしへの不満など無かった。

シチューを食べて、母が微笑んだ時の事。

父の農具を持ち出してしまった時の事。

友達と些細な事で、喧嘩してしまった時の事。

初めて、生まれたばかりの仔猫を抱き上げた時の事。

土砂崩れで、根の半数が引き千切られた時の事。

寂しいと思った。

雪の重みに耐えかねて、枝の何本かが折れた時の事。

それから――

（……これ……な……に？）

追憶の中に混じる――異物。

自分だけの思い出ではない。明らかに、別の誰かの『記憶』が混じっている。いや。これは別の誰かではなく、別の何かだ。人間の記憶ではない。人間には根も葉も枝も無い。

ましてや人間は光の『甘み』を感じたりなどしない。

（……わ……た……し……）

水に落ちた血の一滴が、薄まり、溶けていく様に――意識がゆっくりと拡散していく。

そんな中で、ふとウルリーケは目の前に在る倒木の幹から、小さな小さな緑が一つ、芽吹いているのに気づいた。

細い木漏れ日に照らされて、健気に双葉を広げている。

触ればそれだけで折れてしまいそうな、若芽。しかしこの大きな森を成す無数の巨木達も、元を辿れば、こうした新芽から始まった筈だ。

「……」

ふと、畑仕事の最中に父が言っていた言葉を、ウルリーケは思い出す。

光と水だけで草や木は育たない。たとえ育っても豊かに実らない。肥やし、というものが必要なのだという。だから草や木を食べた動物達も、いつかは死んで、土になって、草や木が豊かに育つ為の肥やしになるのだ――と。

（……わ……たし……も……この森の樹になる。

死んで。腐って。いつかは木を介して自分とあの若葉は繋がっている。今、自分はあの新芽の滋養になりつつあるのだと――あの新芽の一部になるのだとウルリーケは思った。

それがどういう事か、正確に理解するだけの知恵も知識も彼女には無く、何よりも、もう複雑な思考を回すだけの余力が、彼女には残されていなかった。

「……」

ウルリーケの心臓が、鼓動を停止する。

やがて――まるで彼女の死を悼むかの如く、森の上に雨が降り始めた。

分厚い枝と葉の層を抜けた雫が少女の遺体の上に降り注ぎ、そして――すぐ側で、誕生の時を謳歌する小さな小さな生命を濡らし続けていた。

第一章 神死して後

刃物の様な鉤爪が空を薙いだ。

「――ッ！」

いや。それは効果という面においては、刃物そのものであろう。

緩やかな曲線を描く鉤爪の軌道――それに触れた瞬間、その数本、宙に舞った。まるで巨大な鎌に刈られたかの如くに。

鋭利で長大で……しかも強靱。

恐らく普通の人間ならば、腕なり脚なり頭なり、掴まれた部分から刈り取られていた事だろう。そう。斬り付けた訳ではない。ただ掴みに来ただけだが、それだけの行為ですら、人間を容易く殺傷し得る――並外れた殺傷力。

それを一度怒らせれば、死を賜らずには、おられぬ。

ひ弱な人間など、等しく一撃必殺――圧倒的なその力は、生殺与奪の権威そのものだ。

故にそれらは、畏怖をもってこう呼ばれる。

――『神』と。

「ちっ……」

身を沈めてぎりぎりで鉤爪の一撃をかわし――ユキナリは舌打ちした。

「やってくれる……！」

絶好の機会――そう判断して彼が前に出た、その瞬間。

亜神は、それを待っていたかの様に攻撃を仕掛けてきた。

いや、偶然ではない。明らかに意図的だった。

いわゆる『交叉法』――単に、その攻撃は避けにくいだけでなみ込む力が、相手の攻撃に上乗せされて返ってくる。身を沈めたら、ユキナリは上半身を斜めに切り落とされていただろう。

亜神――即ち亜ぐ神。もしくは亜い神。

未だ真なる神にはなりきれていない、神擬き。

亜神とは、そういう存在だ。

既に神のそれに等しい。しかもだが異形の姿に備えた力は、その力を用いる。力の使い方を知っているのだ。

亜神は人間と同様の知性を以て、その攻撃からも分かる通り、人間個人がこれに相対した場合、凌駕し得る要素は皆無、と言っても良いだろう。

ひたすら一方的に、虐殺されるだけである。

「こんの、バケモンがッ！」

しかし……そう怒鳴るユキナリの表情に、恐怖は、無い。

彼にとって、神とは絶対でもなければ無敵でもない。ひたすらその前にひれ伏して慈悲を乞うべき相手ではなく、自らの力を以てねじ伏せ得る『敵』だった。

「ギギイイイイイイイイイッ！」

ユキナリの罵声に応じるかの如く、吼える亜神の声が左右の岩の絶壁に跳ね返った。

今――彼と亜神がいるのは、左右は切り立った崖であり、岩の壁が複雑にうねりながら続いている。さして深い谷の底だ。

はないが、岩は硬く、物陰は少なく、右にも左にも逃げ場は無い。

「――ッ！」

ユキナリは再び前に出る。

同時に右手の得物を右旋回。

斬撃であったが、これは相手の首を切り落とす――それを狙った踏み込みであり、鉤爪と同じく、空を切った。

亜神の巨体が、ふわりと宙に舞いながら後退したからである。

「ちっ――」

またも舌打ちしつつ、ユキナリは更に前進。

今度は下からすくい上げる様にして愛用の得物――〈デュランダル〉を振る。だが、腕と身体を伸ばしたこの一撃も、相手をかすめただけに終わった。

届かない。亜神が更に後方に退きながら、上昇したのである。

「くそ――降りてこい、このローストチキン」

「ギギギキキキー！」

そう毒づくユキナリの視線の先で、亜神は嘲るかの様に羽ばたいて見せた。

この亜神は――鳥だった。

鳥なのだろう、恐らくは。

翼を持ち、羽毛を具え、空を舞う存在を示す言葉を、ユキナリは他に知らない。

しかし、その巨体は『鳥』という言葉から来る印象を大きく裏切るものだった。

あえて鳥という言葉にこだわるならば、怪鳥と表するのが最も相応しかろう。背中には四枚の巨大な翼を広げ、鉤爪は、人間どころか牛や馬ですら驚掴みに出来るだけの長さがある。しかも頭部にはその長大な嘴とは別に、牙を、そして角をも備えていた。

まるで鳥に獣の部品を足したかの様な――大きさを含め、色々と出鱈目過ぎる姿だ。

「ろーす、と、ち、き、ん……？　ナンダ、ソレ、ハ」

数メートルの高さに滞空しながら、亜神がわずかに首を傾げ
言葉を操るのは人間に近い知性の証拠だ。人間とは口や喉が
甲高い声になってはいるが、その喋る内容はユキナリにも充分に聞き取れる。
「食ってやるっつってんだよ」
改めて〈デュランダル〉を構え直しながらユキナリは言った。
「降りてこい、丁寧に羽根むしってから、バラしてこんがり焼いてやるから」
「不思議ナ、事ヲ、言ウ。獣ハ人ニ喰ワレル、人ハ神ニ喰ワレル、コレガ、道理」
嘴から紡ぎ出される台詞にキキキキ、と耳障りな高音が伴うのは――これはひょっとして嗤っているのか。
「やかましい。道理の意味を辞書で引いてこい」
「貴様コソ、人間ノ分際デ、神ヲ食ウ、ナド、身ノ程ヲ、知ラヌナ」
そう言うや否や、亜神は更に上空に舞い上がる。
高く高く、充分に高度をとって――そこから、反転。
轟、と空気が怯えて啼く程の勢いで、巨体が降りて、否、落ちてきた。
「……！」
ユキナリは前に跳んで直上からの急降下攻撃を回避。だがそのまま地に激突するかと思

われた瞬間、亜神は翼を広げて制動を掛け――更に岩壁を蹴って方向転換。その巨体は空中を横滑りして、更にユキナリを追った。

鈎爪が襲い掛かる。

ユキナリはこれを再び身を沈めてかわす――が、目測を多少誤ったか、彼の着る黒い革ジャケットの背中が鈎爪の先端に触れて、大きく引き裂かれていた。

「キキキ、キキキ、ドウシヨウモ、アル、マイ」

再び上空に舞い上がりながら、勝ち誇った様に嗤う亜神。

「剣ヲ、振リ回スノミ、デハ、我ヲ殺ス、事ナド、出来ン。ソウ者、空ヲ舞ウ我、ニ、戦ラレ、弄ラレトモ、剣ヲ、投ゲテミルバレル、ガ、定メアル」

「くっ――」

ユキナリは亜神の言う剣を――〈デュランダル〉を握りしめたまま、悔しげに空を見上げる。確かに亜神は降下する事でユキナリに攻撃を仕掛ける事が出来るが、ユキナリの側からは、空にいる亜神に剣を届かせるのは無理だろう。勿論、狙う事は可能だが、戦いの運びについては、常に亜神が主導権を握っている事になる。

「どうすればいいんだ――」

「知レタ事。喰ワレレバヨイ。我ガ糧トナルガ貴様ノ定メ」

そう告げてまた、急降下を開始する怪鳥型亜神。

対するユキナリは――

「――なんつってな？」

轟音が響いた。

雷鳴の如き、強烈な破裂音。

次の瞬間、ユキナリに肉薄していた亜神は、大きく姿勢を崩していた。

「ソレ、ハ――!?」

亜神の視線がユキナリに、否、彼の持つ武器へと注がれる。刃のすぐ上、妙に大きな拵えの部分から薄い煙を漂わせている――今し方、轟音を発した鋼鉄製の筒部分へと。

それは、銃だった。

ユキナリの〈デュランダル〉は――知識の無いものには一見、拵えが厳ついだけの長剣に見える。だが、実際にはウィンチェスターM92レバーアクション式小銃の切詰型カスタム――〈ランダル〉に長い銃剣を装着した代物、それが〈デュランダル〉の正体だった。

「ギギッ……」

ユキナリが放った44マグナム弾は、深々と亜神の頭部を抉っていた。

今度、交叉法攻撃を食らわせたのは彼の方だったという事だ。如何に反射神経が優れて

いようと、自身もユキナリに向けて急降下中の亜神には、音速を超えた速度で迫り来る鉛弾を避ける事など、出来る筈も無い。

「ギギギイッー」

頭部から血を噴きながらもどうやら密に重なる羽毛が天然の防弾布となって、弾の威力を減殺したらしい。しかも出血はすぐに止まっていた。神を名乗るだけあって止血の概念は知っている様だ。どうやって止血したのかは、ユキナリにも分からなかったが。

「ホローポイントじゃなくて徹甲弾、使うべきだったか」

背後を振り返りながらユキナリは装填レバーを操作、次弾を薬室に送り込む。

そして――

「――ダーシャ」

「……ん」

次に銃声を響かせたのは、〈デュランダル〉ではなかった。いつの間にそこに陣取ったのか。ユキナリの後方――少し大きめの岩の上に、やたら厳つい拳銃を置いて構える少女の姿が在った。

綺麗な少女である。

肩口で切りそろえられた銀の髪。眼鏡の奥で瞬く蒼い瞳。頬は陶器の様に白く滑らかで、まるで精緻に造られた人形の如き、生身の俗臭を欠いたかの如き美しさが、そこには在る。

ダーシャ・ウルバン。

ユキナリにとっては恩人の妹であり――相棒だ。

「……」

ダーシャの構えた銃――二脚と照準鏡付きの狙撃用回転弾倉式拳銃〈レッチリ〉は、ユキナリの〈デュランダル〉と同じ44口径のマグナム弾を使用する。

シングル・アクションと呼ばれる機構を有しており、これは西部開拓時代に流行した、比較的旧い形式だが……

轟音が響く。しかも立て続けに。

「ギイイエエエエ!?」

悲鳴を上げる亜神の身体に、着弾を示す赤い花が咲いた――瞬く間に、幾つも。

手動連射。

いちいち撃鉄を起こして、引き金を引いて撃つ、という動作を繰り返すのではなく……右手で銃を固定、引き金を引きっぱなしにした状態で、左手を使い、素早く、繰り返し撃鉄を起こす射撃法。撃鉄を何度も繰り返し起こす動作が、扇を使うそれにも似て見える事

から、そう呼ばれる。

シングル・アクションの回転弾倉式拳銃特有の射撃法だ。熟練者ともなれば、機関銃の如く、銃声が一音に聞こえる程の速度で、六発を撃ちきる事も出来るという――さすがにダーシャは、未だその域には達していないが。

「ソノ、ソノ、武器ハ、武器、武キキキキッ!?」

余程に驚いたのか、亜神は言葉が怪しくなっている。

防弾繊維並みの表皮を具えるとはいえ、六発の44マグナム弾をふらふらと滑空――飛行を維持出来ずに地面に接触、大きく跳ねて、岩肌に激突した。

「神擬きが調子に乗ってんじゃねえよ。とりあえず死んどけ」

そこへ――止めとばかりに吼える、ユキナリの〈デュランダル〉。

「ギゲッ……！」

亜神の頭部が弾けて真っ赤に染まった。

いかにその体毛が防御力に優れていても、同じ箇所に二発三発と集中して撃ち込めば、銃弾は相手の体内に深々と潜り込む。勿論、それには射撃の正確さが必要となるが――地に落ちて機動力を失った巨鳥など、容易い的でしかなかった。

「ゲッ……」

痙攣しながらその巨体が地に沈み――そして、動かなくなる。

「……ま、こんなもんかな」

ユキナリは、溜息をついてそう言った。

「出てきていいぞ」

それから近くの岩陰に向けてそう告げる。すると――十名近い人影が、おっかなびっくり、といった様子でそこから顔を出すのが見えた。

「……あの……地神さま……？」

「地神じゃな――いや、ごめん、地神なんだったな」

頬を掻きながら、決まり悪そうに言うユキナリ。

「その……亜神を斃してしまわれたのですか？　お一人で？」

「まあ二人だけどもな」

ダーシャの方を一瞥して、そう答えるユキナリ。

今回の『調査』に同行した者達は、いずれもユキナリが『神殺し』である事は知っていても、実際に戦う場面をその眼で見るのは初めてだった。だからこそ、目の前で繰り広げられた戦いが、まるで夢か幻の様にも思えたのだろう。普通の感覚で言えば――人間が一人や二人で神を殺すなど、それこそ、夢物語でしかなかったからだ。

「さて、調査を再開――」

そこまでユキナリが言った時。

「――ユキー！」

ダーシャが鋭い声で注意を促す。

咄嗟に振り返ったユキナリは――殺した筈の亜神が、大きく跳ねるのを見た。

次の瞬間、怪鳥型の亜神は、四枚の翼で猛烈な風を起こしながら上空へと舞い上がる。

「――擬死!?」

頭上を振り仰ぎながら叫ぶユキナリ。

一部の動物には、天敵等を前にして『死んだふり』をするものがいるというが……どうやらこの亜神も、死体を装って、ユキナリの注意がそれるのを待っていたらしい。

これは……ユキナリが迂闊だったと言わざるを得ない。

亜神の巨体は、普通の鳥や獣が成長して手に入れたものではない。大抵の場合は『核』となる老成した個体を中心に、十数匹、あるいは数十匹が霊的な結合をして、大きな一匹であるかの様に擬態している。

亜神が死ねば、当然にその個体群は結合力を失って『ばらけ』る。だが先の亜神が分解する様子は見えなかった。それがつまり、未だ亜神が死んでいない証拠であった訳だ。

「逃がさ――……」

咄嗟に〈デュランダル〉を構えたユキナリだったが……猛烈な勢いで上昇し、逃げていく亜神の後ろ姿を見て、短く溜息をついた。有効射程外だ。

「まあ、こんだけやられりゃ懲りたろ」

別にユキナリは、あの怪鳥型亜神に、恨みや憎しみを抱いてた訳ではない。

襲ってきたから反撃しただけだ。逃げるというのならば、見逃しても構わない。

「ユキ、浅はか」

ダーシャが唐突にそう評してくる。

基本的に喜怒哀楽が薄いというか、表情にあまり内面が滲まない少女だが……今は何となく得意げにも見えた。多分、比較的つきあいが長いユキナリにしか分からない程度の表情だったが。

「浅はか？　何が？」

「あれは、鳥。三歩歩けば忘れる。懲りない」

「……そうですか」

苦笑して、亜神が飛び去った方を眺めるユキナリ。

とりあえず空飛ぶ怪物が引き返してくる様子は、無い様だった。

辺境の街――フリートラント。

良くも悪くも王都から遠く離れているが故に、強い支配を受ける事無く、事実上の自治を許されている地方都市である。王国に属する上で課されているのは、定期的な納税と、周辺交易路の維持管理義務だけだ。

ただしこれはフリートラントに限った事ではなく、王都から遠く離れている辺境地では、よく見られる政治形態である。

こうした地方都市は、元々王都が未開地を切り開いて作った訳ではなく、何度か派遣された王国の遠征軍が、そこに存在する集落、もしくは小国を、半ば強制的に併合した結果である。街長や領主には、元々その地を治めていた者達がそのまま任じられる事も多い。

当然、こうした地方では、文化や風習も、王都とは異なる部分を数多く有する。

その一つが、地神を崇め奉る名も無き宗教と――生け贄の儀式だ。

特定の土地と霊的結合を果たし、その地を様々な形で支配する神――地神。その庇護を得られれば、豊穣を約束され、亜神や異獣といった怪物達からの被害を受ける事も無い。

だがそれには大抵の場合、何らかの代償を必要とする。

フリートラントにおいては、定期的な生け贄が、それに相当数年に一度の、乙女を地神に捧げる――その儀式の為だけに安定した生け贄の供給の為に、神官達が存在し、彼等は度として確立され、数百年以上、続いてきたのである。

だがその『伝統』は、ある日突然に中断を余儀なくされた。

ふらりとこの地を訪れた二人の旅人――いや、実質的には一アマノ・ユキナリ。

髪は雪の様に白く、眼は血の様に赤く、しかしそれ以外は何平凡な彼が、偶然、儀式の最中に居合わせてしまい、生け贄をしてしまったのだ。

結果……フリートラントとその周辺は、地神の存在しない『空白地帯』となった。

地神がいなくなる事で生じる不都合は、大きく分けて二つ……前述の通り、亜神や異獣の脅威に住民達がさらされるという事と、農耕における収穫量の低下だ。前者はユキナリ本人が地神の役目を果たす事でどうにでもなるが――後者はそう簡単にはいかない。

「さて。ここらで休憩して昼飯にでもするか」

ユキナリはそう言って、後ろを振り返る。
そこには、今回の『調査』に同行してきた十人ばかりのフリートラント住人が列を作っていた。男が八人。女が二人。これにユキナリとダーシャを加えた十二名が、調査隊の面子になっていた。
「ユキナリ様！」
そう言って、ユキナリの元に駆け寄ってくるのは、小柄な少女だった。
三つ編みにして垂らした長い亜麻色の髪と、おっとりと優しげな琥珀色の瞳、それに豊かな胸の膨らみが印象に残る。仕草や表情についても、どちらかというと大人しくて地味な雰囲気なのだが、それがまた見る者の庇護欲を――あるいは嗜虐心を刺激したりもするだろうが。
ベルタ・ヴォーマンというのが、この少女の名である。
「お疲れ様です、これを――」
とベルタが差し出してくるのは水筒である。
この少女が、ユキナリが地神を殺す原因となった、元生け贄代わりにユキナリに捧げられた地神がいなくなってしまい、ユキナリの『所有物』だった。ユキナリ本人としては特にベルタは、今は自他共に認めるユキナリの『所有物』だっ望んだ訳でもない関係だが、

他に行き場の無いこの少女を放っておく訳にもいかず、なんだでいつも側に侍(はべ)らせている。

しかし……

「必要、ない」

と――ベルタの心遣(こころづか)いを否定するのは、ユキナリではなくダーシャである。

いつも通りの無表情だが、その口調に苛立(いらだ)ち若干(じゃっかん)、やはりユキナリだけであろうが。

それに気がついているのは、

「ですが、ダーシャ様」

「ユキはこちらを、飲む」

いつも持ち歩いている鞄(かばん)を背中から降ろし、中からとりだした小瓶(こびん)を示すダーシャ。

「それは一体……？」

「特製栄養液」

そこはかとなく得意げな口調でダーシャは言った。

「私が調合した、飲み物。私の姉は錬金術師(れんきんじゅつし)。当然、私も調合は得意」

「はぁ……」

きょとんとした表情を浮(う)かべるベルタ。

ダーシャはそんな彼女に見せつける様に、ユキナリに対して小瓶を渡した。
「ユキ、飲んで」
「いや。ちょっと待て」
ユキナリは嫌な予感がしてそう言った。
「お前が知ってるのは錬金術の薬剤の調合だろうが」
「それが？」
眼鏡の奥で蒼い眼を瞬かせるダーシャ。
「だから料理とかとは別物っていうか……そもそも、味見したか？」
「必要ない。調合表に正確に従ったから」
「いや、しろよ……っていうか、絶対、失敗してるだろ」
ユキナリは溜息をついてそう言った。
ダーシャは確かに錬金術師イルジナ・ウルバンの妹で、彼女の許で助手をしていた為、ある種の知識は非常に豊富だ。だが目が見えなかった期間が非常に長い為、調合やら何やら、実際の作業はさせてもらえなかった。
なので実践はさっぱりというか、単なる知識だけの、頭でっかちなところがある。
以前、二人だけで旅をしていた時に、何度か料理に挑戦していたが……大抵は味見も何

もせずに手順だけを正確に踏みたがる為、臨機応変さに欠けるというか、実際の素材に合わせて味を調整するという感覚が無いのだ。

当然、彼女が作った料理は、必要以上に甘かったり、辛かったり、酸っぱかったり……そういう訳で、色々と懲りたユキナリは、料理をダーシャに任せなくなった。

「……ユキ」

上目遣いに、眼鏡の奥からその蒼い瞳でユキナリを睨んでくるダーシャ。

「ベルタの水の方が良い、のか？」

「何なんだ、その張り合い方は……というかベルタのかどうか分じゃなくて、俺は飲むなら水の方が良いの。まあ俺の為に作ってくれたのは有り難いけどさ」

「……分かった」

ダーシャは頷くと小瓶を引っ込め、別の小瓶を取り出した。

「蒸留水。飲んで」

「また、たかが飲み水に大層な!?」

煮沸消毒位ではユキナリも驚かないが、いちいち蒸留しようとすると結構な手間である。

不純物は殆ど除去出来るだろうから、確かに飲み水としては良いのかもしれないが。

ともあれ、ここでダーシャの提案を続けて蹴り続けると、明らかに彼女の機嫌が悪くな



ってくる。怒鳴ったり喚いたりはまずしない少女だが、それだけに深く静かに怒る為、いざ機嫌を直して貰おうと思うと、非常に手間取るのだ。

「まあ、いただくよ」

そう言ってユキナリは、ダーシャから小瓶を受け取る。

すると――ここまでは黙って成り行きを見守っていたベルタが、笑顔で言ってきた。

「ではユキナリ様、お食事はこちらに」

と小さな包みを差し出してくる。

「必要、ない」

と再びダーシャがそこへ割って入った。

「いや、必要だけど。必要なんですけど、ダーシャさん？」

「ユキはこちらを、食べる」

と持ち出してくるのは、一旦は引っ込めた『特製栄養液』である。

「いやそれ飲み物だし」

「栄養満点」

「いやそうかもしれないけど、普通に飯食わせてくれよ!?」

悲鳴じみた声を上げるユキナリ。

どうもダーシャは、何かにつけてベルタと張り合おうとする。き下がる事が殆どなので、揉め事になったりはしないのだが、こタにも少し気の毒である。

それ以前に、飲食の事に関しては今ひとつ、ダーシャは信用なしてはベルタの弁当の方が安心して食べられるのだが……そんなダーシャは拗ねる。

「何やってるんですか」

――と、呆れ気味の口調で言いながらやってきたのは、調査隊フィオナ・シリングスである。

こちらは色々な意味で、ベルタとは対照的な少女だった。

鮮やかな金髪も、翡翠色の瞳も、実に艶やか。目鼻立ちはくっきりしてそうな雰囲気である。何かにつけ受け身なベルタに比して、常に先頭に立って他人を従えて歩く様な積極性が感じられる。

それも当然――フィオナは街長の娘であり、病気を患って床に臥せている父の代わりに、街長代行を務めていた。他人からの指示を待っていれば良い、という立場ではない。この積極性が彼女本来の性格からか、街長代行の肩書きによって自然と身についてい

ったものなのかは、ユキナリにも分からないが。

今の彼女は調査活動の邪魔にならないようにという考えからって束ねていた。元々落ち着いた言動の多い少女なので、何かれがまた年相応で可愛らしく見えた。

「……いやまあ、別に」

と曖昧に誤魔化すユキナリ

だ、と説明するのは簡単だが、何やら自意識過剰な感じがして

「ところで、ここから先はどうするんです？」

フィオナが自分達の向かっている方向を指さして言った。

そこには——ちょっとした小屋程もある大岩が、行く手を阻んでいた。

左右には切り立った崖。つまりは大岩を登るのでもない限り

キナリが一旦休憩して昼食を摂るのを宣言したのも、この為だ

「どうって？」

「あんなものが在っては、水を引くなんて——」

ユキナリに土地を直接『管理』する力は無い。

だが農耕事情を改善する方法は別に地神頼みと限った訳でもないだろう。まずは潤沢な

水資源の確保、と考えたユキナリは、北の湖から街の近郊まで水路を引く計画を立てた。
だが湖と街の農耕地の間には結構な距離が有る。
水路を丸ごと整備するのはかなり手間が掛かるだろう。なので利用して水を引けないか――それを調べにやってきたのだ。
可能であれば、そのまま水路を引く為の工事もして帰る積もりだったが。だからこそユキナリだけでなくフリートラントの住人達も何人か連れてきたのである。
しかし、その途中で谷を丸ごと塞ぐかの様な大岩にぶつかった訳で――
「ああ。まあ、あれ位なら何とかなるよ」
あっさりとそう言うユキナリは。
「何とかって……」
「んー。どうせなら先にやった方がいいか。ベルター！」
「はい、ユキナリ様」
名を呼ばれて嬉しそうにベルタが応じる。
「皆に、弁当広げるのはちょっと待ってくれって言ってくれ。なったら、たまんないだろ」
「砂まみれ……ですか？」

「ああ。頼んだよ」

そう言ってから――ユキナリは大岩に向かって歩き始めた。

同時に頭の中から、幾つかの知識を引っ張り出してやる。

化学の構造式。物理の演算式。

いずれもユキナリが『前世』で得た知識であるが、実のところ、『生まれ変わる』前は思い出した事など一度も無かった。自由自在に自分の過去から記憶を引っ張り出せる様になったのは、この身体になってからだ。

人間の脳は、一度でも見て記憶した情報を、失ったりはしないという。

ただし多くの人は、それを思い出せなくなる――意識の表層に引き出せなくなる。

一度に扱える情報量が限られている上、多くの記憶は、時間が経てば経つ程に、意識の奥底に押し込まれていくからだ。

だが一度死んで並列的に整理されたのか、それともこの『身体』の特性なのか……とにかく、ユキナリは自分の記憶をまるでパソコンで検索するかの如くに探し出せる様になった。

「……」

右手で大岩に触れる。

ユキナリは頭の中で、大雑把な計算をすると――意識を集中。

「……ん」

青白い光がユキナリの掌と時間にしてわずかに数秒。岩の間から漏れる。

そして――

「みんな、ちょっと下がってくれー」

ユキナリは背後を振り返ってそう告げた。

「ちょっと派手な事やるからなー　それと、念の為、耳塞いでー」

何人かはユキナリが何を言っているのか分からないといった様子で、きょとんとした表情を浮かべていたが、フィオナが彼等に命じて、耳を塞がせた。後ろに下がらせた。

「そんじゃ……ま」

大岩に眼を向けつつ十数メートルばかり後退。

それからユキナリは、おもむろに背中の〈デュランダル〉を抜くと、先ほど手を当てていた部分に向けて――発砲した。

低く鈍い――爆音。

次の瞬間、大岩はその輪郭を崩し――更に次の瞬間には無数の破片となって谷底に堆積していた。少しは空中に砂粒となって舞い上げられたが、あまりべルタ達のいる所までは届かなかった様だ。

予想以上に音が小さかったのは、むしろ大雑把ながらも計算が合っていた証拠だろう。轟音が聞こえるという事は、それだけ無駄なエネルギーが空中に放散されているという事に他ならない。

「――ユキナリ」

背後から聞こえてきた声に振り返ると、眼を丸くしたフィオナが立っていた。どうやら駆け寄ってきたらしい。少し遅れてダーシャとベルタも駆け寄ってくるのが見えた。

「一体、何をしたんですか？」

「物質変換――つっても分からないよな」

苦笑してユキナリは言った。

「火薬は分かるよな」

「それは……まあ」

曖昧に頷くフィオナ。

存在そのものは以前から知っていた様だが、実際に火薬を――それが爆発する様を見たのはユキナリがフリートランドに来てからだという。恐らくその製法は殆ど一般には知られておらず、金や銀と言った貴金属並みの貴重品なのだろう。

「俺は〈御遣い〉だからな。砂を金に変える事も出来れば、触れた岩の一部を火薬に変える事だって出来るんだよ。今のはそうやって岩を砕いたんだ。本当はまあ、岩を丸ごと別の便利な何かに変えられれば良かったんだろうけどな、さすがに一度に物質変換出来る質量には限界がある」

だからこそ、岩を丸ごと空気か何かに変えてしまうのは無理だった。

「本当に……〈御遣い〉なんですね」

何やら感慨深げな口調でフィオナが言う。

「何だよ今更。俺が物質変換の力使うの見るのは、初めてじゃないだろ？」

「それはその通りですが。今までは戦う時しか使わなかったでしょう？　それも出来るだけ使わないようにしてきた」

「……まあ、な」

ユキナリは曖昧な笑顔を取り繕って言い――それから尋ねた。

「気持ち悪いか？」

〈御遣い〉とは、ハリス真教会と呼ばれる宗教組織が、布教目的の為に創り上げた人造人間の事だ。錬金術の粋を集めて造られたそれは、生きた錬金術装置であり、人々の前で分かり易い『神の奇跡』を見せびらかす。

いわば客寄せの人形なのだが、それも勿論、そんなものに自我など要らない。教会の道具だからだ。人造人間を起動させるには、人間の魂が必要であるらしいの格は、排除されるべき夾雑物に過ぎない。

だが……ユキナリのこの身体を作ったイルジナ・ウルバンは、自我を殺さなかった。結果として彼女は命令違反に問われ、教会への叛意有りとして処刑されてしまったのである。

ともあれ――

「気持ち悪い？　いえ、別に」

とフィオナは言った。

「ダーシャさんに頭が上がらない所は、情けないと思いますけど」

「いや、そういう話ではなくてな？」

「言ったでしょう、見た目に思ってますが……というは普通の人間と変わりませんし。ちょっと少し悪戯っぽい表情で尋ねるのは、さすがに不遜でしょうか、我が神？」

「私は単純に驚いているだけですよ」

「……そうか」

ユキナリは肩を竦める。

改めてユキナリが人間以外のモノだという事を見せつけられてきたのかとも思ったのだが――どうも杞憂だったらしい。

「信じられないなら、今夜にでもユキナリの寝室に行きましょうか？」

からかう様にそう言ってら、こういう表情をするとフィオナ。元々つり目がちで気が強そうな顔立ちであるから途端に、猫っぽく見える。

「なんでそうなるよ」

「ユキ――女たらし」

「だからダーシャはいちいちフィオナの冗談を真に受けるなって」

恨みがましく眼鏡の奥から半眼で睨んでくる少女に、ユキナリは言った。

「冗談などと言われるのは心外ですね」

「俺をいじめて楽しいか、街長代行？」
「神様をいじめるだなんて恐れ多い」
と言いつつ明らかにフィオナは笑っている。
「あ。よろしかったら私も……その、ご奉仕を……」
「ベルタもいちいちフィオナの冗談に乗っからない」
「冗談、ですか？」
不思議そうに首を傾げる所を見ると、どうもこの少女は徹頭徹尾本気らしいのだが。
「ともあれ――地図の通りなら、この先がもうすぐに問題の湖だから、水路を引く上で一番の難所は突破出来た事になるかな。すまないけど男衆は瓦礫を退けてくれないか。ああ、飯食った後でいいから」
「はい、勿論。何もかもユキナリにして貰う積もりはありませんよ」
フィオナが頷いて、やはり大岩がどうなったのかを近くで見ようと歩いてきた男達に向けて指示を出す。ユキナリの見せた『奇跡』に呆然としていた彼等も、具体的な指示を出されてむしろ安心したらしい。文句を言う様子も無く、彼等は揃って頷いた。
「さて――今度こそ本当に昼飯にしようか」
肩凝りをほぐすかの様に右の肩を回して言うユキナリ。

そして――

「ユキ、特製栄養液」

「……わかりました、いただきます」

そこはかとなく得意げな様子で、小瓶を差し出してくる銀髪の少女を前に……ある種の諦念を覚えながら、ユキナリは頷いた。

その日の『調査』と土木作業は、日没前に終わった。

いや。日が暮れてきたので一旦中断したという方が正しい。日が落ちれば、当然ながら世界は闇に沈む。亜神や異獣に限らず、夜眼の利く獰猛な獣が出る可能性が増えるし、普通の市民にとって、怪物無法者の類が襲ってくる場合も有るのと同じだ。

いくらユキナリが『神殺し』とはいえ、戦う力を持たない十人もの同行者を守るのは骨の折れる作業である。危険性の高い時間帯に作業をする意味は無い。

「皆さん、今日はお疲れ様でした」

一同を見回して、フィオナは労いの言葉を掛ける。

街に戻った調査隊一行は、これは元々、祭祀行列の準備をする為の催事用の広場で解散する事になった為の場所だった。当然ながら、神官達の住む神殿の、すぐ側に在る。

ちなみに通常は、神を祀る儀式の為の建物を、神の殿堂——神殿に設けられた生け贄の祭壇とその周辺こそが神殿と呼ぶ。

この理屈から言えば、山中の神殿の方が神殿と呼ばれるべきであって、単に神官達の住む神殿と呼ぶべきでは無いのだろう。

だがフリートラントでは伝統的にどちらも神殿と呼んできた上、二年に一度の生け贄の儀式が行われる時を除けば、わざわざ山中の神殿に出向く者も居なかった。この為、フリートラントにおける日常会話の中で『神殿』と言えば、こちらを指す事が多い。

「気をつけて帰ってください」

フィオナがそう告げると、調査隊の男達はユキナリの方に一礼してから、それぞれの方向に散っていった。

さすがにもう完全に日が落ちている為、広場には篝火が焚かれている。

揺らめく炎に照らされて、広場に描き込まれる光と影の複雑な濃淡。

そんな中——

「……」

ふとユキナリは傍らを見て、ベルタが何か複雑な表情をしている様な、笑っている様な、あるいはそのどれでもない様な、泣いている様な、幾つもの感情が入り混じっている様に見える。

「ベルタ？」

「……あ、はい」

名を呼ばれて、眼を瞬かせて――それから首を傾げるベルタ。

「なんでしょう？」

「大丈夫か？　なんか、こう、今にも泣き出しそうな――いや、違うか」

上手い表現が見つからずにユキナリも首を傾げる。

「とにかく複雑そうな表情してたけど」

「……私……此処から、出発して……」

何かを懐かしむ様な笑みを浮かべて、ベルタは言った。

「もう二度と……戻ってくる事は無いって思っていましたから」

言われてみれば此処は、かつてベルタが『巫女』という名の生け贄に仕立て上げられた場所だ。彼女にしてみれば、感慨深いのも当然だろう。まして広場に面した神殿の向こう

側には、彼女が育った孤児院も在る。
「あの時の私に、もし、話し掛ける事が出来るなら……」
ベルタはふと、笑みに、はにかむ様な色を混ぜて続ける。
「教えてあげたいです。大丈夫、もう一度此処に戻ってこられた、出来なかった、素晴らしい御方とお会いして、御一緒さ
「ベルタ……」
胸元を両手で押さえながら、嬉しそうにそう言うベルタを、いたが——彼女の姿のその向こうに、ふと、あるものを見つけた。
神殿の——窓。
細めに開かれた鎧戸の隙間から、こちらを覗いている者が居る。勿論、神官だろう。ユキナリがそちらに視線を合わせると、鎧戸は慌てた様に閉じられた。
「——ユキ？　どうした、の？」
ダーシャがユキナリの顔を覗き込んでそう尋ねてくる。
「ああ、いや……別に」
「……ベルタを、見てた？」
確かにベルタの肩越しに建物を見ていたので、ダーシャの位置からは、ユキナリがベル

タに見とれていた様にも見えたかもしれない。
「……やはり、胸？」
「何の話だよ。ベルタじゃなくて、あっちの建物見てたの」
そう言ってユキナリは神官達の住む建物を指し示した。
「神官達が俺の方を睨んでた」
「……あ」
眼鏡の奥で蒼い双眸が瞬いた。
「そういう事。ま、これは仕方ない。ダーシャは気にするな」
「でもユキ……」
「いいから」
笑顔でそう言うと、ユキナリはダーシャの頬に手を伸ばしてダーシャの頬に触れた。
ダーシャは、生来の白内障で……目が見えないまま育ってきているが、どうしても視力だけでは何かと不安に感じる事があるらしい。
リが作った人工水晶体によって、普通の人間と同様の視力を得
だから目の前に立って言葉を掛けてやるよりも、頬なり髪なり手なり、何処かに触れてやる方が安心するのだ。

今もダーシャはユキナリの手に自分の掌を重ねて、体温を確かめているかの様だった。普段あまり感情を表に示さない分だけ、そうした仕草がまた、この少女はひどく愛らしい。ユキナリがそのまま少し掌を動かして頬を撫でてやると、彼女は猫の様にその眼をくすぐったそうに細めて、小さく笑った。

「――ユキナリ」

調査隊の面々を解散させたフィオナが、声を掛けてくる。

「明日以降の事、打ち合わせしたいのですけれど……うちの屋敷にいらしてくださいますか？　勿論、ダーシャ、ベルタも一緒に。何でしたら今日は部屋を用意させますが」

現在、ユキナリ、そしてダーシャ、ベルタが住んでいるのは街から少し離れた場所にある『神殿』だ。

これはかつて地神の神殿があった場所に、ユキナリ達の為に急遽建てられたものだが――実の所、急拵えの感が否めない。建物の造りとしてはしっかりしているので雨風をしのぐには十分なのだが、便所や風呂場といった設備が、使いにくいのだ。

「助かる。ついでに風呂も使わせてもらえると、すんごく嬉しい」

「それは勿論。そのままでは埃だらけ、砂だらけ、ですし」

フィオナは苦笑して頷く。

シリングス邸には近くの源泉から温泉が引かれている。この使えるのである。ちなみに…この湯を冷まして農作物の水遣りは考えたのだが、どうやら水質に問題が有るらしく、植物にった。以前に同じ事をフィオナも考えたらしく、既に試した事「ユキナリ様、お背中流しますす」
「ああ。いいですね、それ。皆で一緒に入りましょうか」
ベルタの言葉を聞いてフィオナがそう提案してくる。
「ユキ、女たらし」
「いい加減、俺の意思でない事を理解してくれませんかね、ダーシャさん」
上目遣いに睨んでくる少女に、ユキナリは肩を落としてそう言った。

●

シリングス邸の広間では床に直接、近隣の地図が広げられていた。
元々これは地図を完全に広げきれる程の、前後左右に大きな机がシリングス邸には無かった為であるが――食事の際に使う机は前後に長いが、幅が足りない――ユキナリとして

は意外な利点にも気づいていた。
立ち上がると、それだけで広い範囲を俯瞰出来るのだ。フリートラントと、北の湖との域も含めて『守護』せねばならないユキナリにしてみれば、それは必要な視点だった。
「今日は峡谷の大岩を退けてから最短の経路を拓いた事になる訳ですが……明日はどうします？」
地図を挟んで対する正面に立ちながらフィオナがそう尋ねてきた。
ちなみにユキナリの右横にはベルタ、左横にはダーシャが寄り添って立っている。
何となくなのだが、この街に来てからというもの、ユキナリの左横がダーシャの定位置になっている。彼女が意識的にユキナリの左に居るというよりは、ユキナリが半ば無意識の内にダーシャを左に置く位置に立っている感じだ。結果としてベルタが右につく事が多い。
「現状は、単に渓谷と湖を繋ぐ寸前まで行った――ってだけだからな。ただ繋いで水流せば良いってもんでもないだろ。それこそあと一回、発破掛けれを爆破して退ければ、湖とフリートラントは繋がるだろうけどる為には、細かい整備もしないと駄目だろ。だよな、ダーシャ」
「ん――肯定」
と話を振られたダーシャが頷く。

錬金術師の助手として、蒸留器などの様々な器具と薬剤を扱っていた為、流体というものの性質を彼女はよく分かっている。実験器具と、水路では規模が全く異なるが、基本は似た様なものだ。

「だから一旦、北の湖辺りまで出掛けるのは今日で終わりにしよう。今後しばらくは、街道沿いに用水路を掘ったり、田畑の近くにまで流れ込む支流を掘る作業に入る。で――これは基本的には体力勝負の仕事だから、街の男衆に頼みたい。いな亜神も来ないだろうし、数カ所、同時進行で。掘り方は最初に渡した地図に沿って」

勿論、ユキナリの〈御遣い〉としての能力を用いれば、触れた土砂を空気なり水なりに換えて用水路を掘っていく事も可能なのだが――正直、物質変換の能力を使って用水路整備をするのは、あまりに効率が悪い。

「俺からの言葉じゃ、なかなか街の人は動いてくれないだろうから、その辺はフィオナに頼めるかな」

「分かりました。で――ユキナリはその間に何を？」

「未だ色々考え中だけどな……農地自体に、改良を加えたい」

ユキナリは『前世』の記憶から、役立ちそうなものを引き出しつつ、そう答えた。

「フリートラント周辺の土地は、痩せすぎ、とは言わないまでも、肥沃って訳でもないし

な。簡単な肥料を作って……いや、その前に農具の改良か、とにかく土地を『元気にする』為の方法論を確立したい」

田畑の様に、一定面積に作物を集約して育てる方法は、大抵の場合に土地を『疲弊』させる。土に本来含まれている肥料や空気を作物が根こそぎ吸い上げてしまう為、一種の荒れ地になっていくのだ。当然、雨水や大気にも肥料となるべき窒素やその他の物質は含まれているが、到底、それだけでは追いつかない。

作物を育て、収穫し、その後は土地を休めたり――耕し、陽に当て、更には肥料を加える事によって土を『再生』してやる必要がある。勿論、フリートラントにおいてもそうした行為は行われているが……あまりに原始的で、しかも経験則に依っている為に、効率が悪いのだ。

コンバインとは言わないまでも、農具の改良によってより大規模に農耕が出来る様になるのではないか、とユキナリは考えていた。永く使って硬くなった土には根も張りにくい。その効率化も可能ならしておくべきだろう。

現状は、牛や馬に、大型の鋤を引かせている様だが――

（……簡単なモーター位だったら作れるかもしれないが、発電施設まで行くと難しいな。用水路が確保出来れば、水車はどうにかなるか？　しかし――）

ユキナリは『前世』の記憶を検索しながら、そんな事を考える。

単純なモーター――銅線を巻いて永久磁石と一緒に作る代物（しろもの）ならば、小学校の実験で作った覚えがあるが。流石（さすが）に実用的な発電機の類となると高校生の知識では少々荷が重い。原理は分かっていても、設計の細かな部分が分からない以上、これは試行錯誤（しこうさくご）するしかないだろう。

ユキナリが自由に〈デュランダル〉や〈レッチリ〉を作り出す事が出来るのは、『前世』で所持していたモデルガンを、分解して整備していたお陰（かげ）だ。

「とにかく俺は土地と霊的（れいてき）結合して、これを支配する、とか出来ないからな……他の方法で補うしかない」

「……なるほど」

フィオナは感心した様子でしきりに頷いている。

彼女は王都の学院に留学して学んでいた事がある為、このフリートラントの住人の中では飛び抜けて博識である。恐らく頭の回転も良い方だろう。ユキナリの話も殊更（ことさら）、噛（か）み砕（くだ）いて説明してやらずとも、理解してくれている様だった。

これがベルタとなると、きょとんとしているだけである。

まともに教育を受ける機会が無かった以上、これは仕方の無い事なのだろうが。

「肥料というと、石灰かと思いますが……後は、内陸部では貴重ですが、沿岸部では貝殻を砕いたものを使うという話も聞いた事があります」

「ああ、そっちは直接の肥料っていうより、土壌改良っていうか……」

「ペーはー？」

流石にそこまではフィオナも分からないらしい。

「詳しい事は説明すると長くなるから省くけど……まあ、土にも水みたいに、甘いとか辛いとかがあるんだよ。で、甘い土の方が良く育つ作物もあればと、辛い土の方が好きな作物もあったりする。使い分けると、効率が良いとか、そんな感じだ」

基礎的な土壌改良の技術は、一応、この世界にもあるらしい。

だがそれは化学のレベルには達していない——単なる経験則によるものでしかない様だ。少なくともフリートラントではそうらしい。土地の実りについて、単なる環境以外に、地神だの地脈だの霊気だのという訳の分からない要素が絡んでくる為、複雑に過ぎて、発達のしようが無かったのかもしれないが。

「ああ、そうだ、今までは全部ひっくるめて水路、水路、って言ってたけども。大きな水路を造った後は、畑ごとに水を引く方——灌漑水路も、区別して造らなきゃな」

「灌漑水路……」

フィオナは一瞬、眼を細めて何事か考えていた様だったが。
「要するに畑に水を引く為の小さな水路を作るのですね？　で、休ませる田畑を区別したり、あるいは繋いだりして出来る様にする？」
「ああ、その通り……っていうかフィオナ？」
少し驚いてユキナリは街長代行の少女を見つめた。
「本当――頭良いんだな」
「な、なんですか、いきなり？　どういう意味ですか？」
ユキナリとしては素直に思った事を口に出しただけなのだが、フィオナの反応はちょっと意外だった。明らかに慌てているというか、焦っている。
「いや、言った通りの意味だけどさ。元々頭は良いんだろうとは思ってたけど、理解が早いっていうか……」
「この程度のこと、教育を受けた者なら理解出来て当然で――」
「いや、それは違うだろ。知識だけ溜め込んでる奴だって居るし、教育を受けて得られるものには、大きく分けて二つある。単純な知識と――それを扱い、組み立てる為の思考法だ。

勿論、後者だけでは意味が無いが、前者だけに偏っているのも、あまり良くない。使い方を知らない素人が武器の数ばかりを溜め込んでいる様なもので、あまりにも効率が悪いし、発展性も無い。

フィオナはその点で言えば、非常にこの両者の均衡がとれている。

言ってみれば、満遍なく、賢いのだ。

「理解が早くて助かるよ。正直、俺は知識はあっても、あんまり考えるのが得意な方じゃないからな……」

「そんな事はないでしょう。それに、私はただ王都で進んだ教育を受けただけです」

「教育を受けても、それを活かせない奴は居るけどな」

と言ってから、ユキナリは気づいた。

フィオナは恐らくこの学院で高等教育を受けてきた。だからフリートラントの中で、唯一、王都の学院に留学してきたから』であって、いわば『留学帰り』の貼り紙の住人達は、フィオナの事を単純に賢いと認めてはいても、それはあくまで『王都の学院に留学してきたから』であって、いわば『留学帰り』の貼り紙に感心しているだけなのではないのか、というのを理解している人間は、殆どいないのだ。

実際にフィオナがどう賢いのか、それこそ、彼女の周りで彼女の賢さを正当に評価できるのは、ユキナリと、



他に強いて挙げれば、ダーシャ位のものかもしれない。

だからこそ彼女は、ユキナリの指摘に驚き、焦り、そして喜んだのだ。

「……」

ふと視線を感じて左を見ると、ダーシャが眼鏡の奥から、その蒼い瞳でじっと――何かを待っているかの様に、ユキナリの顔を見上げていた。

「ダーシャ？」

「……」

名を呼ばれると、彼女は視線を逸らす。

何か拗ねているみたいに見える――と思ってから、ユキナリは気づいた。

る、ではなくて、実際に拗ねているのだろう、これは。

（あー……そっか）

彼女のその態度に、すぐユキナリは合点がいった。

「俺、賢い奴はよく分かるんだ。実際、色々助けられてきたしフィオナに向かってそう言いながら、とりあえず、ダーシャもそれはダーシャも同じだろ当たり前という事でその賢さを評価されないというのなら、う。ユキナリにとってダーシャはイルジナと並び、この世界を学ぶ為の先生の様な存在だ

った訳だが……だからこそ彼女が頭が良いのはユキナリにとって当たり前で、その事を普段、彼は口に出して評価したりはしない。

しかし――

「……ユキ」

髪を撫でるその掌の下で眼を細めるダーシャ。

ユキナリがフィオナの事ばかりを賢いと褒めるのが、やはり子供っぽい。その特殊り、単純に羨ましかったのだろう。こういう所は本当にダーシな生い立ちから彼女は相当な世間知らずで――だから、何かの拍子に、精神年齢が低いところが見えたりするのである。

「とにかく」

ダーシャの頭を、優しく猫の顎をくすぐるかの様に――そにして撫でながら、ユキナリは言った。

「一旦、用水路の整備は任せる。俺は他に出来る事が無いか、少し考えてみるよ」

「分かりました、お願いします」

ユキナリと、そしてダーシャを順に見て――何処か苦笑めいた表情を浮かべながら、街長代行の少女は頷いた。

一夜明けての、翌朝。

ユキナリ達は一旦、シリングス邸を出て本来の住処――即ち『ユキナリ神殿』に向かう事にした。

前述の通り、元々は地神殿が在った場所に建てられた、地脈、霊脈の通り道なのか、地神の地位を狙う亜神や異獣がやってくるのはこの辺りが多い。要するにフリートラントを、それらの怪物から防衛する為の拠点でもある訳で、長く留守にしておくのは、あまり良くないとユキナリは判断していた。

「神様ってのも色々厄介だよな……」

ユキナリは大通りを歩き、外に繋がる街門を目指しながら、そう呟く。

地神を艶した事は勿論、後悔していないが、生け贄を捧げるという『機構』もこれで中々よく出来ていると思わざるを得ない。

長い歳月の内に主なき試行錯誤が繰り返され、自然に出来上がっていったものなのだろう。そういう意味ではよく出来ていて当然である。

「……ユキ」
ふと、ダーシャが声を掛けてくる。
彼女が指し示す先――街門の脇に、一人の男が立っているのが見えた。一瞬、街門の管理者かとも思ったが、着ている服が異なる。
見覚えのある蒼いそれは……神官達の法衣だった。
「……」
街門から数メートルの距離を残して立ち止まるユキナリ。
一緒に歩いていたダーシャ、ベルタも彼の左右に並んで立ち止まった。
「――ベルタ。元気にしているようだね」
中年男性の神官が、穏やかな笑みを浮かべながら歩み寄ってくる。
「……はい」
ベルタも微笑を浮かべて応じた。
「ルーマン様もお元気そうで何よりです」
どうやら顔馴染みらしい。
もっとも孤児院の運営は神官達が行っている事を思えば、ベルタにとっては、この街の神官全員が顔馴染みなのであろうが。

ユキナリも何人かの神官と顔を合わせているが、このルーマンなる神官とは初めて会う。四角い顔で、細い眼と太い鼻が特徴的である。目鼻立ちが全体的に大雑把というか、木彫りの人形の様な――木訥な雰囲気だった。

「……」

ふと気づいて見回すと、あちこちから――周囲の建物の陰から、他にも数名の神官達が姿を現すのが見えた。遠巻きながらユキナリ達を囲む様な配置だ。彼等の表情は一様に硬く、ユキナリが視線を向けると誰もが眼を逸らした。

（……ふむ）

以前、地神を巡るごたごたに、人質に取ろうとした事がある。少なくともその一点において彼等は間違いなく敵だった。以後のハリス真教会の宣教騎士団が絡んだ騒動では、鳴りを潜めていた為、敵対関係についてはうやむやになっているのだが。

ユキナリが神官達に良い感情を抱いていないのは、彼等自身も気づいている筈だ。だからこそ、初対面の神官を――ルーマンを先ず立たせてユキナリの脚を止めたのだろう。

（嫌な予感がするな）

ユキナリは、背中の〈デュランダル〉を意識した。

神官達はユキナリの力を知っているだろうから、いきなり襲う事は無かろう。だが彼等がダーシャを人質に取ろうとした事からも分かる通り……強い事は、必ずしも弱点が無いという事を意味しない。

時に――搦め手は、神を封じる。

「ベルタ。今日は君に折り入って頼みがある。地神様……ユキナリ様と一緒に孤児院へ寄ってはもらえまいか」

「それは――」

ベルタが、ユキナリの意向を窺う様に眼を向けてくる。

自分はユキナリの所有物なので、お伺いを立てなければ――という事だろう。

「ベルタ。君は巫女だろう？　巫女は神様にお願いを聞いて貰う為に存在する。ユキナリ様と一緒に孤児院へと来てくださる様にお願いするのも、君の役目だ」

「……」

ベルタは、ルーマンとユキナリの顔を、困惑の表情で交互に見ている。

ルーマンは静かに言った。諭す様な緩やかな口調ではあるが、言葉としては相手の反論を許さない上からのものだ。

彼女にとって神官達は育ての親だ。生け贄として使う必要性から、神官達には絶対服従すべしと徹底的に教え込まれてきただろう。だから、彼女は事が出来ない。

かつて――『前世』においた親を『他人』として関係を切り捨てる事は、難しい。

正直、あくまで『ベルタにお願いさせる』という方式をとるたが……彼等が今、何を考えているのかは知っておいても損はらといって、彼等に何もかも従う必要など無い。今のユキナリ矛盾すらも、当然のものとして許される存在――神なのだから。

「ルーマン、といったっけ」

ユキナリは眼を細めながら言った。

「はい。ユキナリ――様」

「ベルタを間に挟むな。何か用があるならあんたが、自分の口で言え。ベルタは今――」

一瞬、ユキナリは躊躇を覚えたが、敢えてその言葉を口にする。

(用件は一体何か、が問題だけどな)

母を見限っていた様だが、やはり実の子供には、血の繋がっ

宗教に入れ込む母親を見限

ルーマンの言葉を無視する

ついてい

ユキナリや姉の初音が、新興

神官達の態度は不愉快だっ

無かろう。ついていったか

は、傲岸不遜も、気紛れも、

「俺のモノだ。あんたらの道具でもなけりゃ食い扶持でもない」
「ユキナリ様……」
ベルタが何故か表情を輝かせ、ダーシャが眉間に縦皺を刻んだが、それはさておき。
「……なるほど、それも道理ですな」
ルーマンは静かな表情を浮かべたまま、頷いた。
「では、改めまして。我がフリートラントの新たなる神、ユキナリ様。どうか孤児院までお越しになり、我らの話をお聞きくださいませ」
「……分かった」
ユキナリがそう言うと、ルーマンと神官達は、列を成して孤児院の方へと歩き始めた。
「ユキナリ様――」
それを追って歩き出すユキナリに、ベルタが囁く様に言い……額の上で両手を組んで略式の祈りの型を示す。
「ありがとうございます」
「気にするな」
口の端に微苦笑を浮かべながら、ユキナリはそう言った。

「ベルタ姉様！　それにユキナリ様も、ダーシャ姉様も！」

孤児院でユキナリ達を出迎えてくれたのは、ベルタの『妹』達だった。

親が死んだのか、親に捨てられたのか、いずれにせよ身寄りの無い――つまりは、いつか地神への生け贄に捧げられたのか、いずれにせよ身寄りの無い少女達ばかりである。彼女等の存在は街を守る為の『尊い犠牲』であり、だからこそ彼女等の暮らしは、概ね街の住人からの寄付で成り立っている。

いや。成り立っていた、と言うべきだろう。

今や孤児院は事実上、その役目を――生け贄養育施設としての役目を終えていた。

「こんにちは」

以前も顔を合わせた事のある少女に、ユキナリは身をかがめて笑いかけた。

「ハンナ、だったっけ。元気かな」

「はい、ユキナリ様！」

ユキナリが差し出した片手に、仔猫の様にじゃれつきながら、ハンナが笑う。

「こら、ハンナ、駄目、ユキナリ様にそんな……」
「いいからいいから」
妹分を窘めようとするベルタをユキナリは制して、ハンナのしがみつく右腕を上げる。
幼い少女は、きゃっきゃと無邪気な喜びの声を上げたが――
（……軽いな）
ユキナリは先ず、そう思った。
見た目以上に、軽い。
恐らく――服の下には、痩せ細った身体が隠れているのだろう。以前と比べてやつれた様な気がしたので、右腕でぶら下げてみたのだが……明らかに体重が減っている。
元より豊かな生活ではなかったかもしれないが、育ち盛りの子供が目に見えて痩せ細る程に、困窮してはいなかった筈である。
「さあ、ユキナリ様」
ルーマンが孤児院の奥を指し示す。
「奥へどうぞ、ここでは子供達がうるさくて話も出来ません」
「……また、後でな」
ユキナリはハンナや他の少女達に笑顔を取り繕ってそう告げると、ルーマンの示した部

屋に向かう。
「ベルタ。お前はユキナリ様に。それから巫女だ。同席する様に。それか待ちくださいい」
「……」
眉を顰めるダーシャ。彼女が床に一度下ろしていた鞄に手を伸ばそうとしたのは、かつて一度、自分が人質にとられかけた事を忘れていないからだ。
しかし……
「大丈夫だ、ダーシャ。お前は久しぶりに『妹』達とお喋りでもしてくるといい」
ユキナリはダーシャの銀髪に覆われた頭に軽く触れて、そう言った。
「妹……？」
不思議そうにダーシャは眼鏡の奥でその眼を瞬かせる。
「ダーシャ姉様って呼ばれてたろ」
「……あ」
言われて改めて気づいたらダーシャは少し戸惑う様にユキナリとハンナ達の間で視線を往復させていたが……
「……私……お姉さん……？」

「あの子達から見れば普通にお姉さんだろ。遊んでやりなよ」
言ってダーシャの髪を撫でるユキナリ。
「……ん」
ダーシャは気持ちよさげに眼を細める。
「俺は少し奥で話をしてくるから、ここに置いておけよ」
「分かった」
ダーシャが鞄の留め金を外すのを確認して、ユキナリはベルタと奥に向かった。
「――どうぞ」
奥の部屋に招かれたユキナリは、ルーマンの勧めに従い、椅子に腰を下ろす。
恐らくは応接室の類なのだろう。座るのはソファではなく硬い木製の椅子だが、六つばかり用意されたそれらは、部屋の中央にある円卓の周囲に均等に配置されていた。
ルーマンは、円卓を挟んでユキナリの正面に座る。
ベルタは、ユキナリの右隣に座った。
「で――用件は？」
促すと、ルーマンは小さく咳払いしてから、円卓に指を絡ませた手を置いた。
「ユキナリ様、貴方様が先代の地神を斃し、この地に住まわれるようになってもう、二十

日あまり……それなりの日数が過ぎております」

「そうだな。生け贄なんてのは野蛮な伝統がなくなって、皆ほっとしてることだろう」

少々の嫌みを混ぜてそう言ったユキナリだが、ルーマンの表情は変わらなかった。

「野蛮……野蛮とおっしゃいますか」

「言うさ。生け贄なんてのは野蛮な行為だよ」

少なくともユキナリは心底からそう思う。

ルーマンはしばらく言葉を探すかの様に黙っていたが――

「……いいでしょう、それについてはそれぞれの考え方がありますし、誰も皆がほっとしている、と事もありますまい。しかし生け贄のしきたりがなくなって、誰故、今改めて議論するという訳ではありませんよ」

「だろうな。少なくとも、ならば地神へ生け贄を捧げる為の儀式を取り仕切り、ユキナリはルーマンを睨み据えながら言った。

既に生け贄を求める地神は居ない。

生け贄を育てる事をその生業としてきた神官達は、揃って失職した事になる。

「貴方様が現れたことで、この街の秩序が一部崩壊しているのです」

ルーマンはユキナリの皮肉にはやはり構わず言葉を続けた。

「秩序、に、崩壊、か」
「はい。例えばこの孤児院の維持費。街の人々からの寄付で成り立っていましたが、生け贄が必要ないとなれば、寄付をする者も激減いたします。ただ寄付など出来るか――そう考えるのが、街の人々のごく普通の考え方です」
「……」
存在理由を失ったというのならば、それは生け贄候補である孤児達も同じであろう。
「そして、我々神官の立場も無くなった。なにしろ、地神崇拝が無くなってしまったのですから、儀式を執り行う神官など必要ない事になる」
「……だろうな」
「現在、ユキナリ様がこの地神となられている訳ですが……我等から、ユキナリ様に、一つお願いがございます」
ルーマンはわずかに身を乗り出してそう言ってきた。
いよいよ本題らしい。
実を言えば、ユキナリはここまでの話の流れで、何を言われるか大体の見当がついている。だが敢えてそれを神官の口から語らせる事にした。
「貴方様は今――街の人々に対する全てのご指示を、街長代行のフィオナ・シリングス嬢

を通して行われています。彼女が負って居られるその御役目、是非、今後は我等に」

やはりそう来たか――とユキナリは思う。

生け贄を求める地神はいなくなったが、それに代わる『権威』がこの地には生まれた。

ユキナリだ。

地神を斃し、この街を宣教の名の下に侵略してきたハリス真教会の宣教騎士団をも退けた彼に、街の人々は崇敬の感情を――信仰に近い感情を抱いている。厳密な意味でユキナリは地神ではないが、近しい者以外、街の人々がユキナリの事を『地神様』と呼ぶのも、そうした崇拝に近い感情の顕れだろう。

これは……地神がユキナリに『代替わり』したと考える事も出来る。

神官達としては、彼を新たな看板として掲げる事で、今後も神官としての立場を守れるのではないか――と考えたのだろう。そしてその為には自分達の立ち位置を、街の住人とユキナリの仲介者として固定する必要がある。

「自分達が俺と街の住人の間に入る事で、権益を守りたい。そういう事だよな？」

ついユキナリの口調は辛辣な響きを帯びるが、ルーマンは平然と頷いてきた。

「平たく言えば、まあ、そうなりますな」

ユキナリは眼を細めてルーマンを睨んだ。

そもそも――この神官は、どうして神官達の住む神殿ではなく、隣接する孤児院を対話の場所に選んだのか。恐らくは話の前にハンナ達と会わせておく為だ。

よりユキナリが、同情し易い様に。

いや……武器こそ突きつけていないが、これはハンナ達を人質にとっているも同然だ。

『お前が我々の提案に乗らなければ、哀れな孤児達は今よりも餓えるぞ』と、口には出さずとも、脅しているのだろう。

ベルタを同席させたのも、恐らくは同じ理由からだ。

事実上、ユキナリの『巫女』となった彼女の口添えがあれば、説得はより容易くなると思っているのだろう。そしてベルタは、妹分である孤児達を見捨てられない。そういう性格の少女であるとルーマンは見抜いている。

実際――

「……」

ベルタは今にも泣き出しそうな表情を浮かべ、ユキナリとルーマンの間で視線を右往左往させている。権益だの何だのの細かい事までは理解出来ていなくとも、ルーマンがユキナリに対して何を求めているのかは、おおよそ、分かっているのだろう。

（……別にこいつらに『代理人』役をやらせたって、俺が何か損をする訳じゃない）

脳裏にハンナの笑顔を思い浮かべながらユキナリは考える。

ルーマン達は、ユキナリに何か特別な事を求めている訳ではないのだ。

『うん』と言えば、彼等は再び『神の代理人』たる役目を取り戻す。

しかし……

「――断る」

ユキナリは言った。

「俺は確かにこの街の神様の役割をしているけどな……それはあんた達みたいな神官の為じゃない。俺自身がやった事へのケジメと、俺が護るべき人間のためだ。神官の立場や利権がどうなろうと、俺の知った事じゃない」

新興宗教にはまった母親が、何かと名目をつけられては、金をむしり取られていたのをユキナリは覚えている。

それらはもう、何を生み出す事もなく、何を変える訳でもなく、ただ組織にぶら下がっていて、それ以上でもそれ以下でもなかった筈だが――母親は喜んで、いや金を上納するその行為自体を有り難がっていた。上納金の金額がそのまま信仰の篤さ、自身が積み上げる徳になるのだと、本気で信じていたらしい。

（……それに）

ユキナリは改めて頭の中で想像を整理する。

（俺がこいつらを『代理人』に指定したとして。こいつらの権益はまあ守れるんだろう。だが結局、孤児院は――）

既に生け贄が必要無い以上、孤児院を維持する為の寄付金が得られるとは考えにくい。勿論、ルーマン達神官が、自らの立場と生活を守った上で余裕が有るならば、孤児院の子供達を養う可能性も有るが――ユキナリとの交渉にハンナ達を利用しようとした事から しても、彼等が孤児達を、単なる道具や食い扶持程度にしか考えていない可能性も高い。ユキナリがここでルーマン達の提案を受け入れても、恐らく問題は解決しない。

「どうあっても？　考え直してはいただけない？」

ルーマンがわずかに首を傾げて言った。

あるいはこの男は、ユキナリの胸の内に生じた逡巡や葛藤を見抜いていたのかもしれない。もう一押しすればユキナリは折れるかも――と。

「くどい。俺は断ると言ったんだ」

「……」

ふと隣を一瞥すると、ベルタが俯いて座ったまま、身を震わせている。

ユキナリとルーマンの間で板挟みになって、どうして良いのかも分からなくなっている

のだろう。ユキナリは彼女の手を掴んで立ち上がると、改めてルーマンに向けて言った。
「もう一度言う。俺は、あんたらを食わす為に神様やってるんじゃない」
「そうですか……残念です。とても残念ですよ」
淡々とした口調でそう答えるルーマン。
提案が蹴られてもなお、落ち着いた態度を崩さない彼が気になったが——この場に留まってもベルタの負担が増すばかりだろう。椅子に腰掛けたままのルーマンをその場に残し、ユキナリは、ベルタの手を強く引いて、奥の間を出た。

●

ユキナリ達の住む『神殿』に戻って——すぐ。
「申し訳ございません……！」
ユキナリの前でベルタはいきなり土下座をしてきた。
「……って何やってんだよ!?」
「ベルタ……？」
正しくは『神殿』の入り口での事である。

ごく普通に中に入ろうとしたユキナリとダーシャのすぐ後ろで、ベルタは平身低頭してひたすら謝り続けている。どうもベルタは、ユキナリに許して貰うまでは『神殿』に足を踏み入れる資格が自分には無いのだ、と思っているらしい。

「どうか……お許しください……」

「許すも何も。ひょっとして、孤児院の一件か？」

ユキナリの脳裏にハンナ達と、そしてルーマンの顔が過る。

「はいっ……！」

ベルタは地面に額をこすりつけながら認めた。

「あれなら別にベルタのせいでもないだろ。そういうの、気まずいからやめてくれ」

「しかし……」

ベルタが言うには……ユキナリを怒らせてしまったのは全て自分に責任がある、なのでどうか神官達やハンナ達に罰を与えるのは勘弁してほしい……との事だった。

「いや、あのな」

ユキナリはベルタの前に膝をついて、彼女の両肩を掴む。

強引に身を起こさせてから、ユキナリは溜息を混ぜて言った。

「ベルタは俺の事、何だと思ってるんだよ」

ちょっと怒らされたからといっていちいち相手を殺す様な人間だと思われているのだろうか。殺人鬼でもあるまいに。

「ユキナリ様は……我が神にあらせられます」

涙に潤んだ眼でユキナリを見つめながら、ベルタは言った。

「……ああ、そうだったね、うん」

少しげんなりしながら、ユキナリは言った。

神とは、気紛れに神罰を下すものだ。ベルタにしてみれば、ルーマン達の言動に怒りを覚えたユキナリは、彼等に神罰を食らわしても当然である、という事らしい。

この世界にはユキナリの『前世』の様な――現代日本の様な法律も無ければ、社会通念も無い。有ったとしても、人ならぬ神は適用の対象外だろう。

そう。此処では、『神の機嫌を損ねた』というのは、人が死ぬのに十分な理由なのだ。

神は、怒ればただそれだけを理由に人を殺す。それはもう、物は上から下に落ちるとか、光で照らせば影が出来るとか、疑問を差し挟む余地の無い事――ごくごく当たり前の事柄である、という認識らしかった。

「とにかく、あの連中をぶち殺したりする積もりは無いから」

ユキナリはそう言うと、ベルタの手を取って立たせ、神殿の中に引っ張り込む。

「ベルタも気にしなくていい」
「ですが――」
「気にするな。神様からの命令」
「……は、はい……」
呆れた事にベルタは素直にそう言った。
もっとも――言葉でそう言っても、簡単に気持ちを切り替えられるのならば、誰も苦労はしない。このまま放っておくと、ベルタは余計な罪悪感を勝手に背負って振るまいが暗くなっていくばかりだろう。
ユキナリはベルタを『神殿』の中の長椅子に座らせ、改めて話を聞く事にした。土下座はともかく、それでベルタの気が済むなら、納得いくまで謝罪させた方が良いのではと思ったのだ。
しかし……
「ルーマン様の仰る事に理があると……思うのです……」
ベルタはそんな事を言い出した。
「若い娘を地神に食わせて、庇護して貰うことに理があるっていうのか？」
思わず声を荒らげたユキナリは――ベルタが身を震わせるのを見て、『すまない』と慌

てて詫びた。彼女自身が何度となく口にしている様に、良くも悪くも彼女にとってユキナリは崇拝する神なのだ。ユキナリがルーマン達に怒っただけで必死に土下座をして許しを請うていたのである。直に自分が詰められればそれこそ、舌を噛みかねない。

「私は……あの孤児院で育ちました」

呼吸を落ち着けてから、ベルタは言った。

「ハンナ達は私の妹同然です……」

やはり本当の家族がいないベルタにとって、神官や他の孤児達は家族の様に掛け替えのないものなのだろう。たとえその生活が、生け贄という制度の一環だったとしても。

「巫女として引き取られなければ、親のいない私達は野垂れ死んでいました……」

「それは、そうなんだろうから、ユキナリにもよく分かる。

ここしばらく暮らしていた少なくとも住民達が伊達や酔狂で何人もの孤児を育てる訳にはいかない。

フリートラントは決して豊かな街ではない。

は、切羽詰まった状態である。今日明日に餓死者が出る様な事は無かろうが、共同体に寄与しない人間を養うだけの余裕は、無いのだ。

栄養状態が悪ければ、当然ながら病にも罹りやすくなるし、回復も難しくなる。

それはつまり、ゆっくりと枯死していく様なものだ。

「巫女の必要が無くなれば、寄付が集まらなくなります……寄付が無ければ、孤児院は潰れるしかありません……ハンナ達は路頭に迷う事に……」

神官達の権威が失墜し、集まる寄付が激減した。

ならば神官達が自分達を守る為に、最初に切り捨てるのは孤児達だろう。

「今はまだ、蓄えの食料でなんとか日々暮らしていると思いますが……でも、遠からずあの孤児院は無くなってしまいます……」

そして孤児達に、行き場は無い。

かつて生け贄にされる事を免れたベルタが、行き場を無くしたのと同様に。

「だから、あの神官達の提案を受け入れろっていうのか？」

「……」

ベルタはそれ以上は何も言わなかった。

言えないのだろう。

「……こういうのは本当、やこしいな」

ユキナリはフリートラントの街がある方角を振り返りながら、呟く様に言った。

アーロン・ランズダウンは疲れきっていた。

「……惨めだ……」

何度目かも分からない位の愚痴を彼は吐いた。

「……どうしようもなく……惨めだ……」

彼を悩ませているのは、肉体ではなく精神の疲労である。

腐っても教化遠征軍に所属する宣教騎士だ。聖堂騎士団に入ちり訓練を受けていたお陰で、それなりに身体は出来上がっていて え、全身板金鎧を身にまとって戦う以上、貧相な身体ではお話

「……この、私が……」

王都で訓練に明け暮れていた頃の、あの清々しいとも言うべの疲れは一晩眠れば大体取れるが、精神のそれは執拗に尾を曳「……誇り高きハリス真教会宣教騎士団の騎士たるこの、私が

今や辺境の地フリートランドで、泥にまみれ、雑巾の様に容赦無く数々の雑用にこき使われている。しかも雑用が終わって帰り眠る場所といえば、掘っ立て小屋同然の、みすぼ

らしい『教会』である。

建前上、アーロン達はこの訳だが――実態はといえば、で、そのまま『駐留』していまれであるアーロンにとって、奴隷同然の扱いだ。貴族の生。他の騎士達も同様だろう。な位に、惨めな暮らしだった奴等に、中央の正しい教えを広来たはずだった。

「くそ……〈蒼い御遣い〉め……」

自分達は地方の無知蒙昧な

崇高な使命だ。そう思う。

ところが……いざフリートラントに辿り着いて見れば、思い〉に邪魔をされ、宣教騎士団の切り札である守護聖人像をアーロン達の面目は丸潰れだ。

今や――街長代行で、王都の学院では学友でもあったフィられ、逃げ出す事もままならない。万一、上手く逃げて王都った阿呆として、責任が追及される。良くて一生笑いもの、人扱いだ。

フリートラントを教化し、人々それは頭がおかしくなりそう

を啓蒙した事になっているの鎖に繋がれてこそいないが、

めるために、はるばるやって

破壊されてしまった。

いも掛けず現れた〈蒼い御遣

オナ・シリングスに弱みを握に戻っても、守護聖人像を失悪ければ裁判に懸けられて罪

「……覚えていろ……いつか必ず……必ず……」

呪詛の様にそう繰り返しながら、アーロンは今日も、疲れた身体を引きずるようにして、掘っ立て小屋——もとい教会への帰路を辿っていた。すぐ側には、同じく疲労困憊といった態の宣教騎士団員五人も一緒である。

そこへ——

「もし——そこの御方」

掛けられた声に、アーロン達は立ち止まる。

建物と建物の隙間——細い路地から、アーロン達を呼び止めたのは、フリートラントの土着宗教の法衣に身を包んだ、数名の神官達だった。

「……？」

アーロン達は揃って眉を顰めた。

土着宗教の神官は、アーロン達、ハリス真教会の関係者にとっては教敵である。商売敵と言っても良いだろう。そんな連中が今更、アーロン達に何の用なのか。それも人目をはばかる様にして。

神官達の中で一番年嵩に見える男が、アーロン達に恭しく礼をする。次いで辺りを見回し、他に人の姿が無い事を確認すると、彼は路地から一歩出てこう言ってきた。

「ハリス真教会宣教騎士団の皆様に、折り入ってお話がございます」
「……」
顔を見合わせるアーロン達。本当に今更何の用なのか。
分からない。本当に今更何の用なのか。
フリートラントに乗り込んできた際、住民を奴隷扱いした事に対する仕返しか――とも思ったが、神官達の表情には、怒りの色も無い。
どうしたものか。
アーロン達の上官だった騎士は、今此処には居ない。別の場所に駆り出されてこき使われている筈だ。今居る面子の中で一番階級が上なのは、アーロンだった。
しばし、懊悩するアーロン。
そして……
「お話を伺いましょう」
どうせ何が有っても、これ以上、このフリートラントでの扱いが悪くなる事は有るまい。
――そう判断したアーロンは、一同を代表し、首肯して見せた。

「ん……」

薄闇の中で短く吐息が漏れ指先で、ダーシャの堅く閉じら
ユキナリは、何度も繰り返しぐるかの様に。
く。丁寧に。睫の根元をくすたとえ瞼を無理矢理押し開いて
ダーシャが緊張しているとを解いてやる為に、目元を温めて
る事が出来ない。彼女の緊張揉んでやる事で、ようやく
ユキナリはダーシャの蒼い瞳を至近距離から覗き込む事が出来
眼鏡は今――脇に置かれている。
ゆっくりと、注意深く、ダーシャの右の瞼を押し広げていく
ダーシャの眼とユキナリの眼を隔てるものは、何も無い。
剥き出しになった彼女の瞳を覗き込むが――濁りは見えない
も無い。炎症を起こしている様子
に馴染んでいる様だった。晶体は、問題無く彼女の眼



「ユ……キ……」

ダーシャが首から下をもじもじと動かす。

顔はユキナリが両の掌で押さえているので、彼女の自由になるのは今、首から下だけなのだ。尻の辺りの座りが悪いのか、ダーシャは何度か小刻みに腰を動かしていた。

「……恥ずか……し……」

「なにが？」

ユキナリは右の瞼から指を放し、左の瞼に親指を添える。

先と同じ様にまずゆっくりと親指の先や腹で瞼を――その縁を撫でていく。

「眼鏡……」

右手の指を脇に置いた眼鏡に伸ばすダーシャ。

どうやら裸眼を覗き込まれるのが恥ずかしいらしい。たかがリは思うが、ダーシャにとっては大きな違いであるのだろう。

（そういえば姉ちゃんも、眼鏡外した所を見られるの、嫌がってたな……）

眼鏡を掛けているのが当たり前の者にとっては、裸眼を覗き込まれ、場合によっては瞼に触れられたり、息を吹きかけられたりするのは、羞恥を覚えるものなのだろうか。

もっとも、こうしてダーシャの眼を調べるのは、今回が初めてではない。ユキナリにし

てみればいい加減に慣れて欲しい、とも思う。
「無茶言うな。後にしろ」
互いに息が触れる様な距離で顔をつきあわせている。ダーシャが眼鏡を掛ければ、ユキナリの吐息でレンズが曇るだろう。邪魔で仕方が無い。
左の瞼もやや強引に押し開く。さらけ出された瞳は、やはり透明感の有る蒼だ。
問題は見られない。
「……大丈夫だな」
紅潮しているダーシャの顔から両手を離して、ユキナリはそう断じた。
「特に変化は無いと思う。違和感は？」
「……特に無い。大丈夫」
そう言ってから——少し慌てた様な動作で、ダーシャは眼鏡を掛ける。
瞬きを二度、三度。それだけで、潤んでいた瞳は元の怜悧な眼光を取り戻していた。
「それより、ユキが、大丈夫じゃない」
唐突にそんな事を言い出すダーシャ。
「……俺？」
「昼間の、ベルタの話」

ふと壁の方を一瞥してダーシャは言った。

壁の向こうには、ベルタにあてがわれた個室が在る。今日はだせいか、彼女はもう寝ていた。

「ユキ……悩んでる？」

ユキナリだけがダーシャの微妙な表情を読み取れる様に、ダーシャもまた、ユキナリのわずかな表情の変化や仕草から、色々と察する事が出来るらしい。この世界に転生してから、一番つきあいが長い相手なのだから、当然だが。

「俺――宗教って奴が嫌いでさ。どの宗教って訳じゃなくて、宗教全般」

「……知ってる」

眼鏡の奥でその蒼い眼を伏せて、ダーシャは言った。

「俺の母親は、宗教にのめり込んでた。とんでもない額の金を使呆れた話でさ、姉ちゃんを教祖様素晴らしい事だ、教祖様の愛人にしたい、そうするなる為に姉ちゃんはこの世のが姉ちゃんにも良い事だ、とか……実の母親がさ、真顔で言うんだに生まれてきたのだ、とか……

これは無論『前世』の話である。

しかし――ユキナリが宗教を嫌う理由は、それだけではない。俺達の事も勝

「こっちの世界に転生してきて……今度は教会が俺達からイルジナを奪った」

「……うん」

小さくダーシャは頷く。

本当に仲の良い姉妹だった。

ったとしても、彼女らは間違いなく家族だった。

だがイルジナは教会に対して反逆したとして、殺された。そして

死に、別れた。

姉を――誰よりも大切な姉を失った。

ユキナリもダーシャもその点では同じだ。

「個人の信仰に文句を言う積りはないんだ」

小さく苦笑してユキナリは言った。

「信じる信じないは本人の自由だからな。神様を信じる事で、心の平穏が得られるっての は、事実だろうさ。だけど、その信仰を人に押し付ける事は大権益として金儲けに使ったり、他人を支配するのに使うのは、反吐が出る」

「……うん」

「だからあの連中の提案を断った。俺の、個人的な、好き嫌いで。そんな俺が――」

ふと皮肉っぽい笑みを浮かべ
「神様に祭り上げられてたりする訳だから、世の中ってのは
「……ユキ……」
ダーシャは手を伸ばしてユキナリの頬に触れる。
「……ダーシャ？」
相手が本当にそこに居るのだ、というのを確かめる為に、
シャの癖の様なものだ。他愛ない雑談の最中にもよくこうし
しかし今は――
「……」
ダーシャは指先でユキナリの口の端を撫でてくる。
まるで、無理に笑顔を取り繕う必要は無いのだ――と言わ
「河川改修や農地の改良で耕作地が増えれば、必要とされる
れば――フリートラントが豊かになれば、孤児院の子達を養
単純な収穫量の数字が問題なのではない。
弱者を庇い、守り、養う――という考え方が自然と広まる
しに一定の余裕が必要なのだ。それが駄目ならば、何らかの

かない。例えば――宗教の様な。仏教における喜捨の概念（がいねん）の様に、『そうする事が徳を積む上で正しいのである』と定義してやる方法で。

ユキナリはこの地においては『神』だ。

彼がそう命じれば、あるいは人々は自分達の生活を限界まで切り詰めて、孤児院の子供達を養ってくれるかもしれない。しかしそれでは何の解決にもなっていない、とユキナリは思ってしまう。

「長期的にみれば――何とかなる方法は考えつく。でも」

「……時間、かかるね」

ダーシャの言う通りだ。

今ユキナリの実行している方法は堅実（けんじつ）かもしれないが、時間はどうしてもかかる。

ましてや、一度、この周辺地域に一定の収穫（しゅうかく）を約束していた地神が居なくなった以上、来年は凶作（きょうさく）になる可能性も有る。ゼロからではなくマイナスからの出発だ。時間がかからない筈が無かった。

「ユキ。物質変換（へんかん）の力――利用する、のは？」

ふと思いついた様子で、ダーシャが提案してきた。

「勿論、それは考えたけどな」

顔をしかめてユキナリは言った。

「小麦だの何だの、食うものを俺が作り続けるのは、やっぱり無理が有る」

ユキナリの物質変換能力には、幾つかの限界が有る。

一度に変換出来る量に限りが有る上に、あらかじめ先に何かを構造の情報を、蓄積しておかねばならない。

ておいて、そこに有った物質が直接、延々と食料生産を続ければ、たとえ彼自身が保ったとしても、フリートラントの周囲を砂漠化させかねない。

ユキナリの能力は、情報を、消費するのだ。それこそユキナリの貴金属の、生成、は？」

「効率の問題……より付加価値の高いものの生産……例えば、

とダーシャが提案してくるのは、至極当然の発想だった。

それは錬金術師の弟子として育ってきたダーシャにしてみれば生きた錬金術装置だ。その気になれば、金だろうが銀だろうが作り出せる。ユキナリはいて大富豪になる事だって可能だろうが——

かもしれない。

「金や銀が今のフリートラントに大量に在ったって、役に立たない」

比較的安定した物質であり、加工もしやすいという事から、通貨の材料として利用されてきた。逆に言えば、金そのものに、人間の衣食住に直接繋がる劇的な効能がある訳ではない。

金は食えない。金で渇きは癒やせない。金で作物は育たない。

この地方都市で大量に黄金だけ生成しても、意味が無いのだ。

ダーシャは元々大都市部――王都の育ちである。

姉と共に幽閉同然の生活を送っていたとはいえ、物資が豊富で金に通貨として流通していた社会の人間だ。『金があれば大抵のものは買える』と無意識の内に考えて当然である。

「それに教会の連中だって、〈御遣い〉使って無作為に金や銀とでもないだろ。通貨ってのは社会体制と密接に繋がってるからなぞしてみろ、いろんなものがメチャクチャになる」

ここで例えば、ユキナリが黄金を全力で生産し続けた場合――引され、擬似的な通貨として扱われていた金は、急速に価値を下大混乱を引き起こすだろう。

何より、そんな真似をすれば、教会に対して『此処に〈御遣い〉か高位の錬金術師が居る』と告げている様なものである。間違いなくアーロン達とは比べものにならない規模の聖騎士団が送り込まれてくる。連中と戦うのはむしろイルジナの敵討ちとして望むところだが、同時にダーシャやそれにフリートラントの街を守って……となると、ユキナリ一

人では無理があった。

「そもそも流通とか貨幣相場ってのは、全体を俯瞰できる情報網があってこそ……」

そこまで言ってからふとユキナリは何かが頭の端に引っかかるのを覚えた。

貨幣。流通。全体を俯瞰。

一歩退いてより大きな範囲で価値の創出と管理。

「ユキ。例えば交易」

「そうか、交易だよ」

ダーシャとユキナリは、ほぼ同時にその結論に達していた。

驚いた様に顔を見合わせるユキナリとダーシャ。束の間、眼を丸くして二人はお互いを眺めていたが――

「フリートラントに限定する必要無いんだ！　王都の交易路にお陰で解決策を一つ思いついた！」

ユキナリはいきなり、笑顔でダーシャを抱きしめた。

「ユ……ユキ……？」

「賢いなダーシャ！　ありがとう、

ダーシャが珍しく、ずり落ちかけた眼鏡の下で焦りの表情を浮かべ、赤面しているのだが……幸か不幸か、彼女を抱きしめているユキナリにはそれが見えていない。

「ユキの……役に立った……？」
おずおずとユキナリの背に手を回しながらダーシャが尋ねる。
「立った、立った、勿論、大感謝だ！」
ユキナリは〈御遣い〉であり、フリートラントの『神』であるの——それも十代の少年のそれだ。どうしても目の前の事象に意識が集中してしまい、一歩退いて物事を見るという発想を忘れがちになる。今も彼はフリートラントを、自己完結的に豊かにする事ばかりを考えていた。
「とりあえず、教会から逃げる時に持ち出してきた、地図あったよな。もの凄く広い範囲を大雑把に描いてあるやつ。あれを見て交易相手を探そう」
「……あの、ユキ」
「……ん？」
「は、放し……ではなくて、そう言われて——ユキナリは、自分が喜びの余りダーシャを強く抱きしめたままだった事に気づいた。

ユキナリが喜びの勢いがダーシャを抱きしめていた——丁度その頃。

神官達の住む建物の一室にアーロン達、ハリス真教会の宣教騎士数名は招かれていた。

覚えていた者も居た様だが宣教騎士達と会合を持つ事に、抵抗を奴隷の様にこき使われるとも言うべき土着宗教の神官達との話し合いに乗り気だった。

この状況が変わるのならば何でもいい——彼はそう思っていた。

「端的に言いましょう」

アーロンは、むしろ神官達の事に、そろそろ耐え難くなってきた所だ。

互いの腹を探り合うかの様な、虚礼に満ちたやりとりを何度か。

それから——短い沈黙の後、神官は、おもむろにそう切り出した。

「あの地神……いや、悪魔『ユキナリ』を滅ぼすのに力を貸していただきたいのです」

「……!?」

宣教騎士達の間に、ざわめきが生じる。

唐突に何を言い出すのかと、彼等の多くは思った事だろう。アーロンは目の前の神官の正気を疑った。この土着宗教の神官達は、権威失墜の果てに、まともにものを考える事が出来なくなったのではないか——と。

だが宣教騎士達の驚きは、予想の範囲内であった様だ。
神官達は、むしろ得意げな笑顔でこう続けてきた。
「信ずる教えこそ違えど、あの『ユキナリ』なる者に立場を追われ、苦境に立たされているのは我等も同じ。そこで我等は、あ奴を討ち滅ぼそうと決意したのです」
ユキナリが地神を殺し、その地位に居座った事で、この神官達は立場を失った。
だから彼等は――ユキナリを殺して、別の地神をこの地に呼ぼうというのだろう。悪魔いから除けよう、と言ってはいるが、要するに、自分達にとってユキナリは都合が悪分かり易い理屈だ。
「冗談じゃない！」
アーロンは我慢しきれずにそう叫んだ。
「アレは、本物の〈御遣い〉だー　守護聖人像ですら歯が立たなかった、本物の化け物だぞ！　勝てる道理がない！」
アーロンとて、ユキナリの存在を快くは思っていない。街の雑用係として、奴隷同然にこき使われる毎日――その中で『いつか思い知らせてやる』と、全ての原因であるユキナリを恨む言葉を何度も吐いてきた。

だがそれは、いわば苦境に耐える為の祈りの文句に等しい。
実際にユキナリを倒す方法が有るなどとは、とても思えなかった。
「奴はしかも――」
思わず余計な事まで口走りかけて、アーロンは続く言葉を無理矢理呑み込んだ。
〈蒼い御遣い〉……ユキナリは、前教皇を暗殺している。聖騎士達が何千人と、信徒に至っては何十万人と居る王都のど真ん中でだ。しかもその後、ユキナリは捕まる事も無く逃げおおせているのである。
一対一の戦闘では、ユキナリは恐らく無敵だろう。
それこそ、守護聖人像を何体も繰り出せば、まだ何とかなるかもしれないが……どれだけ訓練され武装していても、人間でしかない宣教騎士達には、敵う相手ではない。
戦えば、それこそ、瞬殺だ。
「とにかく嫌だ、冗談じゃない！」
叫ぶアーロンの他にも、二人の宣教騎士が恐怖の表情で首を振っていた。
だが次の瞬間……
「――情けない！」
彼等の動揺を圧する強さで、一人の男の声が響き渡った。

「それでも栄えあるハリス真教会宣教騎士団員かー」

宣教騎士の一人が椅子から立ち上がって、アーロン達を見下ろしていた。

「ア……アーノルド……？」

宣教騎士の一人で、クリフトン・アーノルドという名の男だ。

この男、訓練時の成績から、アーロンより宣教騎士団での階級は下となっているが――実家の貴族としての階位は同等である。アーロンは階級を根拠にクリフトンを自分より下とみていたが、本人はそれとは衝突していた。

これに苦慮した上官が、別の場所に配置する様になっていた。

命じられていたアーロンとクリフトンとを、同じ宣教騎士団の中でも出来るだけ授ける役目を負っていた。このフリートラントの街にやってきた際も、地神討伐を――住民に『首輪』を

つまり……この男は、自分の眼で見ていないのだ。

あの最終兵器とも言うべき守護聖人像が、ユキナリに敗れ去ったその現場を。

むしろアーロンへの反感から、守護聖人像の操作をアーロン達が失敗した、程度に思っているのかもしれない。要するにユキナリが強いのではなく、アーロン達が間抜けであったのだ――と。

「アレは〈御遣い〉だぞ!?」
「それがどうしたというのだ。人とよく似た姿をしているのならば、剣で切る事も出来るだろうし、首を落とせば死ぬだろう?」
平然とクリフトンは言った。
「そう思うのなら、お前は何故今までそれをしなかった!?」
クリフトンの愚かさに、アーロンは吐き気すら覚えていた。何を考えた訳でもなく、何を為した訳でもなく、ただ、この男は他人から示された提案に調子良く乗っかっているだけだ。恐らく本人は『機を見るのに聡い』などと自分の軽率さを都合良く評価しているのであろうが……
「アレには勝てない！　お前は馬鹿だ、クリフトン・アーノルドー　どうしようもない馬鹿だ！　アレに対抗する手段が我々にはもう無い！　本当はお前も分かって――」
「馬鹿は貴様の方だ、アーロン・ランズダウン。勝つ為の方法を彼等が提案しようとしているのではないのか？」
クリフトンは小馬鹿にした様に鼻をならしてそう言った。
「ええ。その通りです」
と――神官は、やはり得意げな笑顔のまま頷いた。

「私は、あの悪魔を滅ぼせるのなら、この土着宗教の神官共と手を組んでもいい」
クリフトンは仲間の宣教騎士の顔を一人ずつ覗き込んでいく。
「そう思う者は他にいないか？」
「……」
しばしの沈黙の後――二人の宣教騎士が手を挙げる。
彼等もまた、守護聖人像が破壊された光景を見てはいない者だ。
対して――アーロンを含め、残りの三人は沈黙したままである。
「臆病風に吹かれた者はここから去ればいい。我々はあの悪魔を滅ぼす」
座ったままのアーロン達を見下ろしながら、クリフトンは傲然とそう宣言した。
「アーロン・ランズダウン、騎士の名に相応しくない臆病者。貴様はこのまま辺境の蛮族共の下働きとして暮らすがいい」
その『辺境の蛮族』たる神官達を前にしながら平然と、そう言うクリフトン。
「……後悔することになるぞ」
そんな捨て台詞を吐いて立ち上がるアーロンと……他二名。
これ以上は関わり合いになるまい。そう決めて部屋を出る彼等の背中を、クリフトンの得意げな笑い声が叩いた。

第二章 ㊥ 異境の神

黎明の光に照らされながら、男達は必死に走っていた。

「走れ、走れ、振り返るな……！」

男達の数は五人。

法衣をまとった神官が二人。鎧をまとった騎士が三人。

土を蹴立てて、時に躓きながら……未だ洗い残した染みの様に、そこかしこに夜の闇が残る隘路を駆けている。

「走れぇッ……！」

騎士達は勿論、武装しているが……それにしても明らかに人数が少ない。

どんな道を通る場合であろうと、夜間、都市から都市への移動は危険きわまりない。辺境を巡回する商人達は、最低でも二十名からなる完全武装の兵士達を警護につけるし、それ以前に移動は明るい昼間に限定するものだ。どうしてもという場合にも、全員で獣避けに煌々と松明を焚いて、歌を歌い、楽器を打ち鳴らしながら移動する。

それが、辺境に住む者の常識である筈だ。
なのに男達はむしろ――逆だった。
最初は馬こそ使っていたものの、火を焚かず、息を殺し、広そこからわずかに外れた枝道を選んで進んできた。街を出る所に向かっているかを誰にも悟られない、それが彼等にとって大だが、常識に真っ向から反した代償は大きかった。
そもそも最初は十人だった。神官が三人と護衛の騎士が七人騎士達が用意した七頭の馬に彼等は乗っていた。神官達は乗比較的小柄な騎士三人が、自分の馬に神官達を一人ずつ相乗りだがたった一晩で、その数は半分になった。
いや。馬も頭数に入れるならば半分以下だ。早々に馬は全滅かなくなった。馬を捨てて。未だ息のある仲間も見捨てて。
全員揃って喰われるのが嫌なら、そうするしかなかった。
「くっ……!!」
騎士の一人が突然、走るのを止めた。
彼は背後を――自分達が走ってきた道を振り返る。

体力が尽きて倒れた所を喰われる位なら、未だ剣を振り回す力が残っている内に、せめて一撃でも……そう思ったのかもしれない。だが後方に、彼等の怪物は見当たらなかった。

「ど、どこにいる!?」

血走った眼が右へ、左へ、忙しなく視線を走らせる。

「臆するな、異獣といえど、所詮は育ちすぎただけの獣、一撃げっ？」

頭上から……道の上に張り出していた樹木の梢から落ちてきた影に、騎士は頭部を鷲掴みにされていた。鋭い爪が喉の下に切り捨てて——ええいを利用して、騎士の頭をねに食い込んだかと思うと、その影は半回転、更に落下する勢頭部を失った骸が、血を噴きながら倒れる。

その脇で、奇怪な獣が——妙に手足の長い山犬に似た獣が、驚愕の表情で凍り付いた騎士の頭部を、地面に叩き付けた。

一度、二度、三度……四度目で騎士の生首は額の部分がぱっくりと割れ、頭蓋も砕けて、その中身をさらけ出す。異形の獣はぞろりと長い舌を伸ばすと、その割れ目から脳髄を丁寧にすくい取って喰い始めた。

異獣。それらはそう呼ばれる。
実のところそれは、特定の生物種を指す言葉ではない。
異なる獣、即ち、獣本来のあり方から逸脱したモノの総称だ。
それらの多くは凶暴、いや凶悪で、人間を――それもその脳髄を特に好んで喰う。本能的に異獣達は、そこに知性が、霊力が宿っていて、それを喰えば喰う程に、自らも手っ取り早く霊力を得られるという事も、知っている。
だから異獣は、人間を見れば、襲う。
空腹であるからではなく、ただただ、賢くなる為に。
確かにそれはもう、獣の行動原理ではない――

「ベンジャミン……！」
騎士の一人が悲鳴じみた声で、今、首をねじ切られた仲間の名を呼ぶ。
「もはやこれまでか……ッ！」
騎士の一人――クリフトン・アーノルドは悔しげに言った。
「諦めるのはまだ早い」
「バルターク卿？」
「騎士の誉れは一番槍と殿にあると心得よ！　人を守り生かす事こそ騎士の務め！　行け、

アーノルド、貴様は神官殿をお守りするのだ！」

バルタークと呼ばれた騎士は、堂々とそう叫び、立ち止まって剣を抜く。

最初に襲われた時にも、仲間を見捨てて逃げたりせず、そうして叫んでいれば、もっと説得力が有ったかもしれないが――生憎と、そんな道理を説ける人間は、この場に居ない。

道の左右から、異形の獣がゆらりと姿を現す。

その数――三頭。

どう考えても勝ち目は無い。一頭だけでも並の人間には手に余る怪物、ましてこの三頭は既に騎士や神官を喰っている。その分だけ知能も高ければ膂力も強い。人間を喰った異獣は、その増えた分の霊力で、肉体が補強されるからだ。

「バルターク卿、ご武運を！」

クリフトンが神官達と再び走り出すのを確認すると、騎士バルタークは剣を構えた。

時間稼ぎは当然として――せめて一頭は道連れにしたい。異獣といえども肉を持つ生物だ。剣で斬れば傷つけられるし、急所を刺せば殺せもするだろう。

だが――

（……なんだ？）

騎士バルタークはふと眉を顰めた。

異獣が――襲ってこない。
それどころか、じり、とそ
これは騎士バルタークの、
（……いや違う……これ……
は……？）
騎士バルタークは既に齢四
だがそれだけに彼は、クリ
な経験を積んでいる。そうし
いていた。
騎士バルタークは……その
異獣は目の前に三頭。それ
なのに周辺から――四方八
知らず知らずの内に異獣、
だがこの気配そのものが……
生臭さを欠くというか……
当たらない。気配であって気
（まるで……何か……巨大な
十五、騎士としては既に最盛期を
異なり、実戦を含めて様々
のが、稚拙ながらも身につ
過程で気配を読む感覚というも
。
感覚が、混乱するのを感じていた
は間違いない。
方から、ひしひしと伝わってくる
あるいは野獣の群れに囲まれてい
…目の前の異獣のそれとは、何か
これは、何だ。
たのか。
異質だった。
騎士バルタークの語彙には、それ
を表現する適切な言葉が見
遍なく存在する何か、だ。
怪物の腹の中に居るかの様な……）

そんな風にすら感じる。
そして次の瞬間――
「――ッ!?」
いきなり気配の一部が凝集した。
緊張し身構えていた騎士バルタークは、殆ど無意識の内にそれに反応する。
彼は目の前の異獣ではなく、気配の凝集を感じた真横に向けて剣を振り下ろしていた。
だが、手応えが無い。
勘違いか。いや――
「――これは？」
引き戻した剣に、紐の様なものが絡まっていた。
よく見ればそれは――植物の蔦だ。
一体これはどういう事か。剣を振った際に引っかけただけか？
「――ッ!?」
突然、聞こえてきた悲鳴が異獣のものだと気づいて、騎士バルタークは視線を正面に戻す。そこで彼が見たのは――剣と同じく、植物の蔦に絡みつかれた異獣であった。
いや。絡みつかれる等という生やさしい状態ではない。蔦は深々と異獣達の身体に食い

込んで締め上げている。みしと骨が軋む音すら聞こえてきそうだった。

「バルターク卿！」

先に逃げた筈のクリフトンの声が聞こえる。

振り向くと、若い宣教騎士が駆け寄ってくる姿が見えた。

「アーノルド！　神官殿はどうされた？」

「あちらにおいでです」

クリフトンが示す先を見やると、確かに、生き残った二名の神官が立っていた。

距離があるので表情をはっきり確認は出来ないのだが、どうやらかなり驚いている様子だ。クリフトンの表情にも驚愕と困惑の色が張り付いている。

やがて――

「――!?」

何かが砕ける音がしたかと思うと、異獣達が揃ってだらりと脱力した。どうやら致命的な部分の骨をへし折られたのだろう。口の端からは泡含みの血が零れ落ちるのが見えた。

そして――『吸収』が始まった。

「あれは……あれは……」

震えながらクリフトンが譫言の様に繰り返す。

無理も無い。こんな異様な光景を見るのは、バルタークでは勿論、蔓が、蔦が、まるで蛇の様に、蚯蚓の様に、緩やかにうねりながら異獣の中にねじ込まれていく。口から。耳から。鼻から。そして見開かれたままの眼から、眼球を押しのける様にして。それはまるで、植物が動物を陵辱しているかの様しかも、見る間に異獣の身体が萎んでいく。口の端から零れていた血すら止まり、まるで餓死した屍の様に干涸びていくのだ。吸っているのだ。血を。体液を。

「……我々は……夢でも見ているのか……」

やがて——完全に干涸びて半分以下の大きさになってしまった異獣の死骸は、音もなく何処かに運び去られていった。蔦や蔓によって引きずられる様にして。

それと入れ替わる様に、ゆっくりと木々の間に凝る闇の奥から、歩み出る——

「だ……誰だ!?」

見た目は、小柄な童女だった所か。まだ、あどけなさが歳の頃は……概ね十歳といし街の中で出会ったならば、多分に残る顔立ちである。もつい頬が緩んでしまう様な……そんな可愛らしい女の子だ。

だが騎士バルタークも、そしてリフトンも、そして神官達も、表情を強ばらせたままその童女を見つめている。

それが、ただの童女ではなく、野良着でもなく、普段着ではなく、いと……誰もが分かっているからこそ、身に着けているのは明らかだ。丈は長く、袖も長く、全体的に締め付ける場所が殆ど無見る仕立ての、白い衣装だった。更に印象的なのは、あちらこちいゆったりとした作りである。布の縁を縫う様に——いや飾る様にして付けられている朱色の紐だ。しかもこの衣装奇妙だが、何処か優美な印象の服である。

また——童女の頭部には四本の『角』が生えていた。

額の左右に短く小さなものが二本。やや後ろの——耳後ろ辺りに、まるで鹿のそれの様に枝分かれし、折れ曲がった大きなものが二本。勿論、角を模えられるが……そもそも、その角の根元を覆っている髪が、明若草の色——明るく鮮やかな緑。

「……何者、いや、何物か……！」

咄嗟にバルタークが問う。

童女はそれで初めて彼の存在に気づいたかの様に、眼を瞬かせて彼を見つめた。

「汝等は如何なる者か」

童女は静かな口調でそう問い返してきた。

同時に童女は右手に持っていた棒をバルタークに向けた。まるで何処かの樹の枝を折ってきたかの様に、先端にはしその葉は一枚一枚、まるで虹の様に全て異なる色で、反対側には金色の環が付いていた。

「我が床にて何をしておるのか」

問いを重ねながら、童女は体重を感じさせない足取りで前に出る。

「……!?」

バルターク達は、言葉も無くただ驚愕した。

童女の足跡に、鮮やかな色彩が弾けるのだ。

花だ。色とりどりの花が――咲いている。先程まで確かに存在していなかった花が、まるでそこに在って当然とでも言うかの様に生えていた。童女が一歩進む度に、彼女を追うかの如く、花の列が延びていく。

これは一体何なのか。

（いや、信じ難いが、これこそが……！）

「わ、我等は、故有って、急ぎこの土地を行く者でありま す」



神官の一人がその場に跪いて言った。
「貴女は、いや、貴女様は、もしや――もしや、この地の神にあらせられますか!?」
「……」
緑の髪を緩やかに舞わせながら、童女が神官を振り返る。
ただそれだけの仕草であるのに、まるで舞い踊っているかの様な優美さが有った。
「……我が名はイグドゥーラなり」
童女は厳かな口調でそう名乗った。
「汝等の前に立ちし眷属の名は、ウルリーケなり」
「……地神が……名を？」
クリフトンが驚きの表情で呟く。
多くの場合に、地神や亜神は名を持たない。少なくとも自ら名乗る事はまず無い。
核となっている獣は存在するが、地神それ自体が異獣やその神気を受けた野生動物の集合体である為、『個』の概念が、人間のそれとは著しく異なるからだ――と言われている。
特定の名で呼称される地神は存在するが、それらは大抵の場合に、崇め奉る人間達が便宜的に付けたものである。
まして――

「眷属にまで名が？」
「我等は数多にして唯独。眷属ウルリーケは
も古き眷属の一つである」
「……」
バルタークはクリフトンと顔を見合わせる。
何を言っているのかよく分からないが――
「これが……」
バルターク達が、危険を承知で夜の辺境を行き、密かに会いに来た『隣域の地神』。
伝わってくるのは曖昧な噂だけで、神官達もその姿を知らなかった神が、今、彼等の前に姿を現したのだった。

『ユキナリ神殿』の中で、最も大きな部屋の――床の上。
羊皮紙に描かれた地図が広げられ、それを囲む様にしてユキナリ達は床の上に直接、座り込んでいた。ちなみに、椅子や机を使わないのは、シリング邸の時と同様――単にこ

の地図よりも大きな机が、此処には無かったから、である。

「なるべく近場、出来れば一日か二日で往復可能で、かつ比較的安定した農作物の収穫が見込める街……ってのが条件なんだけども」

ユキナリは床の上の地図から視線を上げて、正面に座っているフィオナを見た。

「出来れば経済規模も大きい方が良い。ちょっと贅沢な条件かもしれないけれど、フィオナ――何処か心当たりは？」

「そうですね……」

フィオナは眉を顰めて地図を眺めている。

ちなみにこの地図は、王都の教会から逃げ出す際、ユキナリが持ち出してきた代物である。闇雲に逃げても意味が無いので、逃げるべき方向を決める為の、いわば参考資料だ。

元々は租税徴収の為に作られたものであるらしく、王都を中心にかなり広範囲が描き込まれている。恐らくこれだけの広範囲を一枚に記した地図は、他に在るまい。欠点は、全部広げようとすると、やたらに場所をとる、という点だった。

「この近隣だと、最も豊かなのはロストルークの街でしょう……多分」

ユキナリから見て、地図の真ん中からかなり右寄り……フリートラントの街の描かれている部分に向けて身を乗り出しながら、フィオナはそう答えてきた。

「多分？」

フィオナにしては珍しく曖昧さを残す物言いに、首を傾げるユキナリ。

今ユキナリ達が行っているのは、交易の相手探しだ。

勿論、街道を用いての交易には王都の許可が必要になるから、これはいわば密貿易なぬ密交易だ。出来るだけ近くの街で、とりわけ王都には知られずに交易出来る相手、フリートラントよりも農耕や牧畜で豊かな街が望ましい。

「ここからだと、山を一つ越える事になります。街道と馬を使えれば半日だそうですが、徒歩なら二日は見ておいた方がいいでしょうね」

フィオナは地図の上で指を横に動かし――やがて一点を指してそう言った。

「丁度この辺りがロストルークの街だと聞いています。近道はこの山道との事ですが、険しいので普通はこちらの迂回路を――」

「……ってフィオナ？」

ユキナリは彼女の台詞を遮って言った。

「えらく伝聞口調っていうか、人から聞いた話っぽい言い方だけど」

「人から聞いた話ですから、人から聞いた話っぽい言い方だけど」

とフィオナは肩を竦めた。

「このロストルークという街は、フリートラントとは殆ど――いえ、全く人の行き来は有りません。というより、周囲との交流が殆ど無いのです。平野部ですが、周囲をぐるりと山に囲まれた土地で、おまけに途中、湿地帯も在ったりして、外部との行き来が非常に面倒なのだとか。実を言えば、私もその存在を知ったのは、王都に留学してからです」

「つまり周辺地域とは殆ど没交渉って訳か。実は閉鎖性が高いっていうか……ロストルークの方が他の街との交流を嫌がるとか、そういう事は？」

「そういう話を聞いた事はありませんが……」

一応、フリートラントに定期巡回してくる商人達が、ロストルークにも立ち寄る事があるらしい。フリートラントと比べれば、商売としての旨みに乏しいらしく、数回に一度といった頻度である様だが。

元々自給自足が出来る程に豊かな土地であるらしく、外部との交易を考える必要が無いという事なのだろう。当然ながら文化や文明の発展からは取り残される訳だが、外部の様子を知らない限りは、自分達が『遅れている』という自覚すら生じまい。

「陸の上ではあるけど、鎖国中の日本みたいなもんかね」

「ニホン……？　何処かの街の名ですか？」

フィオナが耳聡く尋ねてくる。
「まあそんな所かな」
異世界だの何だのまで説明し始めると、色々面倒くさい事になりそうなので、ユキナリはそう言って誤魔化した。
「よし、手始めにこのロストルークという街と定期的な交易を持てるように動いてみよう。上手くいけば新しい雇用も生み出せる。一度、現地に出向いて視察かな。どういうものをフリートラントから送れば、喜ばれるか……」
価値の創出。同じ品物でも場所が変われば価値が変わる。フリートラントにおいては珍しくもないが、そのロストルークという土地では珍しい、そんな品を用意するのが理想だが、無ければユキナリが〈御遣い〉の力で創り出しても良い。余程に効率が良い筈だった。
だが――
「……ユキナリ？」
今更になってフィオナは驚いた様だった。
「まさか、貴方が行くんですか？」
「その積もりだけど？」

代理人を送る位なら、ユキナリ自らが直接出向いた方が手取り早い。

「ロストルークの街にも――あの辺りの土地にも地神がいるかりませんが、相当に力の強い神だという話を聞いた事がありたいな神が出向いていったら、どうなると思います？」

「どうって――まさか、問答無用で敵認定されたりするのか？」

「地神の交代は、先の地神を果たした地神は、不老になる基本的に、土地と霊的結合しており、土地そのものに融合している放っておけば自我が薄くなり、亜神が、既存の地神に攻撃を仕なっていくらしいのだが、いずれにせよ、老い衰えて死ぬと新たに地神になろうとする事は無くなる。だからこ

「しかし俺は亜神じゃないから――自然現象の様なものに便宜的にフリートラントの世界における亜神や地神と

ユキナリは別種の存在だ。

「ですが、現に亜神は貴方を地神として狙ってくるでしょう？」

「ああ、あれな……」

先日の怪鳥型の亜神を思い出しながら、ユキナリは顔をしかめた。

「何処でどう見分けてんだろうな」
「……多分、霊力の、強さ」
と口を挟んできたのはダーシャである。
「ユキの霊力の強さは、神と呼ばれる存在に、匹敵する、から」
「霊力ねえ……実は今ひとつ、その辺よく分かってないんだがな」
ユキナリの物質変換や、地神の環境干渉は、この霊力によって、ハリス真教会の最終兵器たる守護聖人像も、この霊力を蓄積出来る聖油によって稼働すると言われている。
だが、この霊力という力――ユキナリは直接、自分の感覚で捉えた事が無い。熱や電気ならば、直接それそのものを実感として理解出来るが、霊力はそうはいかないのだ。
だから『お前は霊力が強いのだ』と言われてもぴんとこない。
「まあ……その辺は何とか誤魔化す方法を考えるよ」
あるいはユキナリならば、相手の地神を斃す事も出来るかもしれない。
だがそれは即ち、ロストルークの肥沃さを支える地神の力を消してしまう事に他ならない。地神を殺す事で、ロストルークが貧困に喘ぐ様になってしまえば、本末転倒というか、元々の目的が果たせなくなる。

だがフリートラントにおいても、普段から地神は街の人々の生活に関わっていた訳ではない。むしろ数年に一度の生け贄の儀式以外は姿を見せない事の方が多かったと聞く。

地神とは接触せずに交易だけを行う事も可能だろう――とユキナリは踏んでいた。

「ですがユキナリ」

フィオナは眼を細め――ベルタを一瞥する。彼女は話についていけないのか、先程から浮かべて座っているだけだが……。

ただ、きょとんとした表情をしてます。貴方の場合、生け贄の儀式に出会したら、そのまま地神を殺してしまうのではないですか？」

確かにユキナリがフリートラントの地神を殺したのは、まさにそうした儀式で、生け贄に供される筈だったベルタを一助けようとしたからだ。

「まあ……そうなったらそうなった時か」

溜息をついてユキナリは言った。

「ここで悪い可能性ばっかり想像して足踏みしてても仕方ない見も兼ねて一度、そのロストルークって街に行ってみる。出来い様に、気をつけて」

「……分かりました」

ユキナリにロストルーク行きを止める積もりがないと分かったのか、溜息こそついたが、割りとあっさりフィオナは引き下がった。

「今回は、俺とダーシャの二人で行く。フィオナは街の仕事に専念してくれ。ベルタはフィオナの手伝いを頼む。それから……俺の留守の間、地神狙いの亜神が来るかもしれないが、その場合は下手に相手を刺激しないで放っておいてくれ。俺が居ないなら、これ幸いと地神の座に座ろうとする筈だろ？」

亜神が地神になるのには――土地と霊的結合を果たすには、日かかると言われている。

「念のために〈デュランダル〉の予備も三挺かそこら作って置いてくれ」

銃が有れば、人間でも地神や亜神を斃すのは不可能ではないが、亜神も地神を狙う様な個体なら馬鹿ではない。人間側が強力な武器を持っていると知れば、襲うのを躊躇する程度の知恵は備えているだろう。その意味で轟音を発する銃は、とても分かり易い威嚇になる。

勿論、射撃の訓練は必要だが、

「分かりました。それと――私からはロストルークの街長宛てに紹介状を書いておきます。どの程度効果があるかは分かりませんが、在って困るものではないでしょうし」

「助かる」

頷いてユキナリは地図をたみ始める。

ダーシャもこれを手伝いながら——

「……久しぶりに、二人きりなかったので、そう尋ねるユキナリ。

「なんか言ったか？」

つぶやきがきちんと聞き取れなかったので、そう尋ねるユキナリ。

ダーシャは一瞬、拗ねるかの様に唇を尖らせたが——

「……なにも」

そう言って首を振った。

●

大聖堂は、老若男女様々な人の姿で溢れかえっていた。

荘厳なパイプオルガンの音色と、信徒達による聖句の唱和が熱を帯びた空気を震わせる。信徒を本来の収容可能人数以上に——過密気味に詰めているのは、勿論、礼拝に参加したいという彼等の希望を、可能な限りに容れた結果だ。

だが、ただそれだけが理由でも、ない。実際には信徒達の放つ痺させる……という思惑も、礼拝を主催する側には有った。

人間は集団の生き物だ。

狭い場所に閉じ込められれば『個』を失いがちである。全体に有しているだけの他人の意見さえ、つい自分のものと錯覚しがちだ。

人々の口から紡ぎ出される祈りが、延々と大聖堂の中で渦を巻く。

その様子を――

「……ふむ」

大聖堂の二階のテラスから、満足げに見下ろす者が居た。

細面で神経質そうな印象の――初老の男性である。彼は長身痩躯に白い法衣を身にまとい、更にその上から、立場を示す為の飾り刺繍が施されたケープを帯びていた。

それは彼がこの大聖堂において――否、ハリス真教会という組織において、実質的な頂点に立つ存在だという証だった。

ジャスティン・チェンバーズ。

ハリス真教会の現教皇であり、枢機卿時代は地方の教化を一手に手掛けてきた男である。

一気にハリス真教会の教えを辺境にまで広めたその手腕を評価され、前教皇亡き後、数

名の競争相手を降して、彼は教皇となった。

教会上層部では、『他に類を見ない野心家』という評価で……時にその神経質そうな外見に反して『武闘派』などという言い方をする者まで居る。教化遠征軍の拡大と、宣教騎士団の装備充実、異端審問、ジャスティンの手掛けてきた仕事には、確かに血腥いもの、焦臭いものが少なからず含まれていた。

「そうだ。祈りなさい。祈りこそが力」

熱に浮かされる様にして、祈りの文句を唱え続ける信徒達を見下ろしつつ――ジャスティンは優しいとも言える微笑を浮かべて、続けた。

「その力こそが奇跡を生む」

そんな言葉を、聞く者も居ないテラスに残して、ジャスティンは踵を返すと――長い長い廊下を独り歩き始めた。

大聖堂と隣接してはいるが、こちらの区画に一般の信徒は入れない。無辜の信徒達が知るべきではない様々な事実が、此処には数多く秘匿されているからだ。司祭達ですらも、一定の身分に達していなければ、足を踏み入れる事を許されていない。

そんな場所で――

「……教皇猊下」

悠然と歩くジャスティンの脇に――いつの間にか、若い女性が一人寄り添っていた。

歳の頃は恐らく、二十歳を幾つか過ぎた程度。長い赤毛を結って束ね、左肩に掛ける様にして垂らしている。黒を基調とし胸元を大きく開いて素肌を晒すその衣装は、何処か娼婦の様でもあり、場違いも甚だしい印象だ。その一方で手には肘までを覆う白い手袋をしており、甲の部分には何やら円陣と文字、それに複雑な文様が描かれていた。

目鼻立ちはくっきりとしていて、化粧もしており、艶やかなものが、女の表情には滲んでいる――いや妖艶とさえ言える鬱なものだった。

「ヤロスラーヴァ……」

ジャスティンは傍らの女を一瞥して言った。

ヤロスラーヴァ・ベナーク――それが彼女の名前である。

ただしその名を口にする者は、ごくごく一部に限られる。彼女は多くの司祭や修道士は、彼女の姿を見ても、まるでそこに誰も在しない筈の人間であり、居ないかの様に振る舞うからだ。余計な口を挟んで現教皇に睨まれれば、立場どころか命すら危ない事を、教会上層部の人間はよく知っている。

たとえ異端と教義で断じている錬金術師が、その内部を堂々と闊歩していようと――その者が教皇の事実上、愛人であろうと、だ。

「首尾は？」

「上々です。全く、いつもの事ですが」

二人で並んで廊下を歩きながら、言葉を交わす教皇と錬金術師。

無垢な信徒達が見れば眼を剥く事だろう。

「聖油の循環装置にも不備は？」

「有りません。全く、有りません」

「それは重畳。その調子で頼みます」

そして二人は——廊下の突き当たりに在った、長い下り階段を降り始めた。

一階を通り過ぎて、更にその下……即ち地下に向かう長い階段である。

その先には、分厚い鋼鉄の扉が立ち塞がっている。番号式の鍵が掛けられ、これを開く為の十三桁の数字は、ジャスティンとヤロスラーヴァしか知らない。他に知っている者は居たが、皆、死んだ——先の教皇も含め。

「……」

解錠して、鉄扉を押し開く。

中に入った二人を迎えたのは——異様な風景だった。

知識や教養の無い者には、何の為の場所なのかさっぱり分からまい。そして多少なりと



も知識を持つ者が見れば、それは酒か何かの巨大な蒸留施設に見えたかもしれない。
壁を這い回る何十本もの金属管。それらが繋がる器械装置。更にまたそこから延びる金属管。流量調整弁の操桿や、日立った。
「『教祖』様のご機嫌は？」
「勿論、全く問題在りません。私の技術を以てすれば全く、微塵も、アレに問題など」
ヤロスラーヴァは微笑して言った。
「アレなどと言わぬ様に。聞かれたらどうしますか？」
ジャスティンは眼を細める。
「普通の〈御遣い〉とは違います。恐れ多くも我等が『教祖』様にあらせられる」
「……全く、失言でした」
二人はそのまま、大量の金属管が這い回る中を進み——部屋の最奥部に安置された巨大な硝子製円筒容器の前で立ち止まった。
全ての金属管は、床を、壁を、天井を伝い、此処に繋がっている。
そしてその円筒容器の中には——人影が浮かんでいた。
紅い聖油が満たされている為、その詳細ははっきりとしないが明らかに小柄な人影

――それも男のものなのだという事だけは、液体を通して滲む輪郭で分かる。ただ、それ以上の事は分からない。

「ヤロスラーヴァ。君には感謝しています」

ジャスティンは、血の様な液体の中にたゆたうその人影を眺めながら、言った。

「前教皇が、お付きの者共々急死なされましたからね。『教祖』様については口伝のみで、一切の書類資料が残っていない――私一人の知識と技術では、この聖棺は扱いきれなかった。かといって教会の内外で広く知識や技術を持つ者を募る訳にもいきませんでしょう」

「それはそうでしょうね、全くそうでしょう」

とヤロスラーヴァがひっそりと笑う。

「ハリス真教会の権威にして奇跡の源が、いつ、誰が造ったとも分からない人工精霊でした……などと公言しようものなら、全く、どうなる事か。正直、私も初めてこれを見た時は、驚きましたとも」

そしてヤロスラーヴァは――ふと淫猥な表情を浮かべて己の唇を舐めた。

「聖棺や『教祖』様を調べていく上で、錬金術師としては学べる事も数多く有りました。全く素晴らしい。感謝すべきなのは私の方でしょう」

「いずれにせよ。君には期待しています。聖棺の管理――しっかり頼みます」

ジャスティンは視線を人影からヤロスラーヴァに移して言った。
「はい……教皇猊下の仰せのままに」
ヤロスラーヴァはジャスティンへ――次いで硝子製円筒容器の中の人影に、恭しい仕草で頭を垂れた。

●

フリートラントの街を出て――半日。
ユキナリとダーシャは、複雑な山道を抜けて、早くもロストルークの街の近隣地域に辿り着こうとしていた。
「……意外とやってみりゃ出来るもんだな」
ユキナリは、自分の下で振動を続けるソレに触れながら言った。
鋼鉄の馬――いやユキナリの語彙の中から最も相応しいものを選んで言えば、それは自動二輪車だった。取り付けられている車輪は安定性を考えて前後二つずつ、車輪の数から判断すればバギーと呼ぶべきかもしれない。ただ全体的に細身なので、横から見ると、その輪郭は自動二輪車のそれに近いのだ。

ユキナリは、これを北欧神話の神馬にちなんで〈スレイプニル〉と呼んでいた。

全体の形は随分と厳ついというか、機械に前後四つの車輪を取り付けただけ、といった無骨な代物なのだが……大層な名前を付けたお陰か、半日余り力強く動いてユキナリとダーシャを此処まで運んでくれたのだ。

ただ――

「……気持ち悪い……」

ユキナリの後ろにしがみつきながら、呻く様に言うダーシャにフロードはきつかったか、やっぱり〈スレイプニル〉を停止させた。

「ああ、すまん。いきなりオフロードはきつかったか、やっぱり」

言ってユキナリは「サスペンションとか、もう少し考えるべきだったな」

まず自分が降りると、次に近くの木の根元に座らせるとダーシャに手を貸して彼女が降りるのを手伝い――そのままユキナリは、背中をさすってやった。

元々ダーシャはあまり血色の良い方ではないが、今は普段にも増して青白い。いきなり吐いてもおかしくはない、そんな様子だった。

「まあ次はもうちょい考えるよ」

「……次……」

まるで死刑宣告でも受けたかの様に、ダーシャが力なく項垂れる。

この〈スレイプニル〉は、実を言えば……ハリス真教会の宣教騎士団が持ち込んできた最終兵器、守護聖人像の部品を引っ張り出して、車輪に繋いだだけの代物だ。

守護聖人像は、いわば戦闘用の巨大ロボットである訳だが……あああいった複雑な機構を動かすには当然ながら、発動機に相当するものが必要になってくる。

ひょっとしたらモーターの類も内蔵されているのでは無いかと、それも複数――と思い至ったユキナリが、街の近くに放置されていた守護聖人像の残骸を漁ってみると、いかにもそれらしい代物が出てきた。

そういう訳でユキナリは後輪二つとその部品を、自らが作り出した駆動用鎖で繋ぎ、ブレーキ、ハンドル、といった必要最低限の部品を付けて、それらしく仕立て上げたのである。

燃料――といって良いのかどうか怪しいが――は勿論、守護聖人像と同じく聖油だ。音叉を介して一定の振動を与えてやれば、体積の膨張や収縮を繰り返す液体である。走り続ける為には定期的に音叉を刺激してやる必要は有るが、ユキナリの知るエンジンと異なり、聖油を利用した機関は、爆音を生じない。感覚としては電動式自動二輪に近いだろう。

ちなみにブレーキやハンドルは『前世』で乗っていた自転車を参考にしているので、走

行機械として見た場合は恐らくちぐはぐ、総合的な性能は――制動機能や、最小旋回半径等は、かなり怪しいものだろう。

実際、サスペンションもまともに装備していない為、ダーシャが酔ってしまった訳で。

元々妙に我慢強い性格の少女なので、黙って我慢していたのだろう――彼女の調子がおかしいと気づいたのは、本当に先程の事だ。

それでも、移動時間が半減できたのは喜ぶべきだろう。

「亜神や異獣に襲われる事もなかったしな。全体として見れば楽な道行きだった――」

「……」

ずり落ちかけた眼鏡の上から、恨みがましい眼でユキナリを見上げるダーシャ。

「訳でもないですね。すみません」

ユキナリはダーシャの隣に腰を下ろすと、改めてその背中を撫でてやる。

「うっ……」

だが未だ気持ち悪いのか、胸元を自ら握りしめてダーシャが短く呻いた。

「苦しいか？　どうする？　襟、緩めるか？」

「……お願い」

ダーシャの許しを得てユキナリは彼女の服の襟元に手を伸ばす。彼女の服は要所要所に

革を使っていて、見た目以上に締め付ける部分も多い。襟元を緩めるだけでも随分と楽になる筈だった。

「……ん」

ダーシャが短く喘ぐ。

彼女が身をよじったせいで、襟元を緩めただけのその衣装が何となく着崩したかの様な——いや乱れた様な印象になった。白い首筋や鎖骨が露わになって、ユキナリは何やらしてはいけない事をしてしまったかの様な、妙な後ろめたさを感じる。

「あー……」

ユキナリは明後日の方に眼を向けながら、改めてダーシャの背中を撫でてやる。

しばらくダーシャはじっと撫でられるがままになっていたが——

「……」

ユキナリの腕に沿って身体を滑らせると、彼の胸にもたれ掛かってきた。

「……ダーシャ？」

「少し……このまま」

ユキナリの肩に頭を乗せてダーシャが囁く様に言う。

「……駄目？」

「いや、まあ、いいけどさ」
左手で頬を掻きながらユキナリは言った。
「……久しぶり……」
「うん？　何が？」
「ユキと……二人きり。こうするのも」
顔は見えないが、ふとダーシャが微笑む気配が有った。
「あー……」
二人きりで旅をしていた際には、野宿も多く――よくこうして身を寄せ合い、眠ったものである。ダーシャは割りとめてやる必要が有ったからだ。
だがフリートラントに定住する様になってからは、確かに、眠る事も減った。急拵えでも屋根と壁がある場所で、寝具に包まれて眠る事が出来るからである。
しかし……
（……どうにも……な）
以前はこうして抱き合う様にしても、あまり意識する事は無かったというか……ダーシャ

の身体を暖める、という以上の何かを考えていた訳でも無いのだが。今は妙に落ち着かないというか、やけに鼓動が速まるのを感じる。

そしてそれは、ダーシャも同じである様だった。

彼女の心臓の鼓動が、お互いの胸を――骨と肉を介して伝わってくる。ダーシャの鼓動を感じると、ユキナリの鼓動がより強く速くなり、それがまた彼女の鼓動を強く速くする。行ったり来たり、互いに鼓動をやりとりするかの様な、不思議な感覚だった。

（俺の身体は作り物だけど。こういう所は本当に変わらないんだよな）

いや。むしろ感覚が鋭くなっている分だけ、他人の身体と相互に影響し易くなっているのかもしれない。

「……ユキ」

ふと何か思い出したかの様にダーシャが言った。

「何だ？　まだ苦しいか？」

「何だか、嬉しい。凄くそれは他人に触れて存在を確かめたがるダーシャの癖によるものか。それとも、もっと別の感覚によるものか。今は妙に落ち着かな

「……そうか」

何か妙に照れくさい。ユキナリは何かから逃れようとするように、視線を彷徨わせてしまう。

――ふと、未だ彼方に在るそれに気づいた。

「……あれか」

遠くに街壁らしきものが見える。

距離を考えると、随分と大きなものだが――

「……？」

ユキナリは眼を細める。

それは壁というよりも、柵というよりも、密に柱が並んでいるという印象である。

まるで樹齢百年以上の大樹の様に見えた。平面が続いているようにも見えるが、いずれも妙に大きい。

「……ユキ？」

ふとユキナリの胸から身を離して首を傾げるダーシャ。

「どうしたの？」

「ああ、いや……ロストルークの街らしいのが、ちらっと見えたんでね」

「……」

ダーシャがユキナリの視線を追う様にして彼方を見遣る。
「どうする？　もう少しここで休むか？　それとも街に着いてから休むか？」
「……ん」
ダーシャは襟元を再び直して頷いた。
「もう大丈夫」
「無理はするなよ」
別に一分一秒を争う様な旅でもない。気分が優れないのならば充分に休んでから、というのも順当な判断である。
しかし――
「……大丈夫、なんとか」
そう言ってダーシャは再び〈スレイプニル〉にまたがった。
続けてユキナリも乗ると――彼女は、彼の身体に腕を回してついてくる。
「ユキのお荷物には、なりたくない」
「……何言って」
と言いかけて、ユキナリは止めた。
背中からぎゅっとしがみ

代わりに――
「ありがとう」
背中に感じる少女のぬくもりにそう礼を言うと、ユキナリは再び〈スレイプニル〉を発進させた。

●

殆ど他所との交流の無い――いわば隠れ里の様な街。
ロストルークとは、そういう街であるらしかった。
だからこそユキナリがロストルーク行きについて、一番、懸念していたのは……そもそもいきなり出掛けていって、街に入れてもらえるかどうかだった。一応、フィオナの紹介状は持っているものの、ロストルーク側は、フィオナの名前など知らない可能性が有る、というより十中八九、知らないだろう。さすがにフリートラントの街の名位は知っているだろうが。
ともあれ、まずは正攻法で。
そう考えたユキナリはロストルークの街の門の前までやってきた。

だが――

「こいつは……」

ユキナリは唖然としてその『門』とその左右に広がる『壁』――いや『柵』を眺めた。

それは――林だった。

樹が並んでいる。少なく見積もっても樹齢数十年、あるいは百年に達しようかという大樹が、整然と、あり得ない位に等間隔で、一直線に並んでいるのである。それぞれの枝が左右に数多く伸びているせいで、樹と樹の間を通り抜ける事は出来そうに無い。根元部分では地上に露出した根がやはり複雑に絡み合っていて、殆ど隙間が無いのだ。

これは――一体何なのか。

まさか優秀な庭師がこの街には居て、街の壁の代わりになる様に木々を植えて剪定しました――という訳ではなかろう。

さすがに『門』は人工物、つまりは丸太を組み合わせたものである様だが、それは今、外に向けて開かれていた。

何らかの方法でユキナリ達の来訪を知ったのか。

一瞬、そうも考えたが――

「――ユキ」

ダーシャが、何かに気づいた様子で声を掛けてくる。
彼女が指し示す方を見るとそこには、奇妙な行列が静々と進んでくるのが見えた。
参加者は老若男女様々だが――全員が、何枚か葉のついたままの、木の枝の様なものを手にして、これも様々だが――全員が、何枚か葉のついたままの、木の枝を左右に、一定の動作で繰り返し振りながら歩いている。
何か宗教儀式を想わせる風景だった。
「あれは――祭祀行列か」
「……多分」
答えるダーシャの声には、疑念の揺らぎが有った。
土地が変われば地神も変わる。祭祀行列の形式がフリートランと違う事は別に驚くには当たらないだろうが……
「ここの地神は余程の大食らいか」
門をくぐり、目の前を通り抜けていく祭祀行列を見ながら――と進んでいく。
大きな山車が引かれて静々と進んでいく。
その上に乗っているのが、地神に捧げられる供物なのだろう。
つまりは生け贄だ。だがその数が……多い。
ユキナリ達の位置から見る限り、少なくとも五人は乗っている。どうも全員が仰向けに

寝かされているらしく、陰になっている位置に更に生け贄が居るかもしれないのだが。

フリートラントでは数年に一度、それも若い娘が一人だったが。

だが此処では――

「お年寄り……？」

とダーシャが呟くのは、寝かされている生け贄の殆どが白髪の老人だからだ。ユキナリ達に見える五人の内の四人が、老人、一人が、少年の様だった。

「どういう基準なんだ……？」

今ひとつ、訳が分からないまま、祭祀行列が通り過ぎていくのを眺めるユキナリとダーシャ。すると行列に参加している者の一人が気づいた様で、木の枝を振るのを止めて、こちらに駆け寄ってきた。

「……貴方達は？」

そう尋ねるのは二十歳程の若者である。

「ロストルークの人間ではありませんね？」

「……ああ」

ユキナリは慎重に相手の反応を窺いながら頷いた。

「事前の連絡も無く、突然、隣の、フリートラントの街から、このロスト

ルークに用が有って、来た」

「フリートラント……ああ、フリートラント！」

一瞬、怪訝そうな表情を浮かべてから、若者は一転して笑顔となり頷いた。

「聞いた名前です。フリートラント。すみません、あまり外との交流が無いもので」

若者がそう謝ってきたのは、最初、フリートラントの名が分からなかったからか。

近隣の街と交流が殆ど無いのであれば、確かに隣の街の名前についても、咄嗟に思い出せなくても当然だろう。だがその一方で、外から来る者を拒むような、閉鎖性に凝り固まった街、という訳でもない様だ。

（……なるほど、確かに豊かな街なんだな）

若者の着ている衣装や、彼自身の血色の良さから、その程度の事は分かる。

初めて見る余所者に対しても、警戒心が薄いのは、街そのものが平和な証拠だろう。大抵の場合、貧困と治安の悪化は連動する。餓えの恐怖が常に隣に在る様な生き方をしている者達は、他人を見ると先ず『俺の食い物を奪う敵』とみなすからだ。

それに――

（その一方で、冶金技術やらが、無いのか？　ひょっとして）

山車は完全に木製で、基本的には木材同士を組み合わせて造られているらしい。釘の類

も見当たらない。目の前の若者の衣装にも、金属を用いた装飾品は皆無だ。それどころか衣装には釦も無い。

（まるで和服みたいだ……）

細かな部分は異なるが、帯で服をまとめて留めるその形式は、ユキナリの記憶の中に有る和服に近い。

（そういえばロストルークの周辺には湿地帯が在るとフィオナが言ってたな）

日本は世界平均からすると多湿な土地だ。地理条件、気象条件の幾つかが日本と似ている結果、和服に似た服飾文化になっているのかもしれない。

ともあれ――

「しかし、フリートラントからのお客人、大変申し訳ないですが、今は地神イグドゥーラ様をお祀りする為の、大事な儀式の最中で……」

若者は祭祀行列を振り返って言った。

「ああ。お構いなく――」

ユキナリは一瞬、ダーシャと目配せしてから続けた。

「あの山車の上の方達が、生け贄、ですか？　ご年配の方が多い様ですが」

ある意味で刺激的な言葉である。若者がどういう反応を示すか分からない為、ユキナリ

は背中に吊った〈デュランダル〉を意識しながら問うてみた。
「生け贄？　ああ――なるほど、まあ、そういう言い方もありますか」
若者は大きく頷いて言った。
「確かにあの人達はイグドゥーラ様に捧げられます。年寄りが――むしろフリートラントでは若い方が供物に？」
「……まあ、そうですね」
ベルタの顔を脳裏に浮かべながらユキナリは頷く。どうも地神にとっては、若い娘が一番『美味』であるらしく、だからこそ捧げられるのはベルタのような少女だったのだが……
「ロストルークでは、年齢は関係ありませんね。まあどうしても年寄りが多くなってしまいますが、これは仕方ないでしょう。やはり年寄りは身体が弱いですから」
若者は朗らかな笑顔でそう言った。
「山車を引いているのは家族ですよ」
「……!?」
顔を見合わせるユキナリとダーシャ。
家族が率先して、年寄りを、生け贄に捧げる？
改めて山車を引いている者達の顔を見たが、彼等の横顔に悲壮な色は無い。フリートラ

ントの神官達の様に、罪悪感が麻痺しているだけかもしれない。

「では私はこれで。お客人は街の中でお待ちいただければ。街長は北の方に大きめの館を構えていますから、御用があればそちらに――」

「すみません、最後に一つだけ」

ユキナリは山車の方を見ながら言った。

「生け贄に――地神への供物に選ばれるのは、ひょっとして、助かる見込みの無い重病人、重傷者、そういった人々なんですか？」

「ええ、そうですね」

若者は平然と頷いた。

●

街長の館には、労せずして辿り着く事が出来た。

〈スレイプニル〉は街門の脇に置き、徒歩で、若者に教えられた通り、北を目指して大雑把に移動しただけだが――碁盤目状に綺麗に整理された街であるせいか、特に迷う事も無かった。

途中で、ユキナリは街の様子を観察した。

フリートラントと何が違うのか――その事を念頭において見ると、先ず気づいたのは水の豊富さだ。街の中を細いながらも川が何本か流れており、いずれもが綺麗な水で、中に水草が生えたり、小魚が泳いでいるのが見えた。

小川には幾つも橋が架けられていて、これもまた、ロストルークの街の風景を独特のものにしている。これらの橋も全て木製で、殆どが組木細工の様な工法で造られている様だった。さすがに木を切ったり削ったりする為の工具は鉄製なのだろうが、本当に街中では金属加工品を殆ど見ない。

上手くこの街ならではの需要を探し出せれば、フリートラントとロストルーク、互いに利のある交易が出来そうだった。金属製品ならば、余程に複雑なものでもない限り、ユキナリが作り出す事が出来る。

そして――

街長の館を訪ね、中から出てきた使用人に取り次ぎを頼んで待つ事――しばし。

「長がお会いになるそうです」

戻ってきた使用人は、そう言ってきた。

「ただ……実を申し上げますと、現在、別口のお客様がお越しになっておられまして。少々

お時間を頂きたいのですが……」

「構いません。待たせて頂きます」

一礼して館の中に足を踏み入れるユキナリとダーシャ。

街長の館は平屋建てで、やはり何処か和風な印象の——日本家屋を彷彿とさせる建物だった。流石に障子や襖は見かけないが、あまり壁やら扉やらで細かく仕切られておらず、窓を開くと風通しが良くなる様な構造になっている。

「なんだか懐かしささえ感じるな……」

「……懐かしさ？」

ユキナリの呟きに耳聡く反応するダーシャ。

彼女は隣を歩きながら、小首を傾げてユキナリの顔を見上げてきた。

「ああ、俺の『前世』の世界は、こういう形式の家が多かった……って訳でもないんだが、まあ、似た造りの家をな、見た事がある」

流石に二十一世紀ともなれば、いかに日本とはいえ、平屋の純日本風家屋は少数派であった筈だ。都市部であれば尚更の事である。

「では、こちらでお待ちください」

使用人はそう言って、ある一画を指した。

その辺りは衝立の様なもので区切られていて――その向こうで待て、という事らしい。
ユキナリとダーシャが回り込むと、籐編みのものらしい椅子が二つと、小さな机が一つ置かれている。何となく日本風ではあっても、流石に座布団が出てくるという訳ではない様だった。
「ふう……」
ユキナリは椅子に腰掛けると下ろすダーシャ。
同じ様にして向かいに腰をじっと見つめていたが――
彼女はしばらく、ユキナリの顔をじっと見つめていたが――
「……ユキ」
ふと何か意を決した様子で声を掛けてきた。
「さっきの……地神の」
「分かってる」
ユキナリは顔をしかめてダーシャの台詞を遮った。
「地神が居るらしいってのは、フィオナに聞いてたが。まさか来て早々に祭祀行列に出会す事になるとはな……」
ダーシャが気にしているのは、ユキナリが先の祭祀行列をそのまま何もせずに『見逃し

た』一件だろう。

ユキナリはかつて、フリートラントでベルタが生け贄に捧げられるのを見て、これを実力で食い止めた。そして生け贄の儀式を邪魔されて怒る街人や神官達に、かなりの不快感を抱いていた。

ユキナリは、生け贄という儀式自体を嫌う。

ベルタの件は成り行きだったとしても、同じ様な場面に出会ったとしても、ユキナリはそう理解していただろう。そしてこのロストルークでもユキナリがその種の儀式を邪魔するのではないか——と危惧していた筈だ。

勿論、迂闊に儀式を邪魔すれば、フリートラントと同じ事が起こる。

もしユキナリが地神を殺して生け贄の儀式を廃止させたとしても、それは結局、ロストルークをフリートラントと同じ状態に陥らせるだけだ。フリートラントの苦境を改善する為にユキナリはこのロストルークまでやってきたというのに、それでは何の解決にもならない。

だが……ユキナリは街門で出会った祭祀行列を、何をするでもなく、ただ見送った。

ではフリートラントの時と、このロストルークの時とでは、その辺りがダーシャには何が違うのか。

その辺りがダーシャには何が違うのか。

「なあ、ダーシャ。『姥捨て山』って知ってるか？」
「ウバス……？　何？」
「いや、何でもない。やっぱ知るわけないか」
ユキナリは曖昧に笑って首を振った。
「そういや、病院が現代の姥捨て山だ、なんて話もあったな」
「……？」
ダーシャはきょとんとした顔でユキナリを見つめている。
「俺の『前世』の話だよ。姥捨て山っつってさ、年老いて弱ったんだ。貧しくて自分達が喰うのに精一杯だったから、食いえていると、自分達まで死んでしまうから――ってさ」
「ユキ……も……捨てに？　お年寄り、を？」
「え？　あ、いや、そういう風習が俺の『前世』の世界には有ったって話だよ。俺が生まれた頃には、もう何十年、何百年も前の、昔話になってたのだろう、ダーシャは驚いたのだろう、眼鏡の奥で眼を瞬かせている。
そう。ユキナリの感覚ではもう、昔話の領域だ。
だがこの世界では――というより、ロストルークでは、至極当たり前の風習なのかもし

れない。ユキナリ達に祭祀行列の事について説明してくれた。

地神に供物を捧げる、という名目でこの街の人間は姥捨をしているだけではないか。

そんな風に最初ユキナリは思ったのだが——

「この街は見ても分かるけど、割りと豊かっていうか、人々の暮らしぶりに余裕があるみたいに見える。姥捨てをしてるとは、思えないんだよ」

「それは……そう、かも」

「あの山車には男の子も一人乗ってたしな。それに全員、だよ——これはむしろ安楽死の類じゃないのかってさ」

「……安楽死？」

「地神に生け贄に捧げられるのが、楽な死に方かどうかは知らないけどな」

ユキナリは椅子の背もたれに身体を預けながら言った。

「俺の『前世』でもう、自分では息すらまともに出来ない様な——けど、機械の、絡繰りの手助けがあれば、そのまま生き続けてる、そんな年寄りが沢山いてさ。元気になる見込みの無い年寄りを無理矢理生きさせても、誰も報われない、だからいっそ——って感じで、その絡繰りを止めちゃう事も有ってさ。その是非が「その絡繰りを、止めれば——」議論されたりもした」

「勿論、死ぬ。つまりは殺すって事だよ」

ユキナリは、はっきりそう言い切った。

「別に殺すって言っても刃物で刺したり、首を絞めたりって事じゃない。ただ生きる力が自然に死んでしまうのに任せるってだけで――」

「……」

ダーシャは眼鏡の奥で何度も眼を瞬かせている。

「他にも、もの凄く痛くて苦しい病気ってのがあってさ。でも長引かせて苦しませるより、いっそ殺してやった方が――そういう考え方もあって。その際に、苦しまずに死ねるように治す事が出来ない。治る見込みが全く無い。だから無理って考えられた方法が『安楽死』さ」

「ユキは――あの祭祀行列が、その、安楽死だ、と？」

「そういう可能性が有るな、と思ったら、止められなかった」

ユキナリはそう言ってから長々と溜息をつき、掌で目元を覆った。

もう回復の見込みの無い老人。もう治癒の見込みの無い病人。

そういった者達を――『早く楽にする』のは、慈悲の様に見えても、実際にそれを実行する人間には多大な精神的負担になる。だから地神への供物という形で地神にそれを押し

つける。一方、地神は生け贄を喰う事で、自我の希薄化を防げる。
どちらにも利のある話――という事になる。
では、こうした儀式をユキナリがぶち壊す事に、果たして『正義』は在るのか。
フリートラントも、ロストルークも、そして恐らく他の地神との関係を何百年と続けてきた街も。既にそれが当たり前のものとして、制度が出来上がっている。
これを壊す事は、果たして、是か、非か。
「……ユキ……」
ダーシャが席を立って、ユキナリの隣にやってくる。
ユキナリが自分の目元を覆う手を取って、ダーシャは自分の頬にそれを押し当てた。
「結果が、正しくても、間違ってても……私は、ユキの味方、だから」
「……ダーシャ」
「理屈とか、どうでも、いい」
「……」
「ユキが、嫌だって想ったら、生け贄も、地神も、潰せばいい……私は、どんな時でもユキの……味方、だから……」
ダーシャがユキナリの掌の感触を確かめようとするかの様に、眼を閉じる。

ユキナリはしばし、彼女の頬のぬくもりを感じていたが――
「お待たせ致しました、ユキナリ様」
ふと衝立の向こう側から声が掛かる。
慌てた様にダーシャはユキナリの手を放し、ユキナリもこれを引っ込めた。
「街長がお会いになりたいそうです。どうぞ、こちらへ、お連れ様もどうぞ」
使用人が衝立の向こう側から顔を覗かせて、そう促してくる。
ユキナリとダーシャが、彼の案内に従って歩き始めた――その時。
「――貴様ッ!?」
いきなり、悲鳴じみた声が上がった。
「……!?」
何事かと振り向くユキナリ。
彼の視線が向かう先に立っていたのは――見覚えのある格好のシントの神官たる事を示す法衣姿の二人だった。しかもその一人は――
「――ルーマン?」
あの、孤児院で出会った神官だ。
「何故、貴様が此処に居る!?」

騎士達は――恐らくはフリートラントにやってきたハリス真教会の宣教騎士二人は、揃って腰の剣に手を掛ける。様に大人しくしていた筈なのだが……どうもこのロストルーク守護聖人像を破壊され、フリートラントでは牙を抜かれた獣の満々といった様子だった。ではユキナリに敵対する気

しかも――

「奴だ、奴です！」

ルーマンの隣に居た神官がユキナリを指さして叫んだ。

「奴こそが――『神殺し』、呪われるべき悪魔です!!」

「……」

ユキナリは眼を細めながら背中の〈デュランダル〉に手を掛けた。

『神殺し』云々については、事実なので反論する気にもならない。

問題は――あの神官が、一体、誰にそれを訴えているのか、だ。

単なるロストルークの人間にそれを伝えたところで、ユキナリに害も無ければ、神官達に利もあるまい。わざわざロストルークにやってきているという事は、此処にはユキナリに対抗する何らかの方法があると考えたからだろう。

では、それは――何か？

「――其奴が」

それはルーマンの背後から姿を現した。

「汝等の言う『神殺し』であるか」

「……女の子？」

ダーシャが呟く。

そう。それは確かに『女の子』に見えた。『女の子』だった。『女の子』に見えた。自身が少女であるダーシャがその言葉を以て表現する程に――幼い童女に。

それは一見する限りでは、童女に見えた。

だが……単なる童女は緑の髪も、鹿の様な――いや、木の枝の様に枝分かれした角などを頭に備えてはいまい。勿論、それらは単なるカツラや装飾品である可能性も有ったが……

（――こいつ）

ユキナリには、それが童女にはとても見えなかった。

全身から噴き出てくる何かが、その童女の姿を全く別のものに見せている。ユキナリの眼には、以前に斃した地神よりも、亜神や異獣よりも、そして守護聖人像よりも遙かに巨大な力の塊に見えた。普段、霊力というものを感じる事の無いユキナリだが、こうも巨大になると、自然と物理現象に転化している部分が、陽炎の様に、その者の周囲に纏わり付

く『揺らぎ』として見えるのだ。
これは童女ではない。そも――人間ではない。
「左様ー」
ルーマンがユキナリを指さして高らかに叫んだ。
「彼奴こそが、我等が神を誅した怪物、我等の敵、そして貴方様の眷属にも害を及ぼしましょうぞ、此処まで現れたのが、何よりの証拠……ー」
「――って好き勝手言いやがって」
ユキナリは背中の〈デュランダル〉を抜きながら呟いた。
「要するに、余所の神様に俺を罰して貰おうって魂胆かよ」
「……ユキ……ー」
鞄を開いて〈レッチリ〉を取り出しながらダーシャがユキナリの背を守る様に立つ。
「後ろ、からも」
「分かってる」
強烈な気配が四方八方から押し寄せてくる。
宣教騎士達や、神官達が後ずさり、代わりに幾つもの人影がユキナリ達を取り囲む様に

して現れた。それらは老若男女様々に異なる姿であったが、いずれも、最初の童女と同じく強烈な気配を伴って――しかも全員に緑の髪と『角』が備わっている。

彼等もまた人間ではないのだろう。恐らくは――

「イグドゥーラの眷属達よ、始まりの眷属ウルリーケよ、忌まわしき『神殺し』にどうか神罰を与え給え……！」

ルーマンが、ここぞとばかりにそう叫んだ。

●

辺境地域を回る商隊は、命懸けの商売である。

所属する共同体を離れて移動する人間の小規模集団は、亜神や異獣にとって格好の獲物になり得る。その種の怪物達にとって人間を、というよりその知性と霊力の源たる脳を喰う事は、自身の霊格を上げる為に、一番手っ取り早い方法だ。

そして大抵の亜神や異獣は、元が野生の獣であるだけに堪え性というものが無い。

勿論、何らかの形で地神と契約している都市の周辺や、主要な街道は比較的安全なのだが――そうした地域を一歩でも出ると、途端に危険の度合いは跳ね上がるし、時に力を付

けた亜神は、地神の統べる領域にも踏み込んでくる。

故に、商隊は常に武装している。

商人達も武器を持つし、傭兵を雇う事も多い。勿論、五人ろで、異獣の群れや亜神を斃すのは難しい。だから彼等の武で地神の支配域や都市の内部にまで逃げ込む為のものだった矢、投槍、投網、といった投擲するものが主で、剣や槍を持ぶ様な真似はまずしない。

大抵の異獣や亜神からは、それで充分、逃げる事が出来たのだ。

だが――

「――ッ!?」

轟――と大気が鳴動する。

気がついた時には、既に遅かった。

先ず最初に馬に乗って商隊を先導していた傭兵の頭部が…消えた。

まるで冗談の様に、瞬きを一度したその間に、傭兵の頭部は被った兜ごと無くなっていたのである。代わりに首からは血が噴き出して、残された身体を紅く染めていく。やがて一通り血を噴き出した後――首の無い骸が、自分は死んでいるのだとようやく思い出した

様に、傾いて、落ちて、地面で跳ねた。

「な、なんだ!?」

動揺する傭兵達と、商隊の商人達。

彼等は、自分達を襲った相手を捜して、視線を右往左往させる。だが見えない。見つからない。前後左右何処にも異獣や亜神の姿は無い。熊や虎といった猛獣の姿も無い。

そこに――

「――え」

商人の一人が間の抜けた声を上げる。

彼の足下に、血まみれの兜が落ちて、跳ねたからだ。

それは、消えた首が被っていたもので――

「……上!?」

傭兵達が、ようやく気づいて頭上を振り仰ぐ。

そこで彼等は見た――まるで落ちるかの様に猛烈な速度で急降下してくる、異形を。

四枚の翼を持つ、巨大で奇怪な鳥。

「逃げ――」

傭兵達、商人達の真ん中に、空飛ぶ亜神の巨体が突っ込んでくる。

二人目に頭を持って行かれたのは、馬車の御者台に乗っていた商人だった。

「ギキイイイィー　脳～ッ！」

歓喜の声を上げながら舞い上がる怪鳥は、爪と嘴で刈った頭部を割り開き、異様に長い舌を伸ばしてその中身を啜る。

「脳ッー　脳ッー　脳味噌ッー　オイシイオイシイオイシイオイシイ～ヨォー」

「……ー」

恐怖と驚愕で混乱する一行。

空飛ぶ亜神は極めて珍しい。だからこそ傭兵達も商人達も、飛ぶ鳥を射落とせる様な武器は――そんな長射程で、かつ精度のある武器は、彼等の知識には存在しなかった。

しかも……

「脳～脳～モット、脳ォオオ～ッー　じゅるじゅる～！」

「ひいっ……!?」

亜神はその隙に、また商隊のど真ん中に突っ込んできた。

その後は……ただの虐殺だった。

嘴が、鉤爪が、傭兵を、そして商隊の商人を次々と殺していく。逃げようとした傭兵は、むしろその動きが相手を刺激したのか、真っ先に鉤爪で腹を貫かれ、頭から貪り喰われる事となった。

奇声を上げながら、鳥型の亜神は男達の頭部を割り開き、そこからこぼれ落ちる脳を嘴で啜っていく。哀れな犠牲者達は、白目を剥き、がくがくと四肢を痙攣させ、それから更に噛み千切られ、噛み砕かれ、最後には、亜神の体内に全てが呑み込まれていった。

「人間如キ……如キガ……殺ス……殺スカラ……モット……脳ッ！」

愉しげに、歌うかの様に吼えながら、亜神は人間を貪り喰っていく。

それは数日前、ユキナリがフリートラント近隣の渓谷において、仕留め損なった――あの亜神であった。

●

この状況は、まずい。

咄嗟にそう判断したユキナリは――〈レッチリ〉を構える彼女を脇に抱えて走り出したダーシャの腰に左腕を回すと、

「ユキ……!?」
「逃げるぞー」
ユキナリはそう叫んで街長の館の廊下を走り――目に付いた窓の鎧戸を蹴破った。木片を撒き散らしながらダーシャと共に外に飛び出ると、ユキナリは地面で一回転。身体についた土砂を払う間も惜しんで、再びダーシャを抱え直して走り出した。
「ユキ……どうして」
「アレはまずい。色々な意味でアレと戦うのはまずい」
ユキナリは走りながらそう説明した。
「見た目が人間だからって、舐めてかかるとえらい目に遭うぞ」
「……眷属、と言っていた。最初に出てきた眷属――あの眷属があまりにも強大だ。眼には本来、映らない筈の霊力が、あまりに濃密で強大である為、陽炎の様な形で見えているのである。
「ああ。要するにこの地の地神の力が半端ない……！」
地神イグドゥーラ――その本体がどんな奴なのかは分からないが、以前斃したフリート

ラントの地神とは全く桁違いだった。それこそ、ウルリーケなど同等だろう。

しかもウルリーケには劣るこれだけでも数の上で不利なのだが――

「……あの眷属、元生け贄かウルリーケは勿論だが、他ろ弱々しい印象の者達が多い

此処から先はユキナリの推ているのだろう。恐らくは自

いずれにせよ、見た目がこれでは、戦いにならない一方的にユキナリ達が狩

「当然、追ってくるか……」

ユキナリは背後を振り返つ

ランの地神とは全く桁違いだった。それこそ、ウルリーケなど同等だろう。

しかもウルリーケには劣るこれだけでも数の上で不利なのだが――

「……あの眷属、元生け贄かウルリーケは勿論だが、他ろ弱々しい印象の者達が多い

此処から先はユキナリの推ているのだろう。恐らくは自

いずれにせよ、見た目がこれでは、戦いにならない一方的にユキナリ達が狩

「当然、追ってくるか……」

ユキナリは背後を振り返つ

ランの地神とは全く桁違いだった。それこそ、ウルリーケなど同等だろう。

しかもウルリーケには劣るこれだけでも数の上で不利なのだが――

「……あの眷属、元生け贄かウルリーケは勿論だが、他ろ弱々しい印象の者達が多い

此処から先はユキナリの推ているのだろう。恐らくは自

いずれにせよ、見た目がこれでは、戦いにならない一方的にユキナリ達が狩

「当然、追ってくるか……」

ユキナリは背後を振り返つ

ランの地神とは全く桁違いだった。それこそ、ウルリーケなど同等だろう。

しかもウルリーケには劣るこれだけでも数の上で不利なのだが――

「……あの眷属、元生け贄かウルリーケは勿論だが、他ろ弱々しい印象の者達が多い

此処から先はユキナリの推ているのだろう。恐らくは自

いずれにせよ、見た目がこれでは、戦いにならない一方的にユキナリ達が狩

「当然、追ってくるか……」

ユキナリは背後を振り返つ

ランの地神とは全く桁違いだった。それこそ、ウルリーケなど同等だろう。

しかもウルリーケには劣るこれだけでも数の上で不利なのだが――

「……あの眷属、元生け贄かウルリーケは勿論だが、他ろ弱々しい印象の者達が多い

此処から先はユキナリの推ているのだろう。恐らくは自

いずれにせよ、見た目がこれでは、戦いにならない一方的にユキナリ達が狩

「当然、追ってくるか……」

ユキナリは背後を振り返つ

ランの地神とは全く桁違いだった。それこそ、ウルリーケなど同等だろう。

しかもウルリーケには劣るこれだけでも数の上で不利なのだが――

「……あの眷属、元生け贄かウルリーケは勿論だが、他ろ弱々しい印象の者達が多い

此処から先はユキナリの推ているのだろう。恐らくは自

いずれにせよ、見た目がこれでは、戦いにならない一方的にユキナリ達が狩

「当然、追ってくるか……」

ユキナリは背後を振り返つ

あの眷属ウルリーケを先頭に、眷属達が追ってくる。中には、まるで忍者の様に通りに面する建物の屋根の上を跳ぶ様にして走っている眷属も居た。外見とは裏腹に彼等の運動能力は超人的だ。

「ユキ、自分で走れる。下ろして」

ダーシャが何度かそう言ったが、今は下ろせない。

せめてもっと距離を取らなければ、あの眷属達に追いつかれする為というのならば、ダーシャに危害は加えられないかもしれないが――イグドゥーラ側にルーマン達が居る以上、ダーシャを人質にとってくる可能性も有る。そうなれば益々ユキナリは窮地に追い込まれてしまう。

「あくそ、面倒くさいな！」

左手でダーシャを抱えたまま、右手のデュランダルを一回転装填桿を操作して初弾を薬室に装填。そのまま適当な方向に威嚇の一発。

当然に命中はしない。威嚇ではなかったとしても、小脇にダーの片手撃ち、標的は移動中となればまず当たりはしない。

しかし――

「滅びよ。『神殺し』」

そんな言葉と共に先頭のウルリーケが跳躍する。巫女装束の様な衣装が風にはためき、彼女は空中で右手の玉串の様な道具を一閃させた。

途端――

「――!?」

ユキナリはつんのめった。

何かに脚をとられた。何に？

「――！」

見ればいつの間にか地面から顔を出していた木の根の様なものが、ユキナリの脚を引っかけていたのである。全力疾走していたユキナリは、当然ながら姿勢を崩さざるを得ない。彼はダーシャを抱えたまま、地面に尻餅をついていた。

そこに――落下しつつウルリーケが玉串らしき道具を振り下ろしてくる。

一見、それは指先ですら折れそうな代物に見えたが――

「ぐっ!?」

崩れ、地面に尻餅をついた体勢ながら、何とか右手を掲げて玉串を〈デュランダル〉の剣身で受ける。その瞬間、鉄槌で叩かれたかの様な衝撃がユキナリの腕を伝ってきた。

重い。小柄な童女の振るう、しかも細い木の枝の様な一本の一撃が、異獣の豪腕が放つ

一撃と同等かそれ以上の衝撃を伴ってくるのだ。

「ユキ……！」

咄嗟にダーシャが〈レッチリ〉を構えて、ウルリーケを銃撃だが、これも――当たらない。いつの間にか四方八方から伸び絡み合い、ウルリーケとユキナリ達の間に防壁を構築していた頭の44マグナムでは、複層の『防壁』を貫く事は出来なかった。

「そんなんありか……！」

根から脚を抜き、再びダーシャを抱えて走り出しながらユキどうやらイグドゥーラとやらは――そしてその眷属達は、このロスあらゆる植物を操れるらしい。どうやってかはよく分からないが、異常な速度で植物を生長させ、時には動かない筈の枝や蔓を動かして、防壁にし、罠にする。

つまり――

（ロストルークに居る限り、そのイグドゥーラとやらの腹の中地の利がどうのという次元の話ですらない。

しかも――

「なんだなんだ？」

「イグドゥーラ様の眷属が――」
「おお、ウルリーケ様じゃ」
「あの男、眷属に追われてるのか？」
「なんぞ罰当たりな事でもしたのかえ？」
「おい、待てお前等！」
街行く人々はウルリーケ達の姿を見ても驚きもしない――どころか彼女等に追われているユキナリとダーシャを見て、どうやら敵意を抱いたらしい。
散発的にだが、街の人々がユキナリ達の前に立ちふさがろうとする動きが見え始めた。
まずい。ただでさえ不利なこの状況で――街の人間全員が敵に回ったら、完全に詰みだ。
「ユキ……この街の人、地神を、慕ってる」
「そうみたいだなー」
何度も何度も、地面を割って出てくる木の根に躓きそうになりながらも、これを飛び越え、踏み越え、更にユキナリは走る。運動能力や耐久力に優れた〈御遣い〉の身体だからこそ保っているが、普通の人間なら、とっくに追いつかれていた事だろう。
（やっぱりフリートラントの地神崇拝とは違うか……）
フリートラントでは、地神に対して畏怖はあっても、親近感というものを感じている人

間は居なかった。当たり前のだから。猫に親近感を覚える鼠は居まい。

それに対し、このロストルークの住人達は——どうやらイグドゥーラという地神に対して親しみすら抱いている様に思える。先の祭祀行列で出会った若者にしても、生け贄を地神に捧げる事について、恐怖や嫌悪の情を全く持っていない様だった。

となるとやはり——

「ユキ……追ってくる眷属が減ってる」

「え……？」

言われて一瞬、背後を振り返ると——確かに最初、十体ばかり居た筈の眷属の姿が、今は三体までに減っている。ウルリーケなる個体は相変わらず先頭を走っているが——

「上手くすれば、撒ける、かも」

「もしかして、眷属って個体ごとの能力に差があるんじゃない？」

「その可能性は、ある……と思う」

いかに地神の端末とはいえ、生け贄に捧げられた人間の肉体をある程度まで残して使っているのならば……当然、肉体構造的な限界は出てくる。腰の曲がった老婆や、あまりに小柄な幼児では、いかに地神の力を分け与えられているといっても、速く走ったり飛び跳

ねたりするのには限界がある。
（今追いかけてきている三体を何とかして撒けば――逃げ延びら
そう判断したユキナリは、右手の〈デュランダル〉を背中に戻
込んであった予備の44マグナム弾を数発分、まとめてつかみ出し、ポケットの中に突っ
「すまん、ダーシャ、下ろすぞ」
「――了解」
一瞬、立ち止まってダーシャを下ろしてから、二人して再び走り始める。
ユキナリは右と左の掌の間に44マグナム弾を挟み込んで――意識を集中した。
構造は単純でいい。中身も流用が利く。
雷管と黒色火薬の詰まった筒の先端に、着火用の爆薬を。その周囲に、マグネシウム粉末と、キャンプなどで着火剤として使われるメタアルデヒドの粉末を混合したものを配置。
撃発装置は銃と同じでいいだろう。手元で作動しない様に、引き金は糸状のものを結びつける形にしておけばいい。
流石に詳しい構造など知らないが、原理的にはこれでいけるはずだ。
ユキナリは物質変換で作り出した大きめの――ジュースの350ml缶を少し縦長にした様な金属円筒が握られていた。

「後は――」

ユキナリは適当に当たりをつけた一際大きな建物に、入り口の扉を蹴破って入る。

「ちょっと御免よ！」

そう言いながら奥に進むが、文句を言ってくる声は無い。

見た目から判断した通り、そこは住居ではなく――倉庫で、中は暗く、幾つもの木箱が積み上げられている。

窓は天井近くに小さな換気用らしきものが一つ二つあるだけ。

丁度良い感じだ。

ユキナリは背後を振り返ると、右手に持っていた金属円筒を――一本繋いでおいた糸を空中に曳きながら、円筒は飛んで…って踏み込んでいたウルリケ達の頭上に達していた。

「ダーシャ、眼をつぶれ！」

叫んで糸を引っ張るユキナリ。

瞬間、即席で生成した閃光弾が炸裂発装置が作動し、次の裂する。

倉庫の中を一瞬、全てを塗り潰す強烈な光が満たした。ま白く潰される程の光量であるともに見ればしばらく視界が暗闇に慣れ始めた眼には尚更にきついだろう。

「――よし」

眼を開けてみれば、ウルリーケ他二体の眷属は、視界を奪われた様子で、その場に立ち尽くしている。少なくともユキナリ達の方に向かって走ってくる様子は無かった。

今のうちだ。ユキナリは手近な壁に走り寄って――これに右手をあてる。

物質変換。

次の瞬間、青白い光と共に壁が砂状となって崩れ――人が一人通り抜けられる程度の穴が空いていた。改めて何かを構成する訳ではなく、ただ単に構造情報を奪うだけなら、こういう芸当も出来るのだ。

「ダーシャ」

「……ん」

再びダーシャを左手で抱え走り出すユキナリ。

とりあえず――振り返っても、追ってくるイグドゥーラの眷属は見えなかった。

●

暫くの人払いを命じて、ジャスティン・チェンバーズは執務室に籠もっていた。

中に居るのは彼と――そして一部では彼の愛人とも噂される女錬金術師のヤロスラーヴァ・ベナークのみである。教皇の座に就く以前からこうして二人きりで部屋に籠もる事が多かった為、下卑た勘繰りをする者が多い。

しかし、もし何らかの機会に恵まれ、不埒にもジャスティンの執務室を覗き見る者が居たならば、先ずその者は拍子抜けするだろう。そしてその後――そこで話し合われる内容を耳にして震撼する筈だった。

「新しい〈御遣い〉の件ですが」

ジャスティンの執務机の正面に置かれた長椅子に腰掛けながら、ヤロスラーヴァは何処か気怠い口調で言った。

「教会内部の意見調整は、どうなっています？」

「難しいですね。やはりあの〈蒼い御遣い〉事件以来、〈御遣い〉を新規製造する事そのものに拒否感を持つ者が多い。また、暴れ出すのではないか――と。以前に製造した〈御遣い〉すら破棄すべき、と言い出す者も出る始末です」

執務机の上の書類に目を通しながらジャスティンは言った。

「怖いのでしょうね」

むしろ愉しげに、ヤロスラーヴァは言った。

「単なる道具だと思っていた人形が、ある日、突然、自分に噛み付いてくるかも、と思うと怖くて怖くて眠れないのでしょうね。全く、可愛らしい事です。あり得ませんが」

事件があまりに教会にとっては大きなものであった為、色々と誤解が生じているというか――事実の前後関係を、間違って認識している者も多い。

あの前教皇を含め、教会上層部の人間六名と、警護にあたっていた聖堂騎士三十名余りを殺した〈蒼い御遣い〉――別称〈蒼鋼の冒涜者〉は、あれだけが特別な代物なのだ。

本来……〈御遣い〉に自我は無い。

錬金術師は、〈御遣い〉を生きた錬金術機関として機能させる上で、霊力操作の中枢として人間の『魂』を――そう呼ばれる何かを使う。

だが、『道具』たる〈御遣い〉に、好き勝手に活動されては困る為、人格を構成すべき部分は〈御遣い〉として目覚める前に削ぎ落としてしまうのが常だ。あの〈蒼鋼の冒涜者〉以前に製造された十二体の〈御遣い〉は全てそうなっていた。

しかし先の教皇の管理下に居た錬金術師の一人――イルジナ・ウルバンは、十三体目の〈御遣い〉の製造を任された際、何を思ったか『魂』に付随していた自我を、削除する事無く残した。イルジナはつまり、工程を一つ省く事で、自我の在る〈御遣い〉を造ってし

まったのである。

彼女はその後、処刑されたが――〈蒼鋼の冒涜者〉が暴れルジナの復讐の為に動いたのではなく、生みの親たるイ以前に製造された自我の無い〈御遣い〉は無作為に暴れていたのだ。後の事である。つまり〈蒼鋼の冒涜者〉が暴れしかし……

「とはいえ、彼等の懸念も皆無と言っても良い。ここでようやくジャスティンは顔を上げてヤロスラーヴァを見つめた。

「十四体目は自我を残すべき――つまり〈蒼鋼の冒涜者〉と同様の〈御遣い〉を造るべきなのだと君は言いましたね」

「はい。全く、その通り」

ヤロスラーヴァは笑顔で頷いた。

「宣教の道具、奇跡を演出する装置、そういうものとしてならば、操り人形で充分でしょう。しかしあの〈蒼鋼の冒涜者〉を暗殺するとなると、既存の〈御遣い〉では、全く役に立ちません。人形は所詮、操る者よりも速くは動けない」

ごく当たり前の理屈を語る様な気安い口調で、ヤロスラーヴァは言った。

「何をするにもいちいち使用者の指示が必要な人形では、〈蒼鋼の冒涜者〉に対して全く……ええもう全く、完全に、勝ち目はありません。単なる物質変換の速度ですら、絶対的に劣ります」

〈蒼鋼の冒涜者〉事件は、教会史上最大の醜聞と言っても過言ではない。

〈御遣い〉が『暴走』して前教皇やその側近を含め、教会関係者四十名弱を殺したなどと、世間にはとても公表出来ない。そんな事が一般信徒に知られれば、彼等の教会への信仰が大きく揺らぐだろう。

勿論、事件が事件だけに、教会内部では知る者も多いが……公式には前教皇らは新規に建築中だった教会施設の視察中、崩落に巻き込まれて死んだ事になっており、事件の詳細は一切、公になっていない。

だからこそ、大々的に討伐隊を組織して〈蒼鋼の冒涜者〉を追う事は出来ない。

殺すなら密かに――つまり暗殺が、望ましい。

勿論、〈蒼鋼の冒涜者〉も不死身という訳ではないから、殺す方法は幾つも有るだろうが――いざ一対一の戦いとなると、人間では恐らく、あの自我を持つ〈御遣い〉に勝つ事は不可能だろう。かといって、同じ能力を持つ〈御遣い〉を派遣しても、操り人形では勝ち目が無い。

求められるのは、〈御遣い〉の能力を持ち、それを自覚的に使いこなせる『個人』ないしはそれに類する小集団だ。醜聞を公にしないという意味でも、関係者が少ないのが好ましいという事になる。

「……教会内部の反対意見は何とかしましょう」

ジャスティンは指先で執務机の天板を叩きながら言った。時間を計るかの様に、あるいは何かを数えるかの様に、コツコツと指先で何かを叩くのは面倒事を考える際の、ジャスティンの癖である。

「で――ヤロスラーヴァ・ベナーク。君にイルジナ・ウルバンは人モノが造れるのかどうか、ですが。イルジナ・ウルバンは人に囲われている錬金術師の中でも一番だったと聞きます」

「勿論、全く問題ありません――と言いたい所ですが」

ヤロスラーヴァは肩を竦めた。

「確かにイルジナ・ウルバンは優秀な錬金術師でした。ウルバン家代々の蓄積もあるでしょうし、人造人間製造に関しては私より上でしょうね。ですが、彼女は大量の資料を残していますから、そこから〈蒼鋼の冒涜者〉に匹敵する〈御遣い〉を造る事は、そう難しい事ではない筈です」

「霊力制御中枢に使う『魂』は？」
「勿論、そちらもアテがあります」
「結構」
ジャスティンは再び視線を机の上の書類に向けながら言った。
「では君はいつでも製造に取りかかれる様、準備しておいてください」
「はい、猊下」
「前教皇の敵討ち、などと特殊勝な事を言う積もりは無いですが再びコツコツと机の天板を指先で叩くジャスティン。
「教会に恨みを持ち、存在自体が教会の醜聞であり、更には強力無比な戦闘能力を持つ個人……そんなものが存在し続けているだけでも、我等にとっては、脅威以外の何物でもない。早々に不安の芽は摘み取るべきです」
「教皇猊下の仰せのままに」
ヤロスラーヴァは、むしろ愉しげに――何処か芝居がかった仕草で片手を挙げると、何かの宣誓をするかの様に応えた。

真っ直ぐ〈スレイプニル〉の所に戻るのは愚策だ。

ユキナリ達があの走行機械に乗ってきた所まで、祭祀行列の参加者達が見ている可能性が在る。それかは分からないが……もしこそ街の住人も動員されていたならば、待ち伏せもしれないが、それには囲まれれば、今度こそ逃げられなを殺さねばならなくなるロストルークの住人と、あのウルリーケをはじめとした眷属達出来ればそれは避けたい。

この期に及んで甘い――と、ユキナリは思っていただが、平和ボケと言われようが何と自身の考えを笑う気持ちも無くを、ユキナリは無くしたくなかった。一度死んで人造人間の肉体に転生した今、ユキナリをユキナリとして自己同一性を保っているのは、その精神――平和な現代日本に生まれたが故の、価値観とそれに支えられた感情であると思うからだ。

「……ユキ」

「静かに――」

唇に人差し指を当ててダーシャを制すると、ユキナリは目に付いた廃屋へと身を滑り込

ませた。木造家屋なのは他の建物と同じだが、あちこち荒れ放題になっていて、手入れが殆どされていないからだ。

此処で少し身を潜め、ウルーケ達をやり過ごす――とりあえずユキナリはそう考えていたのだが。

「どなたですか？」

「――――」

突然、飛んできた誰何の声に、ユキナリは身を強ばらせた。

まずい。廃屋だと思っていたのだが――どうやら人が居る様だ。大声でも出されれば、また眷属達や街の住人が押し寄せてくるだろう。

逃げるか、それともこの家の住人を黙らせるか。

束の間ながらもユキナリが悩んでいると――

「ああ、こんな家だから空き家だと思われたんですね。手入れも出来ずに荒れ放題でお恥ずかしい限りです」

ひどく掠れているが、緊張感を欠いた優しい口調で、住人はそう言ってきた。

ユキナリ達は身構えつつも様子をうかがい、ゆっくりと奥に進む。

すると――そこには声の主が座っていた。いや。身を起こしていた、と言った方が良い

かもしれない。

一人の男が寝台の上に居る。

恐らく、先ほどまで横になっていたのだろう。老人の様な——特に目元から判断するに、未だ若い様だ。その一方で、が目立つ程に細い。病人だ。それも重病で——末期の。一目「済みません。ちょっと厄介なのに追いかけ回されてまして大声を上げられるのでなら、平和的に応対していた方「厄介？」

ユキナリは突然家に踏み込んだ非礼を相手に詫びた。

「ええ、まあ……」

「立ち話も何ですし、どうぞその辺に腰掛けて下さい」

男は怪しむ様子も無くユキナリに座るよう勧めてきてくれた。

「……」

ふと横を見ると、ダーシャがいつの間にか『耳』を頭に取り出して着けていた。

獣の耳によく似たこれは、一種の集音器だ。目の見えない時期が長かった彼女は、時に、音を聴くだけで眼で見るのと同様に——場合によってはそれ以上に正確に、周囲の状況を

把握する事が出来る。これはその能力を補強する為のものだった。

「……」

ダーシャが頷いてきた所を見ると、音を聴く限り、先程の眷属が迫ってくる様子は無いという事らしい。ただ――

「奥。浅い呼吸音が一つ」

ダーシャは顔を寄せてそう囁いてきた。

どうもこの家屋には男の他にも誰かが居るらしい。

「……ではお言葉に甘えて」

ユキナリは木で出来た長椅子に腰掛け、隣にはダーシャが寄り添う様に座った。

「母さん、母さん。お客さんだよ」

男は何故か天井の方を向いてそう言った。

他の建物同様、この家屋も平屋だ。二階がある訳ではない。

という事は――

「どうもお困りのようだから少し休ませて差し上げようと思うんだけど、いいかな」

男の呼びかけに応える声は――無い。

ユキナリ達が黙って様子をうかがっていると、男は照れた様な笑みを浮かべて言った。

「母はもう歳でしてね。私もこの通り、病でそう長くはありませんし。最近では目も見えなくなりまして」

「目、見えない、の……？」

男のその言葉にダーシャが反応したのは――自分も生まれつき目が不自由だったからだろう。淡々とした口調には、ある種の同情、いや、共感の響きが滲んでいた。勿論これもユキナリだからこそ気づけた位に淡いものだったが……

「ああ。もう殆どね」

目の見えないという男もまた、気づいたらしい。

ダーシャと同様、目が見えないからこそ、それを補おうと聴覚が鋭敏になるのかもしれなかった。彼は柔らかい笑みを浮かべたままこう続ける。

「何かと不便だけれど、怖くはないよ。もうすぐイグドゥーラ様の御許に行けるからね」

「……」

ダーシャがはっとした様子で男とユキナリの間で視線を往復させる。

ユキナリは小さく彼女に頷いて見せながら、努めて静かな口調を取り繕った。

「イグドゥーラ様……この街の地神ですね」

「おや、珍しい――余所の方でしたか？」

「はい。その……旅の者で」
「そうですか。それはそれは。仰るとおりイグドゥーラ様はこの土地の地神様ですよ。私達の守り神にして、私達の母なる御方です」
「母……？」
唐突に出てきたその単語――その表現にユキナリは眼を細めた。
「私達はイグドゥーラ様の恵みを乳として育ち、いつかイグドゥーラ様の許に召される……私や母は少々イグドゥーラ様の御許に行くのが早まりそうですが」
それはつまり、生け贄になるという事か。
だが男の口調には、恐怖も逡巡も無い。
やはりイグドゥーラに捧げられるという事は、この街の住人にとって『安楽死』を意味しているのか。しかし……
「地神への贄になることに、恐れは無いんですか？」
ユキナリはそう問うてみた。
「……贄？」
意外な単語を耳にした、といった様子で男は首を傾げた。

「贄……ああ、なるほど。事の様にも思えますが……いた者や、私のように病を様の一部になって生き続け
やはりあのウルリーケと「イグドゥーラ様の内に還（患）って治る見込みの無い者にとっる……ウルリーケ様の様に」
という眷属も、元は生け贄だったのる、ただそれだけの事です」
（一種の胎内回帰……か）
人間には母親の胎内に居た時代（なっ）を懐かしむ気持ちが、何処かにあるという事無く、温かな羊水に包まれ想させる様な、暗くて暖かい。その為に胎内――子宮を連築には、この心理を前提としたものもよく見られる。
これが輪廻転生という考え方と結びついて、死の向こう側に再びの生があるという考え方に――人間は胎内より生まれ出て、いつか胎内に還る、そに循環（じゅんかん）する、という考え方に至るのは、ごく自然な事だろう。
「……ユキ」
ダーシャがユキナリの服の袖（そで）を引っ張ってくる。



「ああ。これは――」

男の笑顔には、嘘偽りの気配が全く感じ取れない。

心底から、この男はそう考えているのだろう。

ユキナリは、イグドゥーラに生け贄を捧げる制度は一種の最初に思った。より大きな悲劇を防ぐ為の小さな犠牲(ぎせい)――自分自身にそう言い聞かせる悲しい欺瞞(まん)。

だがこの街の人間にとってイグドゥーラへ捧げられるという事は、決して『悲劇的出来事』ではないのだ。安楽死ですらない。それどころか未来に希望の持てない弱者にとっては、救済にすらなっている。

「イグドゥーラ……か」

これから何をするにしても、一度、眷属ではなく地神本体と相まみえねばならない――

穏やかに笑う男を前に、ユキナリはそう考えていた。

『姥捨(うばす)て』なのではないかと

第三章　神の帰還

鋼鉄の車輪が、腐葉土を巻き上げながら回転する。

「よしよし――良い子だ」

ユキナリがそう褒めたから、という訳でもなかろうが……素人設計な上に、部品は流用、ろくに耐久性も確認していない試作の走行機械〈スレイプニル〉は、ユキナリとダーシャを乗せて、問題なく走り始めた。

辿るのは山中の隘路――あの祭祀行列が進んでいった道である。

幸い、祭祀行列が往復したせいか、大量の足跡と轍で地面は踏み固められており、〈スレイプニル〉の四輪も問題なく地を噛んでくれた。行き先も足跡と轍を辿れば分かる。

しかし……

「――ユキ」

「分かってる」

ダーシャに注意を促されるまでもなく……ユキナリは気づいていた。

追ってきている。イグドゥーラの眷属達が。

道の左右に生え並ぶ木々の間を、人影が見え隠れしている。その速度に難なく追いついてきていた。勿論、凹凸の多い山道を絞っているものの——それらは〈スレイプニル〉人影は……地面ではなく、枝から枝に飛び移っているのだろう。あるいは蔦や恐らく、枝に飛び移っているのだろう。いずれにせよ、街の中で見た通り、この辺りの植物は、草一本から天を衝くかの様な大樹に至るまで、イグドゥーラの支配下にある様だった。子の様に移動しているのだろう。あるいは蔦や縄の如く使って、振り地の利は、完全に相手側に在る。

あの巨木が並ぶロストルークの街壁にしても、イグドゥーラの支配力で形成されたものなのだろう。あんなものが偶然に出来上がる筈も無いし、かといって人間の力で造り上げるのも無理だ。

「イグドゥーラってのは多分——」

「ユキー！」

ダーシャの声に反応してユキナリは咄嗟に視線を左右に走らせる。

道を両側から塞ぐかの様に、次々と枝が伸びてくる。植物でありながら——本来、動く

構造すら持っていない筈の生き物でありながら、それらは目に見えるナリ達の行く手を阻もうとしていた。

いや。違う。これは――

（もの凄い速度で生長させているのか！）

木々の枝が動物の様に動く事は構造上――出来ない。その為の構造が植物には具わっていない。ごくごく一部の植物――いわゆるオジギソウと呼ばれる品種や、ハエトリソウといった食虫植物等は、確かに動くが、あれは細胞内の水分や物質を放出する事で細胞内の水圧が変化して細胞そのものが収縮しているだけだ。機械的に同じ動作を繰り返すだけで、複雑な動きは到底不可能である。

そもそも植物が自由自在に動く事が可能なら、ウルリーケ達の様な眷属を使う必要など無いだろう。

その代わり、イグドゥーラは猛烈な速度で植物を生長させているのだ。ユキナリ達の行く手を遮れる様な位置と方向を具えた枝を、超高速で生長させている。だからユキナリ達の眼には木々が枝を動かしている様にも見えるのだ。

「なるほどな……！」

自由自在に木々を動かせるというのならば、もっと簡単にユキナリ達を捕まえる事が出

来た筈だ。ぎりぎりですり抜ける様な形とはいえ、〈スレイプニル〉が此処まで走り抜けてくる事が出来たのは、さすがに生長速度が追いついていないからだ。

「……！」

木々の枝を蹴って、眷属の一人が疾走する〈スレイプニル〉これを――迎え撃つ、轟音。

ユキナリが発砲した44マグナム弾は、しかし相手に命中する事無く彼方に飛び去った。

「くっそ……」

撃たなければ、自分達が危ない。いや。ユキナリはともかくしかし未だにユキナリには相手を――女子供や老人の姿をした眷属を射殺する事への躊躇が有った。

老婆の姿をしたユキナリ達の身体に掴み掛かってくる。

咄嗟にこれを〈デュランダル〉で叩き落とすユキナリ。

老婆の眷属は回転しながら腐葉土の地面に落ちて跳ね――しかし次の瞬間、どこからか落ちてきた蔓を掴むと、大きく旋回し、再び木々の枝を蹴って追撃を再開する。

とんでもない運動能力である。

腐葉土の上とはいえ、走る〈スレイプニル〉から落ちてもさして痛痒を感じていないの

も、異様だった。恐らくは地神イグドゥーラの神気を受けて、肉体が強化されているのであろうが……

「殺すしかないのか……？」

次から次へと襲ってくる眷属達。

ユキナリは牽制の銃撃を繰り返したが、〈スレイプニル〉を運転しながらではろくに狙いも定められず、相手にはかすりもしない。眷属達も実際に銃で撃たれて負傷した事が無いせいか、ろくに銃撃を恐れる様子が無かった。

「――！」

一体、何度目の攻撃だろうか――とん、と曲芸じみた動きで、小柄な少女が〈スレイプニル〉のハンドルの上に降り立つ。

その少女は、少し丸顔で、光の加減か、緑の筈の髪が、夜空の様に黒く見えて――

「……」

ユキナリが躊躇したのは一瞬だ。

たまたま姉の初音に少し似ていたというだけの事だ。ユキナリは息を吐いてすぐに逡巡を振り払う。だがその一瞬で、眷属はユキナリの喉を掴んできた。

「ぐっ……!?」

「ユキ……！」

ダーシャが悲鳴じみた声を上げる。

眷属の膂力は尋常ではなかった。咄嗟に〈デュランダル〉を放し、ユキナリの手首を掴んだが、まるでがっちりと接着、いや溶接でもされたかの様に引きはがす事が出来ない。指は深く深くユキナリの首に食い込み、そのまま首そのものを握り潰されるのではないかとすら思った。

ユキナリの意識と視界が紅く濁る。

だが――

「ユキッ!!」

ユキナリの真横で銃声が轟いた。

頬を軽くはたかれた様な衝撃にユキナリは急速に意識が輪郭を取り戻すのを感じる。顔に触れる様な距離で、44マグナムを撃った結果だろう。

大きく身を反らして、ユキナリの首を掴んでいた少女が――眷属が、地面に落下するのが視界の端に見えた。撃たれたのだろう。恐らくは〈レッチリ〉で。

「ダーシャ……！」

「私は、ユキの味方だから……！」

ダーシャが叫ぶ様に言った。
「ユキの、敵は……私の敵には容赦しないという事か。だから、ユキナリを襲う相手には容赦しないという事か。それが、ユキナリ自身が撃つのを躊躇う相手でも。
（くっそ、情けない……！」
中途半端な逡巡を抱えていたせいで、ダーシャに手を汚させた。
勿論、ダーシャは今までにも人間を撃った事は有る。生きる為、罪悪ではないだろう。少なくともユキナリはそう思うし、ダーシャもそう考えている筈だ。
だから、これはダーシャの問題ではない。
自分が嫌だと思う事を、ダーシャにさせた、それが一番の問題だった。
（これじゃ生け贄とか安楽死と同じじゃねえかよ！）
自分にやり辛い事を他人に押しつける。
それは――生け贄の育成を神官達に任せる事や、苦しむ身内の姿を見るのが辛いからと、医者に安楽死を求めるのと同じだ。
「ユキは、〈スレイプニル〉に専念、して」

そう言いながらダーシャは更に〈レッチリ〉で銃撃を繰り返す。

しかし――

「……攻撃が減ってる？」

明らかに眷属達が襲いかかってくる頻度が低下している。

同じ様に木々の枝を伝う様にして追ってはくるが、飛びかかってこないのだ。

「あれは……」

見れば、先程、ダーシャが撃った眷属の少女も、同じ様に何処に命中したのか分からなかったが、死んではいない様だ。

その頭部の『角』が……片方、折れている。

恐らく44マグナム弾はそこに命中したのだろう。ダーシャ自身は眷属の眉間を狙ったのかもしれないが、揺れる〈スレイプニル〉の上で照準がぶれたのだ。

「なるほど、『撃たれれば痛い』って学習した訳か……」

実際に眷属達に痛覚が有るかどうかは疑問だが――互いに撃たれたせいで、銃がどういうものであるのかを、イグドゥーラ側も理解したという事か。

「――！」

ユキナリ達の行く手を遮る様に降り立つ眷属が――一体。

ウルリーケだ。

恐らく何らかの方法で先回りをしたのだろう。ユキナリ達が何処を目指しているかは、少し追いかけていれば見当がつく。

「……」

ウルリーケが手にした玉串を振った。

次の瞬間、四方八方から伸びてきた枝と根が、〈スレイプニル〉に絡みつく。ユキナリは強引にこれを引きちぎって突破しようとしたが――

「――うおっ!?」

〈スレイプニル〉は急生長する枝と根に持ち上げられ、その車輪が空を掻く。これではどれだけ〈スレイプニル〉に馬力が有っても、意味が無かった。

空中で逆さまになる〈スレイプニル〉。

ユキナリとダーシャはそのまま地面へと投げ出されていた。空中で咄嗟にダーシャを抱き寄せてその身で庇うユキナリ。綺麗に脚から着地、とまではいかずとも、彼女を抱えたままユキナリは地面を数メートルばかり転がって――そして止まった。

悠然と立つ、ウルリーケの目の前で。

「……」

ユキナリは地面に片膝をつき、ダーシャを背中に庇いながらウルリーケと相対する。

だが次の瞬間、彼の視線は眷属の童女ではなく――その背後に高く高くそびえるモノに釘付けになった。

「これが――イグドゥーラの本体、か」

これまでの事から、概ね想像は出来ていたのだが……やはり実物を直に目撃すると驚かざるを得ない。

樹齢にして千年を超えるより、山や川といった地形そのものの規模だ。恐らく直径は十メートル以上――山の中腹に広げた枝の幅は左右合わせて五層に遮られて陽光が届かずだというのに、周囲には殆ど木が生えていないのは、枝や葉のらなのだろう。根本付近には背丈の低い陰生植物しか生える事が出来ないかまさに、地に根を張った地神そのものだ。わざわざ生け贄を眷属にして使っているのも当然――イグドゥーラ本体は、この場から動く事が出来ないのだ。

「……ユキ、あれ」

ダーシャが巨木の根元を指さす。

そこには――恐らく異獣なのだろう、一頭の奇怪な姿をしたものが、複雑に絡み合う根によって締め上げられている所だった。

いや。それどころか……

「……」

硬い音と共に異獣の首がおかしな方向に折れ曲がる。

痙攣するその巨体のあちこちに――眼に、鼻に、耳に、周囲から伸びてきた枝や根の先が入り込み、瞬く間に異獣の身体を干涸びさせていった。

こうやって、身の程知らずに挑みかかってくる異獣や亜神を、イグドゥーラは絞め殺し、養分にしているのだろう。

「諦めたか――『神殺し』よ」

ウルリーケが傲然と、地に膝をついたままのユキナリを見下ろして言う。

他の眷属達は遠巻きにして近寄ってこない。やはりウルリーケという名のこの眷属だけは別格なのだろう。そもそも他の眷属達は一言も喋っていないのだ。

人間と意思疎通を試みているのは――人間の言葉を喋るのは、このウルリーケだけだ。

つまりはウルリーケがイグドゥーラの代理人なのだろう。動く構造が無いのと同様、植物には喋る構造も無い。だからこそイグドゥーラと直結した端末、眷属が人間との間の媒

介者として存在しているのだ。

「……」

ユキナリは抱えていたダーシャを降ろし、目配せする。

伝わるかどうかは正直、確信が無かったが――錬金術師イグドラジナ・ウルバンの妹にして弟子たる少女は、すぐにユキナリの意図を悟ってくれた様だ。

もうこの場においては、全力で戦うしかあるまい。

少なくとも、力の出し惜しみをして――生き残れる相手ではない。

「諦める、か。そうだな、ある意味諦めた」

ユキナリは右の拳を開いて、地面に手をつきながら言った。

同時にダーシャはユキナリから横に動いて離れる。

「……」

ちらりとウルリーケはダーシャを一瞥はしたが、彼女一人をもう脅威とも感じていないのか、殊更に何か動こうとする様子は無かった。

「ある意味諦めたとは、如何なる意味か？」

ウルリーケが――イグドラジナ・ウルバンの妹にしてユキナリは深呼吸を一つ。

ーラが問うてくる。

そして――

「互いに無傷で済ませることを……諦めたんだよッ！」

そう叫ぶと同時にユキナリは――『変身』を開始した。

●

フリートラントの街は、概ね平和だった。

ユキナリの留守中に異獣や亜神がやってくるかもという懸念が有ったが、今の所、その様子は無い。一応、異獣や亜神が先ず最初に襲いそうな場所、即ちユキナリの『神殿』には監視をつけてあるので――元々は、地神が生け贄を喰うかどうかを確認する為の物見台が有る――何かが姿を現せばすぐにそれと分かる筈だった。

「ユキナリは今頃、上手くやっているかしらね……」

ふとフィオナは手を止めてそんな事を呟く。

彼女の手元には、何枚かの書類が置かれていた。

紙は貴重品だが、街を治める上で、細かな記録を取るにはこれが最も便利である。羊皮紙は品質が安定しないし、木簡はひたすらに嵩張る。定期的に回ってくる商隊からフィオナはまとめて購入する様にしていた。

「どうでしょう。あのユキナリ様の造られた鋼鉄の馬が、どれだけ速いのか分かりませんけれど……」

実のところ、フィオナの呟きは誰に向けたものでもなかったのだが――部屋の隅に立っていたベルタは律儀にそう応じてきた。

自分の留守中、街長代理として雑務に追われているフィオナキナリはベルタに言い置いて行った。なのでユキナリの巫女として所有物たる事を自認する少女は、甲斐甲斐しくフィオナの側に侍り、何か仕事を言いつけられるのを待っていた。

「でもユキナリ様は『出来るだけ早く戻る』と。あ、御茶のおかわりはいかがですか？」

「いいえ、ありがとう」

苦笑して首を振るフィオナも、街を治める上で何の知識も経験も無いベルタに手助け出来る事など殆ど無い。それこそ御茶を淹れたり、たまに机の上から落ちたものを拾ったり、さもなくばフィオナの肩を揉むか――その程度である。

ユキナリは実際にはベルタを手伝いとして置いていったといった、と見る方が正しいだろう。ユキナリの『神殿』に一人異獣や亜神に襲われる可能性が高い。

「猫の子じゃないんだから」

「はい？　猫ですか？　猫が何か――」

「なんでもないわ、独り言フィオナはそう言って溜息をつく。

「あの……フィオナ様？」

ふと何かに気づいた様子でベルタが声を掛けてきた。

「ひょっとして、その……」

だがすぐに躊躇する様に続けるべき言葉を言いよどむ。

「あの……もしかして……あ、すみません、なんでもないです」

「途中で止めないで。気になるでしょ」

顔をしかめてそう言うフィオナに、ベルタはおそるおそる、

「ユキナリ様がいらっしゃらなくて……寂しいのかなって……」

「は？　なんでそう思うの」

「御手を止められる度に、ユキナリ様の御名前を口になさいますから……」

「……」

眉を顰めてフィオナは黙り込む。

「フィオナ様は――ユキナリ様を慕われておいでですよね？」

「あれは彼をからかってるだけよ。面白いからしてるだけ。ある癖に、中身はその辺の男の子と変わらないから……本人は結構、突っ張った物言いしてるけれど」

だから普段から弄って遊んでいるだけで、別に、異性として本気で想いを寄せている訳ではない。前にユキナリに少しからかわれたというか――『育ちが良くてお嬢様然とした振る舞いの女を組み敷いてひいひい言わせるのが良い』などと言われたものだから、その仕返しをしているだけだ。

正直――ユキナリは色々な意味で突出しすぎていて、フィオナにしてみれば今の所、恋愛感情の対象になっていない。彼の事を好ましくは思っているし、彼がフィオナの身体を本気で求めてくるのならば、応じるのもやぶさかではないが……それは街長代行としての責任を果たす為、といった意味合いが大きい。

「ユキナリ様は神様みたいな力持ってますし、ではなく神様ですし」

とベルタは首を傾げてきた。

「いや、そういう話じゃなくて――っていうか、ベルタ？　私はユキナリを慕ってる訳でしょ」

「はい、勿論」

とベルタは照れた様子も無くそう言った。

「もう巫女役とかは無理にしなくて良いって言ったのに、ずっとユキナリは貴女を、その、抱いたりして……というか、結局、ユキナリと同じ屋根の下で寝起きする様になってそれなりのなんだかんだで、ベルタがユキナリと同じ屋根の下で寝起きする様になってそれなりの日数が経過している訳だが――フィオナから見ている限り、ユキナリがベルタに手を出した様子は無い。それをするかの様に――

「いえ、未だなのです。私は何も出来ませんから、せめて――

と眼を伏せて悲しそうにベルタは言った。

「まあ、そりゃね……」

ベルタは生け贄として育てられてきた孤児だ。

普通の娘ならば、将来役に立つからと両親から教えられるべのしか知らない。孤児院で妹分の面倒を見てきたせいか、小さな子供の相手は得意の様だ

が、そんな技能はユキナリの側に仕える上では、殆ど役には立つまい。
勿論、他の特殊な職能が身についている訳でもない。
巫女は、ただ、その身を神に差し出す事でのみ、その存在を全うするからだ。
だからこそベルタとしては、自分の身を差し出す事にこだわっているのだろう。ユキナリが地神の様に人間を喰う怪物でない以上、他に出来る事と言えば、本当に女として彼に奉仕する事位であろうし。
「ダーシャ様が……その……いつも」
躊躇いがちにベルタはそう言った。
ダーシャが邪魔をするか、あるいはユキナリがダーシャの眼を気にして遠慮するか、まあそういった所だろう。フィオナの眼から見てもダーシャは明らかにユキナリに懸想しているが、ユキナリの方は何やら彼女を妹の如く思っているらしく……今一つ、噛み合っていない様に見える。
「ユキナリは、その、ダーシャと二人っきりな訳よね……」
考えてみれば、フリートラントに来る前までも二人っきりの旅だった筈だ。
以前からずっと相思相愛だというのならば、そもそもベルタがユキナリの側につきっきりになっていだろう。どうもフリートラントに来てからベルタがユキナリの

るせいか……ベルタがその自
ている感が有った。
良くも悪くも、他人の感情
だが——自分のものは端で見ていてよく分かるものだ
「休憩終わり。やっぱり御茶頂戴」
首を振ってからベルタにそう頼むフィオナ。
その時——
「……？」
ふとフィオナは眉を顰めた。
何か叫び声の様なものが聞こえたらしく、怪訝の表情に火を付けてしまっ
ベルタの方を見ると、彼女にも聞こえなかったりもする。
っている。フィオナは執務机から離れると、鎧戸を開いたまま
外を眺めてみるが、街の風景に変化は無い。
火事が起きたか、さもなくば馬車が子供を轢いたりしたのかとも思ったのだが——
「ベルタ。今の……何？」
「悲鳴の様に聞こえて——」

ベルタの言葉が終わるのも待たず、もう一度――今度はっきりと悲鳴が届く。
何事かと窓から身を乗り出したフィオナの周囲が、ふと陰った。
「――!?」
降り注ぐ陽光を遮る巨大な何か。
それは次の瞬間にはフィオナの頭上を通り過ぎて、空の彼方で大きく旋回していた。
四枚の翼を持つ空飛ぶ異形。
それは――
「あの時の――」
「……亜神ッ！」
それは先日、ユキナリが討ち漏らした――怪鳥の亜神であった。

●

ユキナリの全身を青白い光が包み込む。
それは奇跡の光であり、彼自身が奇跡そのものだという事を示す証だ。
「――何事か？」

さすがにウルリーケも――恐らくはその背後に居るイグドゥーラも驚いた事だろう。
自然の産みし神に挑むは、人の造りし神。
「奇ッ怪な……！」
ウルリーケがそう叫ぶと同時に、玉串を振りかざしてユキナリに向けて突撃する。
彼の『変身』は未だ完了していなかった。詳細を理解してその行動ではないのだろうが、ウルリーケの判断は客観的に見て間違っていない。
しかし――
「させない」
呟きと同時に銃声が挑んだ。
「――っ!?」
瞬間、大きく仰け反るウルリーケ。
だが更に次の瞬間、彼女は発条仕掛けの様に勢いよく前のめりに戻っていた。
「邪魔をするか、娘！」
そう叫ぶウルリーケの顔に流血は無い。
しかしその姿勢がわずかに崩れ、足下がふらついているのが見えた。
ダーシャの放った銃撃は正確にウルリーケの頭部を狙っていた。正しくはその側頭部に

生えている『角』を。先に眷属の一体を攻撃した際、偶然に銃弾が命中した箇所であるが、その際に眷属が白目を剥いてのけぞるのを、ダーシャは目撃していたのだ。

恐らくあの『角』は、眷属の急所だ。

あるいは、あの守護聖人像を宣教騎士達が音叉で制御していたのと同様に、眷属達はあの『角』を介してイグドゥーラと繋がっているのかもしれない。それ故に『角』を傷つけられれば動きが止まる。

「……む」

玉串を振るウルリーケ。ふらつく彼女の代わりに周囲から大量の木の枝がユキナリやダーシャに向けて伸び、蔓や蔦が何本も投げ縄の様に飛んでくるが――それらは、地を這う様に銃撃するダーシャ。

これに対し――

「ユキの邪魔は、させない」

畳み掛ける様に銃弾がかかるが――それらは、地を割って盛り上がった木の根

五発の銃弾がウルリーケに襲いかかるが――それらは、地を割って盛り上がった木の根が壁となって防いでいた。大口径のマグナム弾とはいえ、やはり拳銃弾……貫通力はそう高くない。

「――!」

同時に、ダーシャの右手に、蔓の一本が巻き付いていた。
銃を持つ手の自由を失い、姿勢を崩す彼女に、それまで遠巻きにしていた他の眷属達が駆け寄ってくる。眷属達の手が四方八方から伸びて――
「――触るな」
そんな言葉と同時に、眷属達が一斉に吹っ飛んでいた。
「――!?」
ウルリーケが改めて身構える。
ダーシャの脇に立っていたのは……蒼黒い異形の騎士だった。
黒い下地の上に配された深い蒼の装甲。虚仮威しの装飾性は無い。
りそのままなぞる輪郭は、むしろ『そういう風に生まれた生き物』の様にすら見える。
だがその騎士の最大の特徴は、その四肢にも胴体にも頭部にも歪むのが見えた。
背中に備わる黒水晶の翼。相当な熱を帯びているのか、呼吸するかの様にゆっくりと開かれ、折りたたまれる際に、わずかながら周囲の風景が陽炎の様に歪むのが見えた。
〈蒼鋼の冒涜者〉。
かつて教会の総本山とも言うべき王都にて、教皇と宣教騎士団の団長、その他教会の重要人物を多数殺害し、逃亡したとされる〈蒼い御遣い〉。その身に備わる力の全てを出し

切るための、これはいわば正装であった。
「――ダーシャに触るな」
〈蒼鋼の冒涜者〉は――『神殺し』の青年は低い声でそう言った。
「ダーシャを傷つけるな。ダーシャを苦しめるな。他の何を許しても相手が神であろうとな」
ユキナリは両の掌をまるで拝む様に合わせる。
青白い光が迸り、次の瞬間――ユキナリは己の腕の中から、と左手にそれぞれ一挺ずつの〈デュランダル〉を生み出していた。
「傲慢なり『神殺し』」
ウルリーケがゆっくりと後ずさりながら言った。
「許すも許さぬもなし。その矮躯で如何にして我を殺める積もりか」
「試してみるか？」
ウルリーケを追う様に前に踏み出すユキナリ。
そして――
「――!?」
彼を四方八方から大量の『弾丸』が襲ったのは次の瞬間だった。

人々の頭上を、巨大な影が過る。
巨体が大気を抉る程の速度で旋回し、四枚の翼が巻き起こす風が砂塵を舞い上げる。怪鳥型の亜神は逃げ惑う人々をその凶気に満ちた双眸で見下ろしながら、威嚇するかの様に甲高い声を放っていた。
「何処ダ……何処ダ……何処ニイル、アノ男！　我ガ喰ラウベキ、アノ男！」
亜神の狙いがユキナリである事は明らかだった。
だが――ユキナリはロストルークに出掛けていて、未だ戻っていない。
「建物の中に入って！　絶対に外に出ては駄目！」
街中に飛び出したフィオナは、声の限りに叫びながら通りを走った。
地神たるユキナリが居ない今、街の住民を守るのは街長代理である自分の役目だ。
「……とは言ってもね」
フィオナは屋敷を飛び出す時に持ち出したその武器を――右手に握っているそれの重さを感じながら呟く。

〈デュランダル〉である。ユキナリが造り、おいていった神殺しの武器。確かにユキナリはフリートラントの地神をこの武器で斃(たお)している。その際には〈御遣い〉としての力は使っていない。

しかし――

「武器だけ在ってもどうしようもないのよね」

正直な所、お守り代わりに持ち出した程度のものだった。一わっているし、弾も装填(そうてん)されているが、自分に使いこなせると応、ユキナリに使い方は教は思っていなかった。

「フィオナ様――」

走るフィオナの後ろを、やはり〈デュランダル〉を抱えてベルタが走ってくる。

「ベルタ、貴女は建物の中に入っていなさい！」

「で、ですが――」

「いいから！」

そう叫んで更にフィオナは走る。

今は未だ亜神はユキナリを捜す事に固執している為、街の住人を個別に襲う様な真似(まね)はしていない。だがそもそも亜神は人間を喰えば喰うだけ力を増す。その事をあの亜神が思い出して人々を襲い始めたら、もう打つ手が無い。

それまでに、人々を出来るだけ建物の中に避難させるべきだった。

「何処ニイル……!?」

ふと、怪鳥の亜神の動きが変わる。

「……!」

ユキナリが現れない事に業を煮やしたか——怪鳥の亜神は急に高度を下げ始めた。

人を喰う気になったらしい。

だがフィオナが呼びかけた甲斐あって、殆どの住人は建物の中に避難している。亜神がその気になれば壁なり天井なりを壊して入り込む事も出来るだろうが——それには多少時間が掛かる筈だ。その間に何か策を考えねばならない。

「ベルター　何処かの建物に入ってー」

叫びながらフィオナは〈デュランダル〉を発砲した。

轟音が迸り、反動がフィオナの手の中で跳ね回る。勿論、弾丸は亜神に命中はしなかったが、亜神の動きが変わった。

建物に爪を立て、壁を抉りながら——強引に方向転換。

亜神は地に降り立ち、フィオナの方を振り返っていた。

「ソコニイタカッ!」

「……え？」

「貴様ニ負ワサレタ傷ミ、コノ苦シミ、貴様ニ返シテヤロウゾー！」

どうやら亜神は〈デュランダル〉の銃声を聞いて、フィオナをユキナリと勘違いしたらしかった。男女の別は勿論、顔も身長も全く違うのだが……例えば人間が鳥の雄雌や個体差を見分け辛い様に、亜神も人間の個人差など元々よく分かっていないのかもしれない。

「……！」

フィオナは身が竦むのを感じた。

先程までは亜神とは距離が有り、しかも相手は、フィオナ個人を意識などしていなかった。だから、未だ恐怖を抑え込んで走り回る事が出来たのだ。

だが今……亜神はフィオナを喰らうべき相手と認識した。それ故の凶気が真っ直ぐに噴き付けてくる。辛うじて気づかないふりが出来ていた恐怖が、今更の様に胸の奥から這い出してきてフィオナの身体を縛り付けようとしていた。

喰われる。嫌だ。

生き物には具わっていて当然の——原初的な恐怖。

「我ニ、喰ワレヨッ！」

地を蹴ってフィオナに飛びかかる亜神。

建物の中に――と意識だけが空回りするが、身体が動かない。
巨大な嘴がフィオナを丸呑みしようとするかの様に開かれて――
「フィオナ様ッ！」
「おおおお

「ランズダウン!?　なんであんたが――」
「――何をぼうっとしているのだ！」
痛い痛いと訴えるのを止めて飛び起きながら、アーロンはフィオナに怒鳴り返してきた。
「本当に、どうしようもなく愚鈍な奴だな、お前は！」
「だ、誰が愚鈍――っていうか、どうしてあんたが武器持ってるの!?」
ハリス真教会の宣教騎士達は武装解除され、武器はまとめて倉庫に保管しておいた筈だ。
「これはアーノルドの奴が倉庫破りを――いや、今はそんな事はどうでもいい！」
アーロンはフィオナの手を掴んで引っ張る。
「建物の中に逃げ込めと叫んで回っておいて、自分が逃げ遅れるとは愚かの極みー」
「よ、余計なお世話――」
「――早く建物の中に入れ、邪魔だ！」
そんな声が更にアーロン以外からも飛んでくる。
見れば三人ばかり――甲冑こそ無いものの、剣や槍を手にした宣教騎士達が、巨大な亜神を相手に立ち回りを演じていた。叫んできたのはその中の一人だろう。
亜神は巨大だ。
だからこそ大通りとはいっても、左右を建物に塞がれたこの場では、どうしても動きが

制限されてくる。圧倒的なその巨体故、宣教騎士達よりも亜神は間合いが大きく、剣も槍も牽制以上の役には立っていなかったが――単に時間稼ぎであれば、それで充分だった。

「フィオナ様！」

既に、近くの建物の軒先へと避難していたベルタが、フィオナを呼ぶ。

未だ身体の強張りが取れないアーロンはベルタの所に向かった。

「でも本当に、どうして？」

「どうして？　どうしてとは何が？」

「いや、だから――どうして私を、助けてくれたの？」

フィオナにはそれが不思議だった。

「訳の分からん事を言う女だな、お前は！」

アーロンは心底、フィオナの問いの意味が分からない様だった。

「我等は宣教騎士団の騎士だぞ？　悪魔共を艶し、辺境の蒙昧な連中を尊い教えに帰依させる為の、神聖なる騎士だ。悪魔を前にすれば戦うし、田舎者共といえども、将来、教会の教えに帰依する可能性が少しでも在るならば、その者を守るのが当然であろう。死んでしまっては教会に帰依できんからな！」



「……あんたは」

言っている事は傲岸不遜きわまりなく、どうしようもない位に身勝手で、確かにこれは、フィオナのよく知るアーロン・ランズダウンである訳だが――

「あの〈蒼い御遣い〉ならばともかく、元より辺境の悪魔共を一掃するのが任務の我等、いちいち醜いだけの化け物相手に、臆する必要無し！」

同時に――王都の学院を卒業後、宣教騎士団への誘いを蹴ってフリートラントに戻ってきた彼女の知らない、『騎士』としてのアーロン・ランズダウンが、そこには居た。

咄嗟にダーシャを自分の身体の下に庇うのが精一杯だった。

身に帯びた装甲を四方八方からの『弾丸』が叩く。貫通力はそれ程でもない様だったが、雨の様に浴びせられるそれは、ユキナリをその場に釘付けにしていた。

「なんだ……!?」

ダーシャを抱えて伏せている為に、状況がよく把握出来ない。

ただそれがイグドゥーラからの攻撃である事だけは間違いなかった。

（銃撃？　散弾？　一体地神がどうやって――）

ユキナリが持ち込むまで、この世界に銃器の概念は無かった。

少なくとも、辺境に比べると文明文化が進んでいた王都でさえ、実用に耐え得る様な火砲の類は存在していなかった。あるいは概念位は誰かが思いついていたかもしれないが、ユキナリが知る限り、実際に使われる飛び道具と言えば投擲するものか、火炎放射器、精々が弓矢程度のものだ。

それともこの辺境の地で銃という革命的な武器を発想し得た天才が、居たのか。

しかし――

（銃声がしない？）

激しく弾ける音はするものの、火薬のそれ程には大きくない。

では一体どうやって射出をしているのか？

圧搾空気か。発条か。あるいは――

「くっ……」

立て続けに加えられる衝撃に、意識が揺れる。

相手の『火力』がどれだけ続くのか分からないが、このままでは埒があかない。先にユキナリの意識が朦朧としてダーシャを庇いきれなくなる可能性すら有った。

「ダーシャ」
「――ユキ」
「『盾』を作る。ダーシャはその下に隠れていてくれ」
「……分かった」
ダーシャの了承を確認するとユキナリは物質変換を開始。
この装甲騎士状態のユキナリは、手に限らず全身何処が触れようとも物質変換が可能である。肘や膝から真下の土を分解し、ユキナリはダーシャの上にかぶせる様な半球状の『盾』を形成する。
「――よし」
クロームモリブデン鋼の『盾』が形成されたのを確認するとユキナリは横に転がって――先に伏せる際に投げ出していた〈デュランダル〉を手に取り、更に横方向に跳躍。
跳ねる様にして身を起こし、相手が銃器の類でこちらを狙っているのだとすれば、ユキナリの唐突な動きに対応しきれない――そう読んでの動きだったのだが。
「――!?」
そこで初めてユキナリは自分達を襲う『弾丸』の正体を知った。

「これは……種か!?」

そう。それは猛烈な勢いで射出される――種子だった。

ユキナリ達を囲む様に、巨大な――遠近感が狂っているのかと思える程に巨大な花が次々と咲いては、花弁を散らし、実を膨らませ、そこから種子がはじけ飛んでくるのだ。

「ホウセンカかよ！」

植物の中には自ら弾けて種子を遠くに飛ばし、ばらまく種類がある。

ホウセンカが代表的だが、他にも数種が確認されており――実が熟すと果皮の内外の細胞の膨圧の差によって力を蓄積し、ちょっとした刺激で種を飛ばすのだ。

いわば天然の――指向性地雷（クレイモア）。

勿論、ホウセンカの種には、種も遙かに大きい上、弾け飛ぶ力が強い。ユキナリの装甲を貫く程ではないとしても、生身の人間が食らえば何十何百という拳で一斉に殴られている様なものだろう。数秒で全身の骨を砕かれて死ぬ。

「こんの……！」

ユキナリは種をばらまく『地雷植物』に駆け寄って、次々とこれを斬り倒していく。

相手は結局、狙って種をばらまいている訳ではない上、弾けて種子をばらまくのは一度

限りの使い捨て――ユキナリの動きに対応しきれない。

しかし……

「足掻きは無駄と知るが良い」

ウルリーケが玉串を振って速度で生長する『地雷植物』は、今度こそユキナリをその無数の種子で殴り潰さんと、十重二十重に彼を取り囲む。

次の瞬間、ユキナリは足下から盛り上がってきた植物の根に脚をとられて動きを封じ込められていた。更に猛烈なこの地の訪れるモノは多かれど、我を喰らう事、果たしたモノは未だおらず。無論『神殺し』も例外にあらず。死して腐りて我が滋養になるがよい」

勝ち誇るでもなく、厳かとも言える口調でウルリーケが言う。

イグドゥーラはそうやって何百年もこの地に君臨してきたのだろう。先にも見た通り、異獣などはこのイグドゥーラの本体までたどり着けても、その巨大さを前にどうにも出来ず、むしろ捕らえられ殺されて養分にされるしかないのだ。

「……ぐ」

先にもまして苛烈な『弾幕』が、ユキナリを押し包む。

物質変換の力を用いて片端から撃ち込まれる種を分解していくものの、衝撃の大半は

装甲を介してユキナリの身体に届く。全身を殴り続けられる苦むのを彼は感じていた。

「――ユキ！」

悲痛なダーシャの叫びと同時に、轟く銃声。

『盾』の下から〈レッチリ〉の銃身を突きだしての銃撃である。を用いた精密射撃は、ウルリーケを狙ったものだった。勿論、彼女はイグドゥーラの眷属――つまりは端末に過ぎないが、この『地雷植物』の照準をつけているのは、恐らくウルリーケだ。斃せば一時的とはいえ、攻撃が止むかもしれない――ダーシャはそう考えたのだろう。

実際、『地雷植物』の連打は止まった。

しかし……

「……足掻きは無駄と言うた筈」

銃弾は、壁の様に地面から盛り上がった木の根に防がれていた。いつの間にか……ウルリーケの左右に他の眷属が立っている。『死角』などという概念はウルリーケだけではないのだ。恐らく植物たるイグドゥーラには何十という眼を用いて状況を俯瞰出来る。当てはまるまい。必要ならイグドゥーラは

イグドゥーラに油断は無い。
植物は油断したりしない。
故に――
「『神殺し』よ。銀の髪の娘よ。足掻かねば苦痛は無い」
「――だから大人しく神罰食らって死になさいってか」
ユキナリは身を起こしながら言った。
「たかが雑草の親玉が慈悲深いこったな。だが……」
「……」
ふとウルリーケが首を傾げる。
あるいはウルリーケは――イグドゥーラは、気づいたのかもしれない。
ユキナリの伏せていた地面が――その色が変わっている事に。広範囲に、彼を中心として十メートル余り。そこに有ったのは黒い腐葉土であったが――暗色は変わらず、しかしその濃度が均等なものに変化していた。
「火薬って知ってるか？」
「……なに？」
「正直、こんだけ大量に合成したのは初めてだがな。幸い、『材料』は次から次へとお前

が浴びせかけてくれてたからな」

ニトログリセリン、ニトロセルロース、それにニトログアニジン。

浴びせかけられる種子の雨を分解して得られた情報量を消費して、ユキナリはこれらを延々合成し続けたのである。

自分の真下の地面を物質変換して。

見た目は直径十メートルの範囲だが、作り出された無煙火薬の層は、真下に向かっても十メートルばかり延びている。いわばイグドゥーラの生えるこの山に、巨大な爆弾を埋めた様なものである。

「分かるか？」

ユキナリは一発取り出した44マグナム弾をウルリーケの足下に放った。

「理屈はそれと同じだ。ただし規模は数万、いや数億倍かもしれないが。でっかい音が出て、衝撃が出て、火が出る。さて、それでこの山はどうなると思う？山火事になれば細かい事は関係ないよな？」

ユキナリは〈デュランダル〉を足下に向けて言った。

「……」

ウルリーケが足下の44マグナム弾を凝視する。

何処までイグドゥーラが火薬や爆発というものについて理解出来るかは、分からなかったが……とりあえず、ユキナリがイグドゥーラの命運を握ってかってくれれば、それで良い。

先ほどまでと打って変わって――重苦しい沈黙が辺りに満ちているのだ、という事さえ分やがて……

「……何故に、火をつけぬのか、『神殺し』よ」

ふと、沈黙に厭いたかの様に、ウルリーケが問うてくる。

「何故だと思う？」

ユキナリはそう問い返す。

ウルリーケはまたしばらくの沈黙を置いて――

「汝は一体、何者か」

そう問うてきた。

「人ではない。さりとて神でもなし。一体、汝は――何物か」

「あの神官達の戯言を真に受けて、散々『神殺し』だなんだと更『何物か』もねえだろ――この唐変木」

毒づきながらも、ユキナリは内心で溜息をついていた。

どうやらイグドゥーラは、話し合いをする気になってくれたようだった。

「俺は確かにフリートラントの地神を殺したけどな。それは成り行き、というより、俺自身が生け贄と間違えて喰われそうだったからだ」

ユキナリはイグドゥーラの根元で、既に干涸びている異獣を一瞥して言った。

「成り行き……」

「別に俺は地神を殺して回るのが趣味でもなけりゃ、仕事でもねえんだよ。フリートラントの神官に何をどう吹き込まれたのか知らないが……俺はあんたを殺しにきたんじゃない。単にロストルークの街と、フリートラントの街で、交易したいと思ったから来てみただけだ。俺が地神を殺してしまったせいで、フリートラントは土地の恵みを受けにくくなってる。だから豊かなロストルークの街にも、敵対の意図は無いって思ったんだよ」

「……では我にも、ロストルークと眼を細めた。

「そうだよ」

ユキナリは言ってから――ふあんたは俺が殺したフリートラントの地神と随分印象が違う気がする。最初にロストルークに来た時に、生け贄をあんたの所に捧げる祭祀行列を見たから、こいつも人間を喰らう化け物かとも思ったが……」

「我が人喰いである事に違いは無い。我は捧げられた民を、我が一部と化している」

ウルリーケは平然とそう言ってくる。

やはりこの辺りは元が――イグドゥーラが植物だからか、微妙に人間の思考とは、ずれを生じている様な印象があった。同じ言葉を使っている筈なのに、今ひとつ、噛み合っていない感が有る。

「そうだな。だからややこしいんだが……」

ユキナリは街で出会った病身の男を思い出しながら続けた。

「ロストルークの街の人間を見てると、あんたに捧げられる事を、嫌がってない。むしろ幸福な事だと考えてる。しかも生け贄になるのは、死を間際に控えた老人とか重病人とかだ。彼等にとって、あんたに捧げられるのは『救い』なんだろう。この辺りもフリートラントとは事情が違うみたいだ」

「……」

ウルリーケは無言。

「というか、そもそもの話だけどな。あんたは自分から人間の生け贄を求めてるのか？　それとも単に人間が運んでくる死期の近い者達を引き受けてるだけなのか？　あんたはどういう経緯で地神になった？」

「……」

ウルリーケは更にしばらく、何事かを考える様子で沈黙を守っていたが――

「我の始まりは、このウルリーケと共に在った」

ウルリーケは――彼女の背後に繋がっている地神イグドゥーラは、訥々と語り始めた。

●

地神というものは即ち、その地を治める神だ。

土地と霊的な結合を果たして一定範囲に影響を与える。この能力故に人間は地神を豊穣をもたらす存在として崇めてきた。そして人間に近い知性を持った地神は、この人間の崇敬に応える事が出来た。

だが――そもそも地神とは、如何にして誕生するのか。

基本的に地神とは、高い霊格を持ちそれに支えられた知性を具える。これが他の生き物と異なる、地神の地神たる所以である訳だが……高い霊格と知性を得る為に、最も簡単なのは、それを元々具えている生き物から補給する事だ。

即ち『人喰い』である。

生きたままの人間を喰らい、その血肉ごと、霊力を、知力を、それらを統べる根源たる魂を取り込む事が、最も簡単なのだ。それ故に、亜神や異獣は、生存の為の糧というよりも『嗜好』として人間を喰いたがる。

より賢く、より強く、なる為に。

しかし……地神が永く土地と結合していると、老いて衰える事が無くなる反面、その霊力や知力は土地全体に拡散して消耗していく。生き物というよりも山や川といった土地そのものに同化して吸収されていくのだ。別の言い方をすれば、その土地全体を自らの身体とした結果、地神の意識が、巨大すぎる自分を持て余し始める。

自我の消失を防ぐ為に、地神は霊力や知力の補給が必要となる。

それを人間達との契約によって制度化したものが、生け贄の儀式だ。

だが時に、地神は人間以外からも霊力や知力の補給をする事が出来る。

例えば――地神の地位を狙い、自分に挑んできた亜神や異獣から、『人喰い』ならぬ『神喰い』を行う事によって。

そして……

「我はウルリーケと一体となる事により知性と霊格を得た。無論ウルリーケと完全に一つになるには長い歳月を要したが」

たまたま事故で少女を滋養として吸収する――つまりは贄となる事になった小さな新芽は、永い永い歳月を掛けて、大樹となり、自我を獲得した。

しかも近くに在ったロストルークの街では、養いきれなくなった老人や、重病で先の無い者を、山に捨てる――いわゆる『姥捨て』の風習があり、死に瀕した彼等を取り込む事で、名も無き大樹は、急速に神性を獲得していったのだ。

やがて知性持つ大樹は、ロストルークの住人達もその存在を知る事となり、彼等に乞われて地神となった。元より大樹……地に根を張り、大きく広げた自らの枝の下に、他の生き物を庇う事に、異論など無かった。

こうして……名も無き植物は、イグドゥーラの名を与えられて、ロストルークを守る神となった。

前述の通り、地神は、その神性を知る事により、自我を失う。

それまでは霊力や知力を拡散させて物であるイグドゥーラは、ロストルークの『姥捨て』を受け入れた。そもそも植んでいるが……『姥捨て』に対して拒否感や嫌悪感を覚える事は無かったからだ。

いや。そもそもウルリーケや眷属の脳と繋がる事によって人間の知識を取り込んでいるイグドゥーラは、ウルリーケを介して喋るイグドゥーラの人格は、生け贄達のそれが寄り集まって出来たものである。

生け贄の儀式とはつまり、イグド

わるという事であり、イグドゥーラ自身がその事に拒否感や嫌悪感など覚える筈がない。

「……概ね理解した」

片手を挙げてユキナリは言った。

やはり――ロストルームの地神と生け贄の制度はフリートラントのそれとは根本的に違う。如何に先が短かろうと、助かる見込みが無かろうと、生きている者を捧げる以上ユキナリにはそれを全面肯定する事は出来ないが……少なくとも相容れない敵、滅ぼさねばならない悪、という訳ではあるまい。

「改めて聞くが――」

既にユキナリは装甲を解いて、普段の姿に戻っている。

話をする上で、自ら武装解除をして見せる事が、相手の警戒心を緩めると感じたからだ。

しかし……

「今でもあんたは俺を『敵』だと思っているか？」

ダーシャが未だ〈レッチリ〉の撃鉄を起こしたままなのを横目で一瞥してからユキナリはそう問うた。相手は地神で――しかも植物だ。人間の理屈が何処まで通用するかも分からない。早合点して警戒を解くのは愚策だろう。

ユキナリも〈デュランダル〉の引き金には指を掛けたままだ。

もっとも大量の火薬が足下に詰まっているこの状態で、迂闊な発砲は自殺行為だ。その辺りの事はダーシャも恐らくは分かっているだろう。発砲すると即座に引火するという訳ではあるまいが、撃つとなれば慎重を期する必要がある。

「……汝は」

ふとウルリーケが何かを思い出すかの様に足下に視線を注ぎながら言った。

「自ら傷を負うのを顧みず、我に攻撃を返すよりもまず、そこの娘を庇った」

「……」

ダーシャが眼鏡の奥で眼を瞬かせる。

急にウルリーケが自分の事に言及したので驚いているのだろう。

「また我が産子たるものたちの『幸せ』や『救い』を口にした。また我等をまとめて焼き払う事が出来ると言いつも、それをせず、まず対話を求めた。自らの為『神殺し』のみに邁進する亜神や異獣とは、その操る言葉も、行いも、いささか異なる」

「……かもな」

「汝が我が敵でないと、これは謝罪の要有りと思われるが、如何か」

「……ああ、まあ、そうなんだろうけど」

認めるにやぶさかでなし。人間の儀礼に精通する訳ではないが、

ユキナリは溜息をついた。
相手は神なのだ。しかも大樹の化身である。
普通の喋り方を求めるべきでないのは分かるのだが、こうも迂遠だと気持ちが読めないというか、本当に安心して良いのかどうかすら怪しいと感じてしまう。
「そういう時は、一言、『ごめん』でいいと思うぜ」
「……『ごめん』」
初めて耳にする異国の言葉を舌の上に乗せて吟味するかの様にウルリーケが呟く。
「『ごめん』……懐かしい言葉」
「……え？」
「ウルリーケの記憶にある。『ごめん』……そう『ごめんなさい』」
しばし、ぶつぶつと何事か呟いていたが……
「……」
ふとイグドゥーラの旧き眷属は顔を上げた。
「ごめんなさい、じゃな」
そう言ってウルリーケが、笑う。
朗らかに、まるで、外見相応の童女の様に。

「……!?」

いきなり人格が変わったかの様な変化に、ユキナリは驚くしかない。

だが……

「そう、ごめんなさい、じゃ。ごめんなさい」

何やら言葉を覚えたてでうれしがっている幼児の様に、そう唖然とするユキナリと、そしてダーシャを前に、天真爛漫と言った様子の笑みを浮かべて更にウルリーケは言った。

「汝とはウルリーケに寄せて、これからはこれでゆくと話した方が通りが良い気がする故、これでダーシャを前に、天真爛漫と言った様子の笑みを浮かべしよう。異論は無いな？」

前述の通り、イグドゥーラの意識は生け贄に捧げられた者達の集合知性なのだろう。普段はそれらを平均した形で安定している訳だが、必要とあれば、特定個人の人格を前面に押し出す事も可能、という事らしい。

この表情と喋り方が、ウルリーケという少女本来のものか。

いのは、単純に彼女が数百年前の人間だからか、それとも一部るからか。

その辺りの細かい理屈はユキナリには分からなかったが――老人の人格も混じってい

「誤解が解けたところで、色々と相談したい事がある。元々はそれが目的だった訳だし、ロストルークの街長にも話を通すべきだろうけど……まずはあんたに話を通した方が、色々と簡単そうだ。話を聞いてもらえるか？」

「それが詫びになるならば、是非もないのじゃ」

そう言って頷くウルリーケ。

ユキナリは彼女と、そしてその背後にそびえる大樹を交互に眺めていたが、溜息を一つついてその右手を差し出した。

「取り敢えず、イグドゥーラ本体と握手は出来なさそうだから、代わりにウルリーケ」

「……うん？」

「これから宜しく」

「宜しく頼む、小さき――」

そこでウルリーケは首を傾げる。

「新しき、ふうむ？　産子ではなし。敵でもなし。我が肥やしでもなし。では、汝は、我にとって何なのじゃ？」

「……友達でいいんじゃないか？」

「……友達」



きょとんと眼を瞬かせてウルリーケがその言葉を口にする。
やがて、彼女はぱっと表情を輝かせて何度も頷いた。
「友達。友。おお、おお、久しく忘れておったわ、何せ、イグドゥーラの中には無い概念故、な」
口調こそやはり古風なままだが、ウルリーケは何やらはの姿はとても愛らしかった。
「では改めて。よろしく頼む、我が小さき友よ」
ユキナリが差し出した右手を、ウルリーケの小さな右手が握りかえす。
少しひんやりとした、それでも柔らかい手だとユキナリは思った。

奇怪な啼き声が街の空を覆っている。
鳥特有の甲高さでありながら——人語を語るその声は、らない者の耳に届けば、笑いを誘うものであるかもしれない。だが発しているのが家一軒にも相当するかの如き巨大な鳥であると知れば、誰もがその笑みを凍り付かせるだろう。

怪鳥型の亜神は、フリートラントの街の上空を執拗に旋回していた。

ユキナリに手痛い目に遭わされたのを、余程、恨んでいるのだろう。彼を見つけ出すまで此処を去る積もりは無い様だった。

しかし今、ユキナリはフリートラントには居ない。

そしてそれをあの亜神に伝えたところで、亜神が理解してくれるとは限らない。何しろ〈デュランダル〉を撃ったフィオナをユキナリと誤認した位である。人間個人の見分けがついていないのだろう。

不幸中の幸いだったのは……どうもあの亜神が見かけによらず、それ程には『力持ち』ではないらしい、という事だった。

その巨体故に、つい、人間の家屋など一蹴りで崩してしまうのではないかと思われたのだが……屋根瓦を崩したり、木の枝をへし折ったりする程度の事は出来ても、煉瓦や石を積んで頑丈に造られた家屋を崩せる程の力は無いらしい。あるいは、空を飛ぶだけあって、見た目以上に体重は軽いのかもしれない。

人々が屋内に避難している限り、あの亜神に喰われる事は無い様だ。

だが――このままでは埒があかない。

あるいは亜神がしびれを切らし、強引に建物の中に身をねじ込んでくる可能性も有る。

大抵の亜神は、『核』となる生き物を中心に、その神気に引き寄せられた動物の群れが――眷属達が、霊的な結合をして巨大な一匹の存在であるかの様に振る舞っている。逆に言えば霊格や知能が下がるのを覚悟で眷属を切り離し、ある程度まで小さくなる事も亜神には可能なのだという。

やはり、ただ隠れて脅威が去るのを待っているだけでは駄目なのだ。

ユキナリを呼び戻さねばならない。あの亜神に対抗し得るのは彼だけだ。

だが――

「そういう便利なものがあるのなら、先に言って……！」

「先も何も……詳細構わず我々から装備を取り上げたのはお前達と、〈蒼の御遣い〉だろうが！　勝手な事を言うな……！」

「あの、フィオナ様、ランズダウンさんも……声が……」

「……」

「……」

建物の陰から陰を伝う様にして――亜神に見つからぬ様にと気を配りながら、フィオナはベルタ、そしてアーロンと共に街の共同倉庫へと向かっていた。

共同倉庫は元々、各種の作物や、街の公共物、あるいは商隊の運んできた物資でまとめ

買いしたものを保管しておく為の施設である。かなり余裕を見て大きく造られている為、武装解除させられた宣教騎士達の装備は、此処に収容されている。

で――アーロンが言うには、この装備の中に、ユキナリと連絡を取る事が出来る品があるらしいのだ。

元々は、辺境に遠征した宣教騎士団が王都と連絡を取る為のものである。

かつては王都との連絡に伝書鳩を使う事も多かった様だが、生きた鳥となると、どうしても途中で異獣や亜神を含めた天敵に狩られてしまう事がある。この為、昨今は代替の品を使う事が多いそうだった。

即ち――

「此処……だけど」

裏口から倉庫の中に入るフィオナ達。

屋根のある場所――とりあえず亜神に襲われる心配が無い場所に入った途端、アーロンは背筋を伸ばし、フィオナの見慣れた傲岸不遜な態度で言った。

「よし、捜せー　大急ぎでな！　これ位の木箱で、赤と白の文字で書かれた――」

「偉そうに指示しないで！　っていうよりあんたが先ず捜しなさいよ！」

「私は聖油瓶を捜す！」

怒鳴り合いながらその連絡手段の品を捜す二人。
「そもそも武器とか甲冑とかは盗みに入って勝手に持ち出したんでしょうが？」
先に亜神と戦っていた時の武器は、元々宣教騎士としてきた際に装備していたものだ。
「だから、あれはアーノルドの奴と、奴に同調したバルターク卿が勝手に――我々は、たまたま残されていた武具を有効利用したまでというか……いや、元は我々のものだろうが！　持ち出して何が悪い!?」
「ユキナリに負けて徴発されたんだから、もうあんた達のものじゃないわよ！」
「あ、あの……フィオナ様」
「なに!?」
「ありましたけど……」
おずおずとベルタが差し出してきたのは、アーロンの言う通り、赤と白の文字でハリス真教会の名と、それに『伝声鳩』と記された木箱だった。
「これがそうなの？」
「うむ。守護聖人像と同じく教会所属の優れた職人達が創り上げた、絡繰りの鳥だ！　おお前達の様な田舎者には想像も付かない技術の塊で、教会の奇跡たる聖油で動き――」

「なんで、あんたがそんなにうんざりした様子で言いながらも、フィオナが箱を開くと――や小さな歯車を組み合わせて造られた胴体と、本物の鳥そっくりの羽根を具えた作り物の鳥が眠っていた。そっと手で掴んで取り出して見ると、見た目以上に軽い。

「――これで操れるの？」

見れば一緒に音叉が何本か入っている。

「勝手に触るなー　繊細なものなのだぞー」

言ってアーロンがフィオナの手から『伝声鳩』を取り上げる。

どうもこの絡繰り、音叉による音の組み合わせで操れる上に、れた聖油の瓶にもそれぞれ音叉を取り付けておく事で、ある程度せる事が出来るらしい。この辺りは守護聖人像と同じなのだろう

「おい、シリングス。お前の出番だ」

絡繰りの鳥を弄っていたアーロンがフィオナを手招きする。

「何なの、触るなって言ったり出番だって言ったり」

「触るな。それは変わらん。これには名前の通り『声』を伝える働きがある。お前の声を聞いて覚えて、辿り着いた先でそれを喋る」

「声を……？」

「お前の声で〈蒼い御遣い〉を呼べ。女の声の方がよく通るから、簡潔にな」

「……分かった」

差し出された人造の鳩を前に、頭の中で伝えるべき言葉を整理しながら――フィオナは深呼吸をした。

●

返して貰った〈スレイプニル〉に乗ってロストルークの街の人々は総出で、しかも恭しく頭を垂れてユキナリ達を出迎えてくれた。

「誤解は解けた。それを伝えておいたのじゃ」

そう得意げに言うのは、同行してきたウルリーケである。

どうやら先に別の眷属を街に向かわせて、ユキナリ達がイグドゥーラの、そしてロストルークの敵ではないのだと報せておいてくれたらしい。元々イグドゥーラの眷属はそれぞれが中継役を務めて、かなり離れた位置に居る者にもイグドゥーラの意思を伝える事が出

来る様だった。
　生け贄に捧げられた人間を眷属にしている為、このロストルークには神と人との仲介を行うべき神官も存在しない。
　何にせよ、話が早いのは助かる。
　ユキナリ達はそのまま街長の館に案内されると、応接間らしき場所に通された。そこで改めてユキナリ達がロストルークを来訪した目的について話をする為だ。元々は神官達と鉢合わせしなければ、問題なくその話が出来たのだが。
「――交易ですか」
　少々驚いた様子で街長が言う。
　初老の、小柄だが肩幅の広い男性である。四角い顎と太い鼻が特徴の実直そうな顔立ちで、為政者として机に向かっているよりも、鍬を片手に畑仕事をしている方が似合いそうな雰囲気だった。
「確かにロストルークは農作物に関しては豊かな街ですが……しかし我々は今まで殆ど外部とのやりとりをしてこなかった。言ってしまえば我々には交易をしてまで得なければならないものが、あまり無いのです」
「……なるほど」

確かに隠れ里的な性格を持っているロストルークならば、のだろう。実際に、そうする事で独特の文化を育んできたの様式を見ていても分かる。

しかし……

「この街の全(すべ)てを見てきた訳ではないから、分かりませんが」

ユキナリは慎重に相手の反応を窺(うかが)いながら言った。

「薬は足りていますか？　いや――そもそも医者は居ますか？」

「……え？」

「伝統的な薬は、あるのかもしれませんが……」

そもそもこのロストルークは、あまり医療が発達しているとの事だったが、それが病あの廃屋(はいおく)じみた建物の中で出会った男――彼は目が見えなれは、防ぐ事が出来ないものだったのかどうか。気によるものだとして、そ……「とりめ」と呼ばれる病気が有った。現在では夜盲症と呼例えば日本でも江戸時代所では急に視界が閉ざされてしまばれており、これは暗い場、それが出来なくなるのである。ば暗さに眼(め)が慣れるのだがこれはビタミンAの欠乏が原因だと言われている。

庶民の知恵として、これを防ぐ為に江戸時代ではビタミンAが豊富なウナギを食べたというが……果たして同じ知恵が、このロストルークに有るだろうか。

ビタミンAや夜盲症だけではない。

閉鎖性の強い社会では、食生活にも偏りが生じる事が多い。その結果としてその社会独特の奇病が発生する事も有りえる。中には致命的な症状のものも有るだろう。ビタミンAの欠乏にしても、夜盲症だけでなく、成長期の子供であれば、成長不良や知能障害が出る事も有るとか。

勿論、こうした問題は長い年月の間に試行錯誤を繰り返して解決されていくものだ。

だが……良くも悪くも『救済』としての生け贄制度が有った為、この街の人間は、必死に生命にしがみつく為の手段を研究してこなかった可能性が有る。

また――

「ゆっくりと衰弱してゆく様な場合はともかく、急な事故で大状の進行が早すぎて発病すれば二日と保たない場合……イグドに合わない場合も有るんじゃないですか？」

「それは……」

街長の表情に困惑の色が揺れる。

ユキナリの読みが当たっている証拠だった。
「ダーシャは――生まれつき眼が見えなかった」
ユキナリは隣に座っている少女を示して言った。
「……なに？」
これにはウルリーケも街長も驚いた様だった。
「しかし、その娘さんは――」
「ええ。今は見えています。俺が、治しました」
「……」
しげしげとダーシャを見つめる街長。
ダーシャは流石に恥ずかしいのか、わずかに首を竦めてユキナリの服の袖を掴む。
「勿論、何でもかんでも、フリートラントでは問題なく解決しているかもしれない。色々とお互いに調べていけばストルークではそれが当たり前と思って諦めている様な事で換が出来るかもしれません」
この街には、金属を用いた道具が殆ど見当たらない。
下手をすると鉄器どころか、石器を使っている可能性すら有った。金属で出来た様々な

品は、有ったとしても非常に高価な貴重品なのだろう。
だが医療においては、どうしても精密で温度湿度による変形や劣化の少ない金属器が必要になってくる。手術のメスとまでは言わずとも、傷口を縫うだけにすら針が必要だ。
「それは……」
「死を間近に控えた者が、イグドゥーラに捧げられるのは、喜ばしく名誉な事だとは聞きましたが。しかし死なずに済むならそれに越した事は無いでしょう？　死なないまでも怪我や病気で不自由になっている人も居るでしょうが――それも治せるかもしれない」
「……」
街長はウルリーケの方を――イグドゥーラの考えを窺うかの様に、眷属の少女に視線を向ける。彼女がしかし、特に何の反応も示さないのを見ると、街長は溜息を一つついてからこう言った。
「確かにある部分では魅力的な提案ですが。しかし、その、それでは我等がイグドゥーラ様の……お力が」
若干の戸惑いを滲ませながら、街長はそう言った。
そう。地神は何らかの方法で霊力や知力を補給しなければ、周囲の環境に同化してしまう。ロストルークの街の『姥捨て』も単なる厄介払いや実利の無意識が希薄化して存在が周

い空虚な伝統という訳ではないのだ。

「その事じゃが」

それまで黙っていたウルリーケが口を開いた。

「どれだけ、とはっきりした事は分からんが、我を襲いに来る異獣や亜神を喰うだけでもある程度までは補いがつくからだろう。」

「イグドゥーラ様……しかし」

街長が難色を示したのは、それでは足りない、と思っているからだろう。

元々イグドゥーラは巨大な植物であり、その影響力は強く希薄化は他の地神以上に早いかもしれない。

「このウルリーケが、初めて我と繋がった時にな」

何処かしみじみした口調でウルリーケは言った。

「母に会いたい、父に会いたい、会えなくなるのが寂しい、そんな考えで頭の中は一杯じゃった。そもそも山に入ったのも、母親にキノコのシチューを食わせたかった、その一心での。かつての――ただの樹であった頃の我には分からぬ気持ちではあったが、長らく汝等、産子を見守り、数多くの贄を捧げられてきて、何となく今はそれが、分かる」

ウルリーケは柔らかな笑顔を見せる。

幼い顔立ちに浮かべる、しかしそれは何処か母を想わせる笑みだった。
「未だ生きる為の手段が有るというのならば、それを講じれば良い。死にたくないと思うのは生き物の常じゃ。それは獣も鳥も、そして草木も変わらん。我に気を遣って気持ちをねじ曲げる必要は無い。充分に生きたと自分達で納得が出来ればそれでいいがいい」
そう言ってウルリーケは、それから我が許に来る様にと少し腰を浮かして街長の頭を撫でた。
見た目は十歳程の童女が、自分の親、いや祖父にすら見える男の頭を撫でる姿は、奇妙だが何処か微笑ましかった。
「イグドゥーラ様……」
「――その事なんだが」
ユキナリは傍らのダーシャに目配せをして言った。
「ひょっとしたら、生け贄は使わずとも、何とかなるかもしれない」
「……どういう事です？」
「――聖油」
答えたのはダーシャである。
「ハリス真教会が『奇跡』を演出する為の、もの」

「……奇跡を？」

「錬金術により造られた、液体。熱や力をその内に蓄える事り、元々はその為の、ものこの辺りの説明は目が見えないながらも助手として錬金術ヤの方が正確に、かつ分かり易く出来る。

「ハリス真教会の大聖堂、では、信徒の祈りを、霊力を、蓄いる。聖油を元に様々な代物が動くだけでも充分に奇何も知らぬ一般信徒にしてみれば、守護聖人像などというそれらは血にも似た紅い液体によって支えられた奇跡なのだ。

「元々、亜神や異獣が人間を、脳を、喰おうとするのは、霊力を豊富に含むから。霊力は知性を支えるもの。人間はありとあらゆる生き物の中で、最も霊力を豊富に含む。霊長と言われる所以。その人間から祈りという行為を媒介にして、霊力を抽出し、聖油に蓄積する事で、霊力の保管と、随時使用が可能――」

「……分かる？」

「まあ、何とか」

そこまで言ってから、何かに気づいた様にダーシャは眼鏡の奥で眼を瞬かせた。

と曖昧に笑ってユキナリは頷いた。
眼を向けると頷いたので、街長も、ウルリーケ――いやイグドゥーラも何とか話についてきてはいるらしい。
「つまり……生け贄の儀式の代わりに、その聖油を用いて、街の住人が祈りを捧げる儀式を行えば……？」
「代替可能」
街長の言葉に、はっきりとダーシャは頷いた。
「聖油は、材料さえあれば、私が作れる。ユキにも、作れる。の伝授も、可能。道具は、必要だけれど」
「おお……」
街長は改めて驚きの表情を浮かべている。
伝統というものは現在と過去を繋ぐ大事な絆である訳だが、念してしまえば、新たな発想の流入を拒む思考停止になり得る都合が無かったが故に、ロストルークの街では生け贄の儀式をう発想が無かったのだ。
「まあ、いきなり何もかも変えろ、ってのは無茶だと思うが、選択肢が有るのは良い事だ

と思う。検討してみてくれ
何やら上手くいきそうな空気を感じてユキナリは胸をなで下ろす。
聖油を含め、実際にどんな品を交易するのかはこれから先、詰めていかねばならない話だろうが……ロストルークがその気になってくれたならば、フリートラントは今より豊かになれる筈だ。そして豊かになれたならば、街全体で孤児院の子供達を養う余裕も出てくる筈である。
「そういえば、フリートラントから来た神官と騎士がおるが」
「……あ」
ウルリーケに言われて、ようやくユキナリとダーシャは全ての元凶とも言うべき者達の事を思い出した。
「彼等の処遇はどうするかじゃが。我を謀ったのは間違いないじゃが。じゃが異獣に襲われ、仲間を喰われてまでロストルークにやってきた以上、彼等にもそうせざるを得ない理由はあるのじゃろう。万死に値するとまでは言わぬが、このままという訳にもいかん」
「それは――」
ユキナリがふと思いついた案を口にしようとした、その時。

――ユゥウウウキィイイナァアアアリイイイイイイイイイイッ！

「――!?」

まるで雷鳴（らいめい）の様な大きさで――頭上からユキナリの名を呼ぶ声が降ってきた。

――タアアスゥウウウケェエエエテェエエエエエエ!!

「な、なんだ、なんだ？」

「外からの声の様じゃが」

「こちらからですね」

街長が窓に歩み寄ると、その鎧戸（よろいど）を開いた。

ユキナリ達は街長に礼を言い、窓に駆（か）け寄（よ）って外を見る。

「――ユキ、あれ」

ダーシャが空を指さした。

雲一つなく晴れた蒼い空に、何か白いものが飛んでいる。

羽ばたいている所を見ると鳥にも見えるのだが……まさか鳥がロストルーク全体に響（ひび）

き渡る様な大声で『ユキナリ、助けて』などと訴えてくる筈も無い。

しかも叫び声であるせいか、上空から聞こえてくるせいか、あれはフィオナの声ではないだろうか。

その鳥擬きは、ロストルークの空を旋回しながら、『ユキナリ』と繰り返している。

「この間のって――まさか」

あの四枚翼の空飛ぶ亜神の事か。

ユキナリに殺される寸前までいったというのに……ダーシャなのか、全く懲りていなかったらしい。復讐か、あるいはユキナリに再戦を挑む積もりか、とにかくアレがフリートラントを襲ったのだ。

あの鳥擬きがどの位の速度で飛べるのかは分からないが、一瞬でフリートラントから此処まで来たという事はあるまい。既に街が襲われてからそれなりの時間が経過している可能性が高かった。

「俺の留守中に……！」

一応〈デュランダル〉は三挺ばかり造って弾薬百数十発と共に置いてきた。

だが相手が通常の――獣の亜神であるならばともかく、空を飛ぶ亜神となると、射程の

短い拳銃弾を使用する〈スレイプニル〉では、分が悪い。使い尚更、命中は覚束ないだろう。

となれば……

「くそ、〈スレイプニル〉でも半日はかかる……！」

その間、フィオナ達が持ちこたえられるかどうか。最悪――既にフリートラントは亜神に蹂躙され、何人、あるいは何百人の死者が出ている可能性が有った。

「一刻も早く帰らないと」

焦燥感に掠れる声で言うユキナリ。

街長の館を飛び出そうとした彼の――その手を、掴む者が居た。

「……ウルリーケ？」

「詳しい事情はよくわからんが、急ぎ、フリートラントに戻らねばならないのじゃな？」

ユキナリの手を掴んだイグドゥーラの眷属は、そう確かめてきた。

「そうだけど――」

「ならば我が、力を貸せるやもしれん」

「……え？」

ユキナリは思わず眉を顰めてウルリーケを見つめた。

ウルリーケに、いやイグドゥーラに、ユキナリがフリートラントに戻るという上で、どの様な手助けが出来るというのか。イグドゥーラなどは自らはその場から全く動けない大樹である。ウルリーケにしても他の眷属にしても、運動能力には目を見張るものがあるが、ただそれだけだ。

「来るがいい。詳しくは道すがら話す」

ウルリーケはそう言った。

いざ現物を目の当たりにすればそれは――馬鹿馬鹿しくも壮イグドゥーラの本体は巨大な樹木である訳だが、その支配力は周辺の植物ほぼ全てに及んでいる。必要とあれば細胞分裂を極限まで加速して必要な場所に必要な形の植物を生み出す事も出来る。

恐らくは――その応用なのだろう。

イグドゥーラ本体には劣るが、樹齢数百年を経ているであろうかという巨大な――樹木。

その二本の樹木の、一際太く長く張り出した枝に、蔓を編んだとおぼしき長大な縄が掛

けられていた。そしてその縄を――いや『弦』を、眷属達が、全員で引いていた。
元より人の姿をしてはいても、人よりも強い力を持つ眷属達である。彼等が引く『弦』に繋がれた枝は、折れていないのが不思議な程に大きくしなり、『弦』そのものがみしりと音を立てているのが聞こえた。
そう。これはつまり――
「スリングショット――いや、弓矢か」
さすがのユキナリも眼を丸くしてそう呟く。
そう。これは人間の扱うものの数十倍の規模を持つ弓だ。
「そう。弓じゃ。ただし射るのは矢ではないがの」
とウルリーケが言う。
「つまり、これで俺をフリートラントまでぶん投げようって事か」
「その通りじゃ」
ウルリーケは頷いて笑顔を見せた。
まるで愉しい悪戯（いたずら）を思いついた幼児の様だ――いや、先のイグドゥーラの言葉を信じるならば、これがウルリーケという童女の本来の性格と表情なのかもしれない。
「無茶苦茶だ……」

「山を丸ごと焼き払おうとした男の口にする言葉でもあるまい」
「……ま、そうだな」
先のイグドゥーラとの駆け引きの際に作った火薬は、既に元り湿度の高い環境に放置されていれば、滅多な事で爆発はしなかっただろうが。
「我と戦った際に見せた――あの姿。立派な翼が備わっていたあるまい？」
「いやまあ飾りっていうか、本来は大量かつ高速で物質変換を実行する際に生じる、余剰ある。ユキナリがあの〈蒼鋼の羽ばたく為の翼じゃないけどな」らめくのはこの為だ。〈冒涜者〉の姿になった際、その周囲の風景が陽炎の様に揺
「けど自分の意思で動かす事は出来る」
滑空に使う程度ならば、問題なかろう。
「それは重畳。では――ユキナリ」
ウルリーケは他の眷属達が限界まで引いている『蔓』の部分を示した。
そこには、驚いた事にユキナリが先にダーシャを守る為に形成した半球状の『盾』が既に取り付けられていた。あそこにユキナリをつがえようというのだろう。

「小娘。確かダーシャといったか」
自らは十歳程度の童女の顔と身体をしながら、ウルリーケはさすがに尋常の人の身では危険じゃ
ヤに向かってそう言った。
「汝は此処に残るがいい。ろうから――」
「うん――嫌」
即答だった。
さすがのウルリーケも驚いて言葉に詰まった様だった。
「いや、ちょっと待て、ダーシャ。いくらなんでも」
「――ユキ」
ダーシャはユキナリの服の袖を掴むと、首を振る。
「一人では、行かせない」
「しかしだな」
「私はユキの味方、だから」
「……」
「いつも側に居る、から」
そう言ってダーシャは手を伸ばしてユキナリの頬に触れる。

「何処までも一緒。でないと、ユキの味方が、できない、から」
「……分かった」
ユキナリは溜息をつくと、小さく肩を竦めた。
「こいつ、これでなかなか頑固なんだ。今は説得してる時間が惜しい。俺が責任を持つから一緒に射ち出してくれ」
「相分かった。大事な味方、落とさぬ様にだけ気をつけられよ」
「分かってる」
ウルリーケに頷いて見せると、ユキナリは――意識を集中する。
青白い光が彼の全身を包み込み、その内側から滲む黒鉄の色と混ざり合う。ユキナリの姿は程なくして蒼と黒の鎧を帯びたものへと変化し、最後に硝子の様な細片によって形成されたきらめく翼がその背中を覆った。
「いくぞ」
ユキナリは両手でダーシャを抱き上げると、『盾』の上に乗って身を屈める。
ダーシャもまたユキナリの肩から首に手を回して抱きついた。
そして――
「――射るぞ」

秒読みも何も無く――ただその一言。
次の瞬間、眷属達の手が一斉に離れ、『弦』が猛烈な勢いでユキナリ達を空中へと射出していた。
「……――」
瞬間的に視界が暗くなったのは、全身の――特に頭部の体液が加速によって無理矢理、下半身へと追いやられたからだろう。ブラック・アウト。航空機で3Gや4Gといった急加速を行った際にしばしば生じるとされる現象である。
「う……ぐ……」
腕の中でダーシャが苦しげな呻きを上げる。
無理も無い――ダーシャは飛行機に乗った経験どころか、空を飛ぶ事も初めてだ。風防硝子も無い、しかも剥き出しのままとなれば、失神しないだけでも立派なものだろう。
（大丈夫だ。大丈夫）
ユキナリは言葉を掛ける代わりに、ダーシャを抱きしめる腕に力を込める。
そして――
「……ッ」
充分に昇りきった――そう判断した瞬間、ユキナリは〈御遣い〉の翼を広げていた。

陽光を受けて煌めきながら風に乗る、人造の翼。
何もかもを眼下に置き去りにして、ダーシャと二人、空中に
ナリ達はフリートラントに向けた滑空に移行した。
きしりきしりと輝く翼を軋ませながら、姿勢制御。
「……いける」
その確信と共に、ユキナリはより強くダーシャを抱きしめる
〈蒼鋼の冒涜者〉は今、助けを待つフリートラントに向け、大
舞う。追い風を受けてユキ
空を駆けた。

●

奇声と共に、建物の壁が挟られる。
怪鳥の亜神は――さすがにしびれを切らした様だった。ユキ
を立て、手当たり次第に建物を攻撃し始めたのである。
勿論……力は強くとも身体の軽い鳥型の亜神は、煉瓦や石を
すだけの力は無い。だが木造の扉や窓の鎧戸は――特にその蝶
でも充分に破壊出来る。その事に鳥型の亜神は気づいた様だっ
た。

「脳ッ、ヨコセ――脳ッ――脳ヲ喰ラッテ、我ハヨリ強クナル……！」

壊した窓から頭部をねじ込んで叫ぶ亜神。

フィオナの避難命令を聞いて、建物の中なら安全と思っていた住人達は、悲鳴を上げて部屋の奥へと逃げ込んだ。幼児ならば丸呑み出来そうな巨大な嘴が、獲物を求めてがちんがちんと打ち合い、火花すら散らす様には、誰もが震えるしかなかった。

しかも――

「脳～ッ！　脳味噌チュルチュル～喰ッテ喰ッテ、ヨリ賢クナルゥ……！」

ずるり――と窓から頭部を突っ込んでいた亜神の輪郭が崩れる。

次の瞬間、数体の――亜神本体よりは遙かに小さな怪鳥が、鷹や隼といった大きめの肉食鳥程度から、小鳥程度の大きさのものまで様々だが――それらは、身震いすると亜神の頭部から分離して、室内を飛び始めた。

眷属である。

元々亜神の身体は『核』と、それを果たして構成される。いわば群れが一つの生物として動いているのだ。その気になれば亜神は自分から分離させた別の個体が多数霊的結合を、手足の如く使役する事も出来る。

住人達は慌てて扉を閉めて更に奥に逃げるが――もうこうなっては、屋内も安全とはと

ても言えなかった。

地下室のある家や商店などは、まだいい。

だが、単なる木造の納屋などは、隠れていても気休めにすらならない。亜神が崩してしまう事だってあるだろうし、眷属があちこちの窓や戸口、隙間から入り込んでくる。

そして――

「こっち……！」

ベルタは逃げ遅れたのではなく、何処に逃げていいや。正しくは彼女が逃げた『妹』達を集め、半壊した納屋の中で息を潜めていた。

ま右往左往していた孤児院の『妹』達を集め、半壊した納屋の中で息を潜めていた。

あと少しだった。

ほんの少し――通りを隔てた向こうに、見るからに頑丈な煉瓦造りの倉庫が在る。入り口を入ってすぐの床に、地下室へ繋がる入り口も在る。あそこに逃げ込めれば助かる――筈だった。

だが今……亜神とその眷属達が、こちらに向かってくるのが見える。

自分一人ならばともかく、幼い『妹』を二人も三人も連れて走るのは無理だろう。

「ベルタ姉様、怖いよ……」

「大丈夫よ。私がついてあげるから」
しがみつく幼子の背中を撫でながらベルタは言った。
「私たち、食べられちゃうの？　あの鳥に？」
「あれって地神様じゃないよね？」
「……」
ベルタは唇を噛んだ。
孤児院の娘達は、神官達から『地神に捧げられる事は名誉である』と繰り返し教えられてきた。だから彼女等は地神に喰われる事については、比較的恐怖が薄い。だが逆に言えば――地神以外の獣に喰われる事は、彼女等にとって、存在理由そのものを否定される恐怖である。
「ベルタ姉様……」
「……」
もう、大丈夫とはとても言えなかった。
もうすぐ亜神と眷属はベルタ達に気づくだろう。
咄嗟に飛び出してきてしまったので、ユキナリから賜った〈デュランダル〉も倉庫に置き忘れてきてしまった。もっともベルタが持っていても、上手く使えたかどうかは怪しい。

結局、自分はどこまで無力な、ただの小娘だ。

地神に喰われる事でしか、誰かの役にも立てなかったあの時から、何も変わっていない。

ならば……

「いい？」

ベルタは自分にしがみついている『妹』達を引きはがし、一人一人の顔を見てからゆっくりと言った。

「あそこに、煉瓦造りの建物が見えるよね。お姉ちゃんが一生懸命走って、あの建物の中に飛び込むの。入り口のすぐ脇の、床に、大きな四角い扉なのがあるから、それを開けて、その中に入りなさい。転んでもいいから、起き上がって、また走るの。分かった？　出来る？」

泣かないで、起き上がって、また走るの。分かった？　出来る？」

「……」

幼い『妹』達は、一人一人目線を合わせてやると、怯えの表情を浮かべながらも頷いた。

「うん。じゃあ――いくよ」

ベルタは『妹』達から離れると、瓦礫の陰から通りの奥を見遣る。

丁度――多数の眷属を引き連れた亜神が、こちらに向かってくる所だった。

「――走ってー」

そう命じると同時に――ベルタは亜神と眷属の群れに向かって歩き出した。
両手を広げて、亜神や眷属達によく見える様に。自分は此処に居ますよと訴える様に。
自分が積極的に亜神に近づいて喰われれば、時間が稼げる。
そう思った……のだが。
「――!?」
ベルタの横を、猛烈な速度で数羽の眷属が通り過ぎていく。
「あっ……えっ……？」
思わず振り返って、ベルタは自分の愚かさを思い知る事になった。
『妹』達はベルタの言いつけに従って走っている。転んだ子も泣くのを堪えて身を起こしているのが見える。だが――その動きは、眼の良い鳥型の亜神や眷属の注意を、むしろ引いてしまったのだ。
鳥は……空中を飛ぶ虫すらその嘴で捕らえる。あるいは猛烈な速度で飛行しながら、地の一点に隠れている獲物を発見する。動いている対象を視認するという点において、その視力は全く人間の比ではないのだ。むしろ自分達の前から逃げだそうと動くものを見れば、本能的にそちらを追う。
「や……やめっ――」

数羽の眷属が、転んだ幼子に群がろうとする。
ベルタの位置からはもう――駆け寄っても間に合わない。
同時に、ベルタの背後から亜神の甲高い声が聞こえた。
「脳味噌～ちゅるちゅるシタイ～」
周囲が陰る。亜神の真下に居るのだという事は分かった。
もうどうにもならない。『妹』達も。自分も。
絶望にベルタがその場にへたり込もうとした瞬間……
――銃声。
「馬鹿！　走りなさい！」
倉庫の開かれた入り口から、半身を乗り出す様にして〈デュランダル〉を撃っているのはフィオナだった。
勿論、彼女もまた〈デュランダル〉の扱いについては何の修練も積んでいない素人だ。
空飛ぶ亜神やその眷属には、狙っても滅多に当てられるものではない。フィオナは装填桿を操作して立て続けに〈デュランダル〉を撃ったが、特に命中した様子は無かった。

ただ――

「ヒイっ!?」

「ギイイ!?」

明らかに眷属達がひるんでいるのが、ベルタの眼から見ても分かった。

覚えているのだ。亜神の肉体として一体化していた際に、

に加えられた攻撃と、その痛みを――眷属達も覚えているのだ。あの雷鳴の様に大きな音

を立てる道具を人間が使うと、傷を付けられるのだと。

そして――

「本当にどうしようもないな、貴様等は！」

フィオナの脇から飛び出してきたのは、驚いた事にアーロンだった。

鎧も着けていない、騎兵槍も持っていない、だが代わりに彼は〈デュランダル〉を手に

してベルタの『妹』達の所に駆け寄り――

「後先考えずに飛び出すなど――田舎者の糞餓鬼が手間をかけさせるなッ！」

あろう事か、彼女等を次々と倉庫に向かって放り投げていた。

実際にはそう高く投げるのではなく、むしろ滑り込ませる様な動きだが――ベルタの

『妹』達は悲鳴を上げながら地面で一度跳ね、倉庫の中へと転がっていった。

全身鎧を帯び、長大な騎兵槍や、分厚い盾を手に戦う訓練を施された騎士の腕力は、痩せ細った幼児など軽々と投げてしまう。

「眷属程度、この宣教騎士アーロン・ランズダウンにかかれば――」

そう言ってアーロンは飛びかかってくる眷属を〈デュランダル〉で斬り捨てる。

「ほうっとしてるな、走れ、小娘ッ！」

「ベルタッ！」

アーロンとフィオナの叫びでベルタは我に返る。

だが――

「――脳ッ！」

恐らくは頭上の亜神が一際強く羽ばたいたのだろう、走ろうとしたベルタは、猛烈な突風に背中を叩かれて地に転がった。

「痛……」

転んだ拍子にベルタは仰向けに、空を見上げる事になった。

天に蓋をするかの様な巨体が、悠然と降りてくる。その周囲には数羽の眷属。凶器そのものである巨大な鉤爪が、ベルタの頭部を刈らんと伸びて――

「だあああああああ

彼女が崇敬して止まぬ、フリートラントの守護神。

「〈蒼い御遣い〉……！」

「ユキナリ！」

アーロンとフィオナも驚きの声を上げる。

見ればユキナリと一緒にダーシャも亜神の背にとりついている。彼女と亜神の巨体に引っかけて――巻き付けている。二人はしっかりとその紐を握色の紐の様なものを亜神の羽根と眷属の屍が亜神の巨体

「ギイイイヨオオオオオオオッ！」

亜神がユキナリとダーシャを振り払おうと藻掻くのだが、

っている様で、落ちる様子は無い。

代わりにユキナリとダーシャの銃が轟音を発し、再び血と

から散るのが見えた。

「ユキナリ様が……！」

「地神様がお戻りになられたか……街の住人が建物の窓や出入り口から顔を出す。

亜神の悲鳴を聞きつけた。亜神そのものにはとても敵わなくとも、その巨体からこぼれ落ちた眷属となら戦える、武器を手に駆け出すのも見えた。

同時に……数人の宣教騎士が、そう踏んでの事であろう。

「引きつけろ、一撃当てたら落ちるぞ！」

「眷属ごとき……！」

フリートラントを侵略に来た彼等だが、アーロンの言った通り、地神、亜神、異獣の類者、未来の信徒だ。彼等にとってこの場で戦うのは何ら教義に矛盾しない、という事か。

そして――

「ユキナリ様……！」

ベルタは身を起こして、場の流れを一変させた救いの主を見上げる。

一度ならず二度ならず……彼は絶望に身を浸し死の淵に転げ落ちそうになっていたベルタを助けてくれたのだ。

「ああ……」

自分は何と愚かであった事か。

ユキナリのものである筈のこの身を勝手に亜神に供してしまおうなどと。

無論、孤児院の『妹』達を生かす為だったとはいえ……それは、ユキナリを信じていなかったという事に、なりはしないだろうか。彼がこの場に駆けつけて自分達を救ってくれるのだと、最後の一瞬まで信じているべきだった。自分は彼に仕えるものだ。自分は彼に

べき第一の巫女だ。

「私の……私達の……神様を絶望と呼ぶ。

人の手に余る不幸の運命を得る者を人は神と呼ぶのだ。

なればこそ、それを覆し、希望の光。

闇色に凝る絶望を打ち払さえ感じるその騎士装束が、しか

黒と蒼の、何処か禍々しベルタの眼には輝かしき

希望そのものに見えた。

●

「こんの……！」

ユキナリは鋼紐を引き絞ながら〈デュランダル〉を発砲し

「今度こそきっちりロースチキンにしてやるから、とりあえ

だが不安定な体勢のせいか、銃弾が『核』の個体に――急所に届いた様子が無い。空中に在りながら、荒馬乗りそのものの曲芸をしている様なもので、ユキナリは左手で抱きしめたダーシャと共に、何度も亜神の背で跳ねた。

「ダーシャ、大丈夫か？」
「大丈、夫……！」
イグドゥーラによって『射出』された後――一気にフリートの上空にまで達したユキナリは、街を襲う亜神の姿を確認し、その巨体に向けて体当たりを敢行した。空中で体の姿勢制御は二枚の翼で可能と分かっていた上、亜神は何やらぶちかますのはそれた様で、ぶちかますのは難しい事ではなかった。
物質変換で形成した鋼紐を引っかける事にも成功した。
だが――そこからが問題だ。
「こいつの『核』は頭に無いんだよな……！」
先に戦った際、ユキナリは頭部に『核』たる個体が居るのだと踏んでいたのだが、どうやら見誤りだったらしい。だからこそ殺したと思い油断した所を、逃げられた。
しかも、この亜神は、明らかに以前よりも大きい。
恐らくは逃げた後で人間かさもなくば同じ亜神や異獣を襲い、霊力を上げてより多くの鳥や獣を眷属として『召し上げた』のだろう。ユキナリが逃がしたせいで、何処かの誰かが犠牲になった可能性が有る。
だからこそ、今度は確実に『核』を殺さねばならない。

だがそれは一体、何処か。

この巨体を貫ける程の威力は、さすがに〈デュランダル〉には無いし、『核』の位置を見誤って外してしまえば後が無い。

った時の様な『大砲』を形成しても、『核』の位置を見誤って外してしまえば後が無い。

ああいった大物を連続で形成するだけの余力は、さすがのユキナリにも無かった。

「こいつの身体を物質変換で散らしていくか……？」

「ユキ――よそ見は危険」

ユキナリに左腕で抱きかかえられながら、〈レッチリ〉を連射するダーシャ。

亜神の身体から分離した眷属が襲い掛かってくるのを、彼女の放った銃弾が撃ち倒した。

「分かってるよ！」

ユキナリもまた襲い掛かってくる眷属を〈デュランダル〉で斬り伏せ、あるいは撃ち倒していく。だが問題の『核』たる個体を――その位置を未だ特定出来ない。勿論、このまま地味に亜神の身体を『削って』いく事も不可能ではないが――

「ギイイイキキキ――」

亜神が苛立たしげに吼える。

ユキナリ達を振り落とせないので焦れてきているのだろう。

「オノレ、オノレ、地ヲ這ウモノノ、分際デ――」

「スッカスカの空気頭が凝った言い回しとかしてんじゃねえよ。飛んで逃げる訳にいかねえからな。この図体だ、かゆい所に手が届くって訳でもないだろ？」

ユキナリは更に鋼紐を引き絞りながら言った。

「お前は、最初、俺等にこの鋼紐を引っかけられた時点で負けなし、もう絡まって、取れ抜けさせたのである。ユキナリの『もう絡まって取れない』という一言に、亜神は一計を

「ギ……」

短く呻く亜神。

そして――次の瞬間。

「愚カモノメガッー」

ずるりと鋼紐が亜神の巨体に――沈んだ。

食い込んだのではない。通り抜けていく。これは――

「……ユキー」

「……」

空中に投げ出されるユキナリとダーシャ。

一旦、自身の身体を構成している眷属達を分離し、群れに戻る事で、亜神は鋼紐をすり

案じたのだろう。如何に異形とはいえ、やはり神は神、鳥や獣よりも知能がある。

そして……

「墜チテ死ネッー」

空中で嗤う――亜神、いや怪鳥の群れ。

そこに向けて、銃声が迸ったのは次の瞬間だった。

「だから空気頭だっつーんだよな！」

落下しながらユキナリが笑う。

「急所、自分から曝してんだから」

「――ッ!!」

慌てて再び結合しようとする亜神だが、立て続けにダーシャの〈レッチリ〉が怪鳥を撃ち落としてゆく。最後に――巨体の中央に潜んでいた『核』たる鳥に向けて、ユキナリの〈デュランダル〉が火を噴いた。

「ギャッ……」

44マグナム弾の直撃を受けて落下する『核』の鳥。

一方――

「くっ――」

翼を広げ、落下の勢いを殺すユキナリ。
ダーシャを両手で抱きしめたまま、彼は何とか姿勢を制御しようとするが、
ートルばかりの窪みを穿ちつつも、彼は衝撃を何とか両脚を折り曲げて吸収した。
「……つつ。さすがに強化した身体でも十メートルとか墜ちるときっついな」
ぼやきながらダーシャを降ろし、立ち上がるユキナリ。
勿論、翼で落下速度を殺した上に、〈蒼鋼の冒涜者〉としての身体であるからこそ、可能だった事である。生身の人間であれば、たとえ脚から降りる事が出来たとしても、着地した瞬間に下半身の骨を粉砕骨折していた事だろう。
「ギ……ー」
ユキナリのすぐ目の前に一羽の鴉が墜ちていた。
これが――あの『亜神』の『核』である。
基本の姿形は鴉そのものだが、眼が人間のそれと似てやけに大きい上、嘴を唇が縁取っている。頭部が中途半端に人間を思わせる異様な姿だった。
「猛禽類かと思いきや、鴉とはな」
ユキナリは〈デュランダル〉を掲げながら言った。
「俺の庭で随分好き勝手やってくれたみたいだが、これでお別れだ」

「ギイッー」

先の一撃を食らって、眷属との霊的連結が完全に解けたか――既に他の鳥は普通の姿に戻り、『核』を庇う事も無く三々五々に散っていく。

「じゃあな」

ユキナリは異形の鴉に向けて引き金を引き絞る。

燃焼ガスが銃身内で弾丸を加速し――銃口から狩猟用軟弾頭を送り出す。

音よりも速く突き刺さった44マグナム弾は、異形の鴉の体内で潰れて運動エネルギーを余すところなく叩き付ける。黒い羽根が飛び散り、『核』は真っ二つに裂けながら吹っ飛んでいった。

「鴉は賢いっていうけど、こんなに歪になるのかね知恵を付けて自分を飾りすぎると、……」

ユキナリは呟いてから――ダーシャと共に背後を振り返る。

そこには、駆け寄ってくるベルタやフィオナの姿が有った。彼女らの背後には半ば呆然としながらもユキナリを見つめている街の人々の姿や、武器を片手に佇むアーロンら、宣教騎士達の姿も見える。

とりあえず……見える範囲に街の人間の屍は無い。

「おお……」

「ユキナリ様――」

彼の姿を見て、跪き祈る者。

喝采を以て彼を讃える者。

命ある事を実感し涙に暮れる者。

人々の反応は様々だったが――

「なんとか、間に合ったんだよ……な？」

「……ん」

溜息混じりの一言に、ダーシャがこくんと頷いた。

終章 ㊥ 神の遣わしたる者

空飛ぶ亜神の襲撃から……三日後。

フリートラントはロストルークからの『客』を迎えていた。

「結局の所、こ奴等の処遇をどうするかは、我等に判断できる事ではない故な」

フリートラント街長の屋敷の、応接室。

その真ん中で椅子に座っているのは、フリートラントの住人達の見慣れぬ衣装に身を包んだ童女だった。見た目は十歳かそこらの子供であるのだが、その言動は微妙にちぐはぐというか、子供っぽい物言いをする事もあるかと思えば、やけに尊大で古くさい物言いをする事もある。

ウルリーケである。

彼女の脇には、ロストルークに出向いた神官と宣教騎士の生き残りが二人ずつ――ルーマン達が両手を縛られて立っている。完全に罪人扱いである訳だが、神を欺いた代価だと考えるならば、むしろあり得ない程の寛容さだろう。

ウルリーケとイグドゥーラの眷属達が彼等を此処まで護送してきたのだ。
眷属は相互に繋がっており、間に『中継役』を置く事でイグドゥーラから離れても動き回る事が出来るという。今もフリートラントとロストルークを繋ぐ山道に、一定距離毎に眷属が配されているらしい。
「……呆れたものよね」
と言うのは、腕を組んで壁際に立っているフィオナである。
街長代行として彼女はウルリーケ達を歓迎に出て、この屋敷に招き入れた訳だが、ウルリーケやユキナリから事の顛末を聞くに至って、その表情は次第に強張り、今は軽蔑の視線を四人に……特に生き残りの神官二名に注いでいた。
「要するにユキナリとそのイグドゥーラって地神様を戦わせて訳ね。で……充分に根回しする前に、予想外にユキナリが来ちゃったから、大慌てでぶつけてみたと？」
「上手くイグドゥーラを言い含められれば、ダーシャかベルタみたいだな」
トルークに誘い込む算段だった。
とユキナリは肩を竦めて言った。
結果としては神官達の思惑通り、ユキナリはイグドゥーラと戦った訳だが……もし人質

を取られていたならば、休戦して話し合う状態になど持ち込めなかっただろう。

「ルーマン様……」

ユキナリの隣に控えていたベルタが、悲しげな表情でルーマンを見つめる。彼女にとってみれば育ての親の一人だ。如何に事実を聞かされたところで、憎みきれない部分があるのだろう。

ルーマンは何も申し開きする様子は無く、ただ無表情に床を見つめていた。

既に覚悟は決めているという事だろう。

「どうする？　ユキナリからは助命嘆願を受けておるし、我は誤解からユキナリと戦う事になった訳じゃが、結果として新しい『友』を得たからの」

「……『友』？」

フィオナが驚いた様にユキナリの方を見つめる。

「神様友達って事かな」

「……」

苦笑して言うユキナリにフィオナも苦笑で応じる。

確かにイグドゥーラの立場からすれば、ユキナリは『仲間』でないし『友』と定義するのが最も無難だろう。共に人の姿をしつつも人の理の外に居る、という意味で『人外』の存

在である訳だが……さすがにユキナリは地神そのものではなし、本体が植物でもなしで、『同類』と呼ぶのには抵抗を覚えるのだろう。

「とはいえ、処罰なし、という訳にもいかないでしょう。このまま無罪放免にした場合、また同じ事をするかもしれない。そして今度はイグドゥーラ様みたいに、友達になれる神様とは限らないわよ」

「その事なんだがな」

頬を掻きながらユキナリは言った。

「わざわざ連れてきて貰って申し訳ないんだが、この神官二人と――それから、フリートラントに残ってた他の神官も、ロストルークに連れてってくれないか」

「……え？」

と目を丸くしたのはフィオナである。

ただしこれにはルーマン達も驚いたのか、神官同士で顔を見合わせている。

「それは、何を目的に？」

「別に、厄介者を押しつけようってんじゃないんだ」

問うてくるウルリーケに、ユキナリは肩を竦めた。

「ロストルークには神官や巫女が居ない。その役目は眷属が果たしていたし、生け贄をイ

グドゥーラに捧げる儀式は、本当にただ、それだけのものだかてただけだ」

「それはその通りじゃが……」

「だけど、これからは生けの儀式一切を、神官達に取り仕切らう事になった訳だろ？　そ

「……!?」

ルーマン達が驚きの表情でユキナリを見つめる。

「良くも悪くも何百年とそ手の儀式を仕切ってきた連中だからな。色々と応用も利くだろうし、部外者には分からないコツってのもあるだろうさ。提のも何だけど、その辺は俺はさっぱりだしね」

それからユキナリは改めてルーマンと視線を合わせて言った

「別にあんた達は、特定の神様に仕えてた訳じゃないだろ？」

「それは――そうだが」

地神の交代というものは、特定の神というよりも、希にだが起こりえる。

要するに神官達が仕えてある種の作業として見た場合、神官達は誰よりも専門家と言えとも言える。確かにそれを

るだろう。
「勿論、イグドゥーラ崇拝に合わせて色々考えたり、ロストルの風土に合わせて考えたりはせにゃならないかもしれないが、その辺りは、さすがに努力しろとしか言い様がないな。何の苦労もなしに無罪放免しちゃうほど、俺もお人好しじゃないんでね」
「……」
ルーマンは――半ば唖然とした表情でユキナリを見つめていた。
「いいや。貴方はお人好しだが。愚かな程に」
「ほっとけ」
「……了承する。拒否出来る様な立場でもないだろう」
ここで……ルーマンは苦笑した。
それは恐らくユキナリが初めて見た、この神官の生の感情だったろう。
ユキナリはルーマンに苦笑を返してから、ウルリーケに向き直った。
「――それから交易について全権を委任されておる」
「うむ。それについても街長なんだが」
とウルリーケは右手を自分の胸に添えて言った。
「さっき、眷属を一定間隔で配置すれば――って話が出てたけどさ。常設っていうか、常

にイグドゥーラの眷属を、フリートラントとロストルークの間に置けないか？」

「……」

ウルリーケは――一転して、無言。一体どうしたのかとユキナリ達が不安を感じ始めた

その時、ウルリーケはぽんと手を打って頷いた。

「おお。そうじゃ。笑う所じゃなここは」

「――はい？」

「あははははははは！」

笑うウルリーケを暫くユキナリ達は呆気にとられて眺めていして表情を元に戻すと、何かを宣誓するかの様に片手を挙げて言った。

「すまん――いや、ごめん。別に汝等を嘲笑しておる訳ではなくてな。その提案はこちらからする積もりであった。

「同じ事……」

「同じ事を考えていたとは、愉快」

「行き来をする以上は、往路復路共に我等の産子を守らねばならぬのは必定じゃ。護衛を付けるのも手じゃが、眷属を一定の隔たり毎に置いた方が、獣や亜神は、眷属にすら近

イグドゥーラは地神だ。

眷属もその一部と考えた場合、中途半端な力しか持たない異

寄るまい。ましてユキナリも見た通り、元人間ではあるが、眷属はいずれも超人的な力を持っているし、周辺の植物にも干渉する事も出来る。途中で交易の商隊が襲われたとしても、イグドゥーラの眷属の所に逃げ込めば、守ってもらえる可能性は高い。

「じゃがユキナリよ。本当に良いのか？」

ふとウルリーケは首を傾げて尋ねてきた。

「良いって何が」

「見方によってはこれは、我――地神イグドゥーラが、フリートラントまで支配地に置くという事にならんか？　眷属は我の一部じゃぞ。場合によっては我の『種』をこの地に植えて、より強い繋がりを持たせる事で、この地まで我が領土にする事も――」

「何？　フリートラントの面倒まで見てくれるのか？」

「……」

ユキナリの言葉に黙り込むウルリーケ。

これは――あるいは、唖然としているのかもしれない。

「俺に異論は無いけどな。ひょっとして何かまずいか？」

ユキナリはフィオナの方を振り返って尋ねるが――彼女は彼女で予想外の話が次々と出てきて、ついていくだけで精一杯の様だった。

「正直、よく分からないけど。そうね。私は――ユキナリにかしらね。それだけ」

「……良かろう」

ウルリーケは再び片手を挙げて言った。

「友のつくべき座を盗ろうとは思わん。この地の神はあくまで伝いをするに過ぎん。これで異論は？」

「ありません。ありがとうございます」

フィオナは素直に頭を下げた。

「となると、後は――」

一同の視線はウルリーケの右脇、二人の宣教騎士に向いた。

「いつの間にか倉庫から取り上げた武器を回収してたみたいだし……暴れられたら厄介なのだけれど」

「……」

二人の宣教騎士は――若い男と壮年の男性だった――やはり何も言わない。

こちらも覚悟は決めているのだろう。神官達とロストルークに向かった騎士の内、五人は途中で異獣に喰われているし、ウルリーケに助けられなければ、間違いなく彼等もまた

死んでいただろう。
　命乞いなど今更（いまさら）――という事
「ハリス真教会の宣教騎士――
て活躍してくれたしな。俺を呼
よな、どうも」
「それはそうなのよね」
　フィオナは溜息（ためいき）をついた。
「ユキナリとイグドゥーラ様を
連中は単に護衛をしただけなの
「と――なると、普通に倉庫破
「妥当とは言いにくいけれどね
「……」
　どうも意外な話だったのか、
「お、おい、〈蒼い御遣い〉」
「……」
　若い方の騎士に呼ばれ、ユキ
ナリは眉（まゆ）を顰めながらそちらに
向き直る。

びに来たのもこいつらの道具な
んだろ？　責めにくいんだ
ってくくりじゃ、今回、街に残っ
た連中は随分、街を守っ
戦わせる計画も、そもそもは神
官達の発案であって、この
よ。計画の内容は知っていたで
しょうけども」
って盗み働いた罪で処罰する、
でいいんじゃないか？」
騎士達は怪訝（けげん）の表情で顔を見合わせる。

「後悔するぞ、貴様。我々の信仰は岩よりも硬く、理想は雲よりも高い、こんな事で懐柔されるとでも――」

「思ってねえよ」

ユキナリはかぶせる様に言った。

次の瞬間――ユキナリがそれを抜き、突きつける、その一連の動きを見た者は居ない――当の騎士ですらもまるで間の時間が抜け落ちている様な、恐ろしく速い抜突きつけられていた。ユキナリの剣であった。

「ぶっちゃけ、俺は教会の人間が大嫌いなんだ。正直、殺してしまいたい位なんだよ。元々宗教ってのが俺は大嫌いでさ、それに加えて俺の大事な恩人を殺した――嫌いの二乗だ」

今のフリートラントではユキナリの発言力は絶大だろう。

彼は事実上の神だ。法よりも道理よりも上に彼は居る。気紛れに誰かの死を宣告したとしても異を唱える者は居ない。

「なら……何故」

若い騎士は喘ぐ様に問うた。

そもそもユキナリは最初に宣教騎士達と戦った際、皆殺しにする事も出来た筈なのだ。実際、〈蒼い御遣い〉は王都で暴れた際に、少なくない人数を殺している。今更殺人を忌避する様な事もあるまい。

では――何故？

「……さあな。正直、自分でもよく分からない」

ユキナリは剣を再び背中に戻しながら言った。

●

「……どうしようもないな」

掘っ立て小屋同然の教会の前でぼんやりと座り込みながら、アーロンは呟いた。

亜神の襲撃から三日、未だ街はあちこちで混乱しているせいか、アーロン達の――宣教騎士達に課された強制労働は再開する様子を見せない。

クリフトン達が居なくなっている分、今後の強制労働はより過酷になるだろう。

「まったく、何故、この私が……」

貴族であり、騎士たる身分の自分が、奴隷の如き立場に甘んじているのは、耐え難い屈

辱だ。だが――だからこそ、アーロンにとって、忘れ難い体験だった。騎士の本分を全う出来たのだから。

考えてみれば、アーロンが誰かを守って戦ったのは、あれが初めてである。

教化遠征軍として出向いた先では、反抗する地元の住民を押さえつける――その為の戦いばかりをしてきた。守護聖人像を背景に、圧倒的武力で一方的に相手を制圧する戦いばかりをしてきたのだ。

先日の亜神との戦いは、そういう意味で全くの逆だ。

アーロン達だけでは勝ち目など無かったし、気を抜けば、ユキナリの到着を待つまでもなく、殺されていたかもしれない。余裕など無かった。

しかし、それでも、本当に――

「……おぢちゃん」

アーロンは、それが自分への呼びかけなのだと気づくのに、しばらく掛かった。

「おぢちゃん？」

眉を顰めて彼が顔を上げると……幼い少女が三人ばかり、彼者はものを知らんな！　私は未だおの前に立っていた。

「ええい、まったく、田舎って、どうしようもない――」

歳ではない！　まったくも

「……えっと。あの」
子供達が怯えた様に顔を見合わせる。
「私の事はランズダウン卿と呼ぶがいい」
「あ……えと、らんずだうん卿、のおぢちゃん」
「おぢちゃんはいらんー！」
アーロンが怒鳴ると、少女達はびくりと身を震わせたが――それでも何故か、そこから逃げだそうとはしなかった。
「で……何の用なのだ？」
「えとね。ありがとうって」
真ん中の一人が代表する様に一歩前に出てそう言った。
「ありがとう？」
その言葉でようやく、アーロンは――目の前の少女達が、亜神の眷属に襲われ掛けていた所を、彼が助けた、という事か、倉庫の中に投げ込んだ者達なのだと気づいた。
「あー……うむ」
若干の困惑を覚えながらアーロンは頷く。
考えてみれば宣教騎士として出向いた先で礼を言われるのも、初めての経験である。い

や。相手がハリス真教会の威光を恐れて、口先だけの礼を——社交辞令を言ってきた事は何度も有るが、こんな子供に、素直な感謝の言葉を貰うのは初めてだった。

「まあ、存分に感謝するがいい」

「うん。ありがとう、らんずだうんきょうの、おぢちゃん」

「だから——ああ、もういい」

溜息をついてアーロンは言った。

そのまま少女達を追い払おうとするかの様に右手を振る。

その手が、しかしふと、止まった。少女達が揃ってその小さな手を伸ばし、彼の手を握ってきたからだ。

「ありがとう」

「……」

握手した手を、少女達によって上下左右に揺すられるまま、アーロンはしばらく眼を瞬かせて彼女らを見つめていたが——

「じゃあね」

少女達が手を振って去って行くのを、彼はただぼんやりと見送った。

それからふと、視線を落として自分の手を見る。



「……」

「――気持ち悪い」

突然――そんな評価が投げつけられた。

「――む？」

アーロンが顔を上げるとそこには二つの人影が立っていた。

ユキナリと――そしてダーシャ。

アーロンを『気持ち悪い』と評したのはダーシャだ。〈蒼い御遣い〉……！」

殆ど反射的に腰を浮かせて身構えながらも、彼は憤然と怒鳴った。

「何が気持ち悪いかー　この私は――」

「子供と握手して、にやにや、笑顔」

「……は？」

ダーシャに指摘され、慌てて自分の顔に指先で触れて、そこでようやくアーロンは自分が笑っていた事に気づいた。

「ハリス真教会の宣教騎士様は、幼女好みか」

「失敬な事を言うな！」

ユキナリの言葉に、思わず喚くアーロン。
だが次の瞬間、自分が相対しているものが何なのかを思い出して、彼はまた青ざめた。
〈蒼い御遣い〉――教会が作り出した人造人間。人間の姿をしてはいるが、地神も、亜神も、そして教会の誇る最強兵力、守護聖人像すら斃してのけたバケモノだ。
そして同時に、ユキナリはこの地の神でもある。
彼がその気になれば、アーロンを指先一つで――比喩でも何でもなく、文字通りの意味で――殺す事も容易いだろう。機嫌を損ねれば、その瞬間に生命の危機に直面する。神を相手にするとは、そういう事だ。
しかし……
「俺からも礼を言う。ありがとう」
「……なに？」
「フィオナから聞いた。フィオナと、それからあの子らと……よな。俺の留守中に」
「……それ、は」
元々宣教騎士団の任務の一つだ。だから何も教義に矛盾しない。別に教会に背いてこの〈蒼い御遣い〉の味方をした訳ではないのだ。断じて。

「それで一つ提案だが」
「提案？」
眉を顰めるアーロンに、ユキナリは街門の在る方を振り返ってから、言った。
「これからロストルークとの交易を行う。道中はロストルークの地神が、その眷属を派遣して、亜神や異獣から交易隊を守ってくれるそうだが――それでも多分、手が足りない。戦う力を持ってる奴等が、直接交易隊として行き来してくれる方が、安心だ」
「……何を言って」
「武装交易隊として、フリートラントとロストルークの間を定期的に往復してくれるなら、御前達の武器は返してもいい」
「……」
唖然としてアーロンはユキナリを見つめる。
一体、このバケモノは何を言っているのか。
それではまるで――
「それから、フリートラントの周囲の農地も広げる予定だけど、そうなると、亜神や異獣の襲撃に遭う可能性も増える。交易隊としての仕事が無い時は、農地を巡回して警備してくれると助かる。別に、地神を斃して居座った後は、元々そうする予定だったんだろ？」

「それは……」

その通りなのだが。

「わ、私に……背信者になれというのか!?　栄えあるハリス真教会の宣教騎士たる、この私に!?　貴様を――事もあろうに、前教皇猊下を殺した貴様を崇めて貰う必要は無いけどな」

ユキナリはあっさりとそう言った。

「いや、俺を崇めて貰う必要は無いけどな」

「俺はそもそも宗教ってのが嫌いなんだよ。行きがかり上、地神なんてのの代役もしてるけどさ。崇めるのも御免だ。御前は勝手に、御前の信じてる神様を崇めればいいさ。その上でこの街を勝手に守ってくれるんなら、俺は大助かりだ」

「……」

「まあ、考えておいてくれ」

ユキナリはそう言って片手を振ると、ダーシャと共に歩み去って行く。

アーロンは――思わず『待て』と手を伸ばしかけて。

「……」

ふと自分の手を見つめる。

そこに残る少女達の小さな感触に……アーロンは短く溜息をついた。

フリートラントとロストルークの交易は、それから数日後に開始された。

互いに様子を見る様な形のとりされ、その評判を相互に確認する形で、現在、交易を希望している状態である。

フィオナはその作業に掛かりきりだ。

街中の住人の声を拾ってまとめるとなると、やはり街長代行ともこういう作業にユキナリの〈御遣い〉としての能力は使いフィオナの足を引っ張るだけだ。

初回の交易隊としてはアーロンと他三名の宣教騎士が出向いでいた大型の馬車を用い、各人も武装した上でフリートラントしたが、今の所、特に問題は生じていない。

そしてユキナリは――

「……概ね上手くいっているとは思うんだけどさ」

いわゆる『お試し』の交易として、幾つかの品目がやり
の一覧を双方が用意

自分の『神殿』の一室で彼は溜息をついた。
ダーシャが居て。ベルタが
此処まではいつもの風景だったのだが――
「なんで、あんたが此処に居るんだ」
「居てはいかんのか？」
そう首を傾げて聞いてくるのは……ウルリーケである。
「いや、いけないって事はないと思ったりなんか、するんだけどな？」
ちらりとダーシャの方を一瞥してユキナリは言った。
ユキナリの大恩ある錬金術師の妹は、何やらじっとりと陰気な視線を眼鏡越しに放ってきている。言葉を交わさずとも、彼女が不機嫌なのは見れば分かった。そして原因が何なのかという事も。
「そもそもあんた、イグドゥーラの眷属なんだろうが。こんな所に居て良いのか？」
「居ろと言ったのは汝じゃぞ、ユキナリ」
ウルリーケは何を今更、といった口調でそう言ってきた。
「俺……？」
「我の眷属をフリートラントとロストルークの間に、一定間隔で駐留させよと」

「あー……いや、それは、確かに言ったけどさ」
「此処は場所が良いのじゃ。中継の眷属と繋がりやすい」
そう言って頭部の角――いや枝をさするウルリーケ。
どうやらそこがアンテナの様な役割を果たしているらしい。
「携帯電話かよ」
「ケイタイデンワ？」
「なんでもない。忘れてくれ」
ユキナリは首を振った。
「それに、これでも配慮しておるのじゃぞ。ユキナリの好みに合わせ、こうしてウルリーケの人格を表に置いているのじゃ。何が不満か？」
「いや、俺の好みって――」
ダーシャの視線が益々温度を下げた様な気がして、溜息をつくユキナリ。
「あの、ユキナリ様はああいった幼い感じの子がお好みなのでしょうか……？」
と不安げに聞いてくるのはベルタである。
「誰がそんな事言った。俺が好きとか嫌いとかじゃなくて、話が噛み合わない時があるから、ウルリーケの人格を表に出してんだよ、イグドゥーラが、イグドゥーラの要素のイグドゥーラだと微妙に

自分の判断で。なあ？」
とユキナリはダーシャに同意を求める。
だが……
「……ユキ」
やはりダーシャはじっとりと恨みがましい眼でユキナリを見つめている。
「はい。なんでしょうかダーシャさん」
「女たらし」
「いや、女も何も子供、っていうか中身植物だぞ、この子、あり得ないっていうか……」
「……」
「……ああもう、分かった、俺が悪いんだろ、そうだろ？」
自棄気味の口調で言うユキナリ。
「女たらしでいいよ、もう」
「ん？　ユキナリ。ひょっとしてこのウルリーケに発情しておるのか？」
首を傾げてウルリーケが問うてくる。
「してない、断じてしてない！」
「大抵の場合、我等は自らの子孫で次世代を成せるが、動物はそうもいかんと聞く。異性と

の交配というものは、興味深い。実に興味深い。ユキナリがいうのならば、一つ実際に――」

「植物の癖に動物の生理に興味持つんじゃねえよ!?」

悲鳴じみた声を上げるユキナリ。

どうもこのイグドゥーラという地神は、植物を核とした上の集合知の様な状態になっている様で、ウルリーケの人格を表に出したところで、何処か会話がずれてくる。

彼女――と便宜的にしておくが――と友達になれた事は、物に性的な意味でちょっかいをかけられる事になるとは、思ってもみなかった。

「まあ神様だから何でもありなんだろうけどなあ……」

異類婚など神話の世界では珍しくもない。それはユキナリ

て恐らくこちらの――実際に神が闊歩するこの世界でも変わらないのだろう。

「ともあれ。後々はフリートラントの民がすぐ側に我の社を建ててくれるそうなので、ウルリーケはそちらに移る事になろうが……それまではこちらがよいのじゃぞ」

「……左様ですか」

「やっぱり、ユキ、女たらし」
「……はいはい」
執拗なダーシャの評価に脱力するユキナリ。
とりあえず――
「どうせ俺は女たらしで神様ですよ。ええもう」
神はこの地におわすれど、この世はなべて事も無し――である様だった。

あとがき

どうも、軽小説屋の榊です。

『蒼鋼の冒涜者』二巻をお届けいたします。

幸い一巻はそれなりに読者の皆様に買っていただいた様でらえる事と相成りました。一巻から引き続き本作を手にしてくださった方にまず感謝を。

さて……二巻でありますが。

元々『蒼鋼の冒涜者』は異世界チートハーレムで、銃器を始まった訳ですが。これについては私の発案というよりも、たりします。私はガンマニアである訳ですが、ガンマニアだを出すと妙な方向に凝り始めるので、自重しているというかのの企画を出す事は殆ど無いのです。

こうして続刊を書かせても

担当氏の意見が結構でかかっからこそ、どうも作品中に銃

自分からガンアクションも

ともあれ、担当K氏のご意見で異世界チートハーレム&ガンアクション、となった訳ですが。ここで一つ問題が。

「でも結局、銃で無双って、同じ武器があったら、別のキャラでも出来ますよね。それチートじゃないのでは。主人公が強いんじゃなくて、銃が強いだけっていう。でもって銃ってよく壊れるし、修理部品も必要だし、一挺だけ異世界に持ち込んでもしょうがないですよね」

「それはそうですね」

「やっぱり主人公のチートっぷりは別方向にしませんかね」

「うーん。意外とないのが、異世界で仮面ラ●ダーなんですよね。主人公が異世界に転生してから改造させるやつ」

「ほう。ないですか」

「あんまり見かけませんね。主人公が異世界に転生してから改造させるやつ」

「それ異世界に転生する意味ねーのでは」

「そうかも」

とかなんとかくだらない話をしつつも、それじゃいっちょ、仮面ライダーをしてみましょうかって事で、ユキナリは改造（というか身体としては新造か。むしろキャ●ャーン？）されて、自分をそんな身体にした組織と戦ったりする訳ですが。

「仮面ライ●ーって事で、二巻ではバイクに乗せてみました（実際には四輪ですが）」
「……赤井さんが大変でしょうねえ（基本、バイクというのはデザインするのも描くのも非常に労力がかかる）」
「大変でしょうねえ」
「……頑張って貰いましょうか」
「そうですね」
という訳で赤井てら先生にはとてもとても頑張っていただきました。
ちなみに四輪だけどバイクっぽい、というのは実際に存在する代物です。赤井さんに描いていただいたものとはまた異なる代物ですが、ヤマハが『テッセラクト』という代物をコンセプトモデルとして発表してますな。
でもって。
本作で新たに増えたヒロインでありますが。
こちらは何というか、当初はあまり深く考えて設定していたんだな』とか『大空に沢●靖子の顔が浮かぶんだな』とか歳った方が人類最大の敵になる訳ではなく、何となく『勝喰った特撮オタみたいな事をつらつら考えつつ、本編を書いていると。

「榊さん。赤井さんからデザイン案が来たんですが」
「ほう。どれどれ……幼女ですね」
「幼女ですね」
「しかも和風」
「巫女ですね」
「アリですかね」
「アリですよね」
「……まあ、じゃあそういう事で」
「……分かりました」
という担当K氏との綿密な打ち合わせの結果、むしろ人外幼女、『のじゃ』系ロリこそ正義、的なノリで本編を修正しまくる事にいたしました。さて、読者の皆さんの反応や如何に。愉しんでいただければ幸いです。
2015／8／5
……しかし（表紙絵を眺めながら）一巻二巻とこういう表紙になったりするかしらん？　∨他人事の様に。
巻新ヒロイン追加がお約束な

ファンレターのあて先　ご意見、ご感想をお寄せください

〒151－0053　東京都渋谷区代々木2－15－8
(株)ホビージャパン　HJ文庫編集部
榊 一郎 先生／赤井てら 先生



HJ文庫
596
http://www.hobbyjapan.co.jp/hjbunko/

蒼鋼の冒涜者（ブルースチール・プラスフェマ）2

2015年9月1日　初版発行

著者――榊 一郎

発行者―松下大介
発行所―株式会社ホビージャパン

〒151-0053
東京都渋谷区代々木2-15-8
電話　03(5304)7604（編集）
03(5304)9112（営業）

印刷所――大日本印刷株式会社

装丁――AFTERGLOW／株式会社エストール

乱丁・落丁（本のページの順序の間違いや抜け落ち）は購入された店舗名を明記して
当社パブリッシングサービス課までお送りください。送料は当社負担でお取り替えいたします。
但し、古書店で購入したものについてはお取り替えできません。

禁無断転載・複製

定価はカバーに明記してあります。

©Ichirou Sakaki

Printed in Japan

ISBN978-4-7986-1072-6　C0193